

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第13集

志<sup>し</sup> 貴<sup>き</sup> 野<sup>の</sup> 遺 跡  
小<sup>お</sup> 島<sup>しま</sup> 遺 跡

1990

財団法人 愛知県埋蔵文化財センター

# 序

愛知県西尾市は、かつて、六万石の城下町として古くより栄えた地域として知られ、それゆえ、先人の足跡である文化財や遺跡が多く残されています。このたび(財)愛知県埋蔵文化財センターでは、国道23号線バイパス工事に伴う事前調査として愛知県の委託をうけ、志貴野町地内に所在する志貴野遺跡と、小島町内に所在する小島遺跡の発掘調査を実施いたしました。調査の結果、志貴野遺跡では古墳時代から平安時代にかけての集落遺跡が良好な状態で検出され、碧海台地に生きた人々の暮らしにかかわる貴重な知見を得ることができ、小島遺跡では従来不明確であった矢作(古)川河底遺跡の実態を明らかにしうる可能性を見出すことができました。

今回、これらの調査成果をまとめ、ここに報告書を刊行するにいたしました。本書がひろく歴史資料として活用されるとともに、埋蔵文化財の御理解を深める一助となることを望みます。

なお、文末で恐縮ではありますが、調査の準備・実施にあたりましては、地元の方々・各関係者の皆様にあたたかい御理解をいただきました。深く御礼申し上げます。

平成2年3月

財団法人 愛知県埋蔵文化財センター

理事長 松川 誠次

# 目次

## 序

## 例言

### 志貴野遺跡

第1章	調査の経緯・経過	1
第2章	位置と地形・環境	2
	1. 地理的環境	2
	2. 歴史的環境	3
第3章	層位と遺構	6
	1. 層位	6
	2. 遺構	7
第4章	遺物	11
	1. 土器・陶器	11
	2. 土製品	18
	3. 金属製品	18
	4. 石製品	18
第5章	自然科学的分析	19
第6章	考察	26
	1. 遺構の時期別変遷	26
	2. 志貴野Ⅱ期にみる土師器煮沸具	28
第7章	まとめ	40
	別表	41

### 小島遺跡

第1章		46
	調査の経緯	46
	位置と環境	46
第2章	遺構	48
	基本層序	48
	遺構	48
第3章	遺物	50
第4章	まとめ	51
	別表・付載	52

## 挿図

第1図	調査の進行状況	1	第21図	調査区位置図	46
第2図	遺跡を台地下より望む	2	第22図	遺跡位置図	47
第3図	調査前風景	2	第23図	基本層序	48
第4図	志貴野遺跡と周辺の遺跡(S = 1/50000)	4	第24図	遺構全体図	49
第5図	志貴野遺跡と周辺の地形(S = 1/2000)	5	第25図	出土遺物	50
第6図	志貴野遺跡の地形(S = 1/2000)	6	第26図	矢作古川河床出土遺物	52
第7図	掘立柱建物A実測図(S = 1/100)	8			
第8図	掘立柱建物B実測図(S = 1/100)	9			
第9図	S K 07実測図(S = 1/20)	10			
第10図	S E 01	10			
第11図	重鉍物分析用試料実測図	19			
第12図	検出重鉍物	25			
第13図	主要遺構の変遷(S = 1/2000)	27			
第14図	土師器沸煮具実測図	28			
第15図	比較資料実測図①	32			
第16図	” ②	33			
第17図	” ③	34			
第18図	” ④	35			
第19図	” ⑤	36			
第20図	” ⑥	37			

## 表

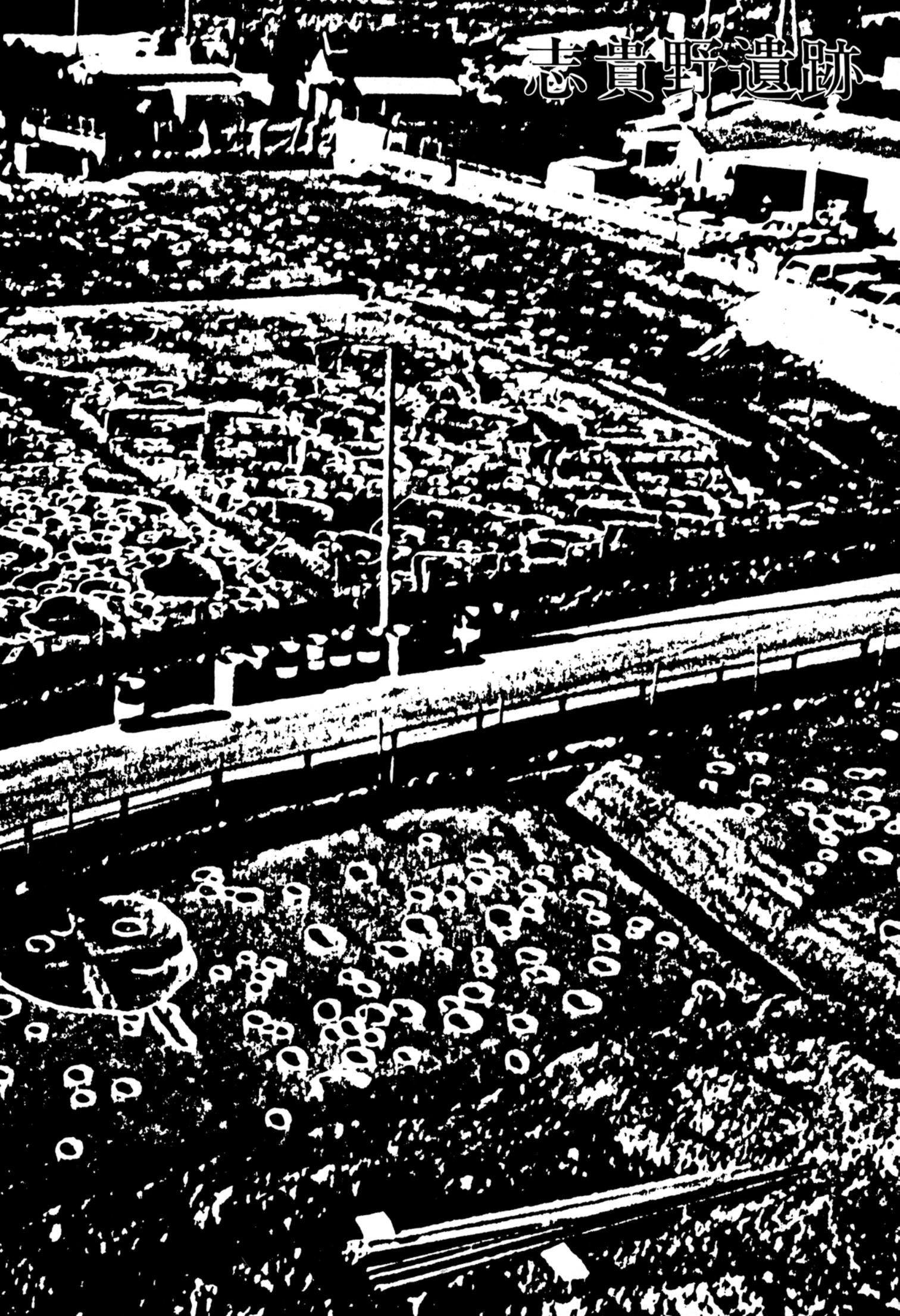
第1表	分析試料の分類	22
第2表	各試料の特色	23
第3表	分析結果	24
第4表	土師器甕の動向	38

## 図版

図版1	遺構図①(S = 1/400)	図版8	S B 07(上)・S B 11(下)	図版15	出土遺物⑥
図版2	遺構図②(S = 1/400)	図版9	S B 38(上)・S K 07(下)	図版16	出土遺物⑦
図版3	遺構図③(S = 1/400)	図版10	出土遺物①	図版17	出土遺物⑧
図版4	昭和62年度調査区全景	図版11	出土遺物②	図版18	小島遺跡
図版5	昭和63年度B区全景	図版12	出土遺物③		
図版6	遺構集中部分(上)・S B 11周辺(下)	図版13	出土遺物④		
図版7	S B 10~14(上)・S B 02~07・38(下)	図版14	出土遺物⑤		



# 志貴野遺跡



## 例 言

1. 本書は、愛知県西尾市志貴野町に所在する志貴野遺跡（55016）  
・同小島町内に所在する小島遺跡（55070）の発掘調査報告書である。（遺跡番号は愛知県教育委員会『愛知県遺跡分布地図（Ⅱ）知多・西三河』1988による。）
2. 発掘調査は、建設省名四国道事務所が進めている国道23号線バイパス建設に伴うもので、ここから愛知県教育委員会を通じて委託を受けた（財）愛知県埋蔵文化財センターが実施した。
3. 調査年度は志貴野遺跡・小島遺跡とも昭和62・63年度である。
4. 発掘調査は志貴野遺跡については昭和62年度に土屋利男・池本正明、63年度は福岡晃彦・北村和宏が担当し、小島遺跡は昭和62年度に土屋利男・池本正明、63年度は安井俊則・酒井俊彦が担当した。
5. 調査に際しては、次の機関の指導・協力を得た。  
愛知県教育委員会文化財課・建設省名四国道事務所・西尾市教育委員会・岡崎市教育委員会
6. 遺物の整理・製図などについては次の方々の協力を得た。  
阿部小百合・加藤明美・木下茂子・猿山清子・玉作美智子・山田律子（敬称略・五十音順）
7. 調査区の座標については建設省告示に定められた平面直角座標Ⅶ系を用いた。
8. 本書の執筆は、志貴野遺跡が池本、小島遺跡は1～4章を酒井、付載を池本が担当した。
9. 本書をまとめるにあたり、次の方々に御教示・御協力を得た。  
赤羽一郎・天野暢保・荒井信貴・伊藤久美子・伊藤稔・内田智久・遠藤才文・加藤安信・神村透・神谷知幸・川崎みどり・齋藤嘉彦・齋藤孝正・菅沼良則・楢崎彰一・松井直樹（敬称略・五十音順）
10. 本書の編集は池本が担当した。
11. 調査に関する資料はすべて愛知県埋蔵文化財調査センターで保管している。

# 第1章 調査の経緯・経過

## 1. 調査経緯

建設省名四国道事務所では、国道23号線の渋滞緩和を目的として、国道23号バイパス線の建設工事を開始している。この路線は、国道23号線を豊明市内から分岐し、南東方向へ豊橋市に向けて設定されている。西尾市内では、矢作川に新しい橋梁を建設し、北東部を通過する設計となっている。新橋梁の建設予定地は、現在の志貴野橋より下流50m付近に設定されている。ところがこの新橋梁の南東部分一帯には、古代の土器片などが散布し、志貴野遺跡として知られていた。このため、道路予定用地内については記録保存の必要性が生じ、建設工事前の調査として、建設省から愛知県教育委員会を通じ委託を受けた(財)愛知県埋蔵文化財センターが実施したものである。今回報告する志貴野遺跡の発掘報告は、この成果をまとめたものである。

調査は昭和62・63年度に実施した。調査区は、遺跡を南北に横断する県道桜井～西尾線を境界に、西側を62年度分、東側を63年度分とし、前者についてA<sub>1</sub>・A<sub>2</sub>・B・Zに、後者についてA～Cにさらに分割して実施した。総面積は、7000㎡である。作業工程は下図に示す段取りで実施した。なお、発掘調査の進行にともない、62年度には現地説明会を開催し、作業員・地元住民に調査の御理解と御協力を御願いとするとともに、埋蔵文化財の啓発・普及に務めた。

		62							63				
		5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	4月	5月	6月	7月	8月
62	A <sub>1</sub>	—————★							★は空撮				
	A <sub>2</sub>			—————★									
	B			—————★									
63	A						▲		—————★				
	B						現地説明会		—————★				
	C						現地説明会		—————★				

第1図 調査の進行状況

## 第2章 位置と地形・環境

### 1. 地理的環境

西三河平野部の地形を面的に見ると、高位より五段の洪積面と沖積面に区分できる。このうち碧海面は、現在の西尾市・安城市・知立市・碧南市等の主要部分を占め、標高80～5mにかけて洪積面中もっとも広範囲に展開している。碧海面は、第四氷期頃に形成されたもので、碧海層の堆積による。この層位は上方に赤褐色ないし黄褐色の粘土が堆積し、下方に進むにつれ砂質をおびる。

志貴野遺跡は、碧海面東端部に所存している。調査区の標高は、北端で12.5m、南東端で7.5mをはかり、東南方向に緩やかな傾斜を見せている。また調査区よりさらに東南には、沖積層の堆積が確認できる。この部分には、泥炭が厚く堆積している状況が国道23号線バイパス予定用地内の試掘調査によって確認できている。地元に住む古老の談によれば、この場所は、水田開発が進む以前は、一面にヨシ等が生い茂る湿原の風景を見ることができたという。この湿原より東には、矢作川の旧本流である矢作古川が所在している。現在の矢作川は、志貴野遺跡の北側を東西に流れるが、これは、近世初頭に設定された碧海台地を掘り割る人工流路である。一方、遺跡の南側1.5kmには羽角山塊の残存丘陵である八ッ面山が所在している。八ッ面山は、標高67.4m。男山・女山と呼ばれる大小の二山が並ぶ。雲母を産出することで知られている。

なお、調査地の地籍は愛知県西尾市志貴野町堤崎70番地。位置は矢作川にかかる志貴野橋の南方で、県道桜井～西尾線の沿線にあたり、東方1.7kmには、名鉄西尾線桜町前駅が所在している。

### 遺跡の景観



第2図 遺跡を台地下より望む（東より）



第3図 調査前風景（東より）

## 2. 歴史的環境

碧海台地および沖積低地微高地上には多くの遺跡が所在する。最古のものは旧石器時代終末期の有舌尖頭器の分布が認められるが、いずれも表面採集資料が知られるのみで詳細は不明確である。

縄文時代に属する遺跡は西尾市八王子貝塚が存在しているが、広域に遺跡が展開するという状況は確認できていない。

これは次段階の弥生時代についても基本的に同様で、特に前期については、安城市亀塚遺跡・楠遺跡・釈迦山遺跡で1点もしくは数点の土器が出土したにとどまっている。しかし、中期にはいるとようやく西尾市岡島遺跡・八ッ面山東南麓の遺跡群・安城市古井遺跡群の成立をみることができる。

古墳時代にはいると、丘陵上・洪積台地縁端部にいくつかの古墳の築造が知られている。**古墳時代**  
西尾市五砂山古墳は、丘陵頂部に所在する円墳で、出土した鉄製品（特に鉄鎌）の形態から、当地域最古の部類に含まれている。集落遺跡についても安城市亀塚遺跡・中狭間遺跡を代表とし、前代より遺跡数の増加が認められ、とくに7世紀を前後する時期以後は、洪積台地の縁端部を中心に生活域の拡大傾向をみることができる。なお、志貴野遺跡の成立時期もこの段階に属している。

奈良・平安時代に入ると、生活域はさらに拡大し洪積台地縁端部に加美遺跡・大畑遺跡などの成立が見られ、志貴野遺跡は一層の発展をみせる。奈良時代には、安城市寺領廃寺の整備が考えられ、東大寺式の配置を持った七堂伽藍が出現している。また、ほぼ同時期の寺院として、志貴野遺跡東方0.7kmには志貴野廃寺が存在しているが、未調査のため詳細は明らかではない。

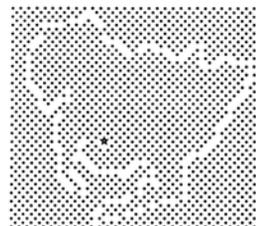
**奈良・平安時代**

鎌倉・室町時代に入ると生活域はさらに拡大し、志貴野遺跡は衰退するが、安城・西尾市域という巨視的立場に立てば、洪積台地の縁端部いたるところにこの時期の遺物散布がみられるようになり、古墳時代後期から明確化する生活域拡大の方向性は、この時期から中世後半期にかけて一応の帰結をみせるようになる。安城市本證寺に所蔵されている『本證寺門徒連判状』（1549）はこの段階の当地域の様子を伝える史料として重要で、この中に登場する地名から、現在洪積台地上に所在する集落のうちいくつかは、この時期にすでに成立していることを考えることができる。今日こうした集落の実態として、安城市加美遺跡が知られている。この遺跡は洪積台地の縁端部に所在し、地形に制約された方格子割り中に、掘立柱建物・破棄土坑・井戸等が所在する「屋敷地」と、火葬施設4基が所在する「葬送の空間」が配置された集落が検出されている。

**鎌倉・室町時代**

近世に入っても若干の集落再編成を除くと、この状況は基本的に変化は見られない。ただし、近代の明治用水開削によりこの様相は一変し、従来洪積台地の縁端部・開折谷周辺に限定されていた生活域は、水資源の確保によりさらに台地深部まで拡大し、今日言われる農業地帯の景観を形成してきたと言える。

この地図は国土地理院発行の2万5千分の1地形図「西尾」・「安城」を使用したものである



- 1. 志貴野遺跡
- 2. 古井遺跡群
- 3. 釈迦山遺跡
- 4. 楠遺跡

- 5. 中狭間遺跡
- 6. 亀塚遺跡
- 7. 加美遺跡
- 8. 寺領廃寺

- 9. 大畑遺跡
- 10. 志貴野廃寺
- 11. 五砂山古墳
- 12. 八王子貝塚

- 13. ハッ面山東南麓の遺跡群
- 14. 岡島遺跡

トーンは標高10m以上を表現する

第4図 志貴野遺跡と周辺の遺跡 (S = 1/50000)



第5図 志貴野遺跡と周辺の地形 (S=1/2000)

図  
大日本帝国陸地測量部  
「西尾・深溝村・桜井村・福岡村」  
明治26年より

## 第3章 層位と遺構

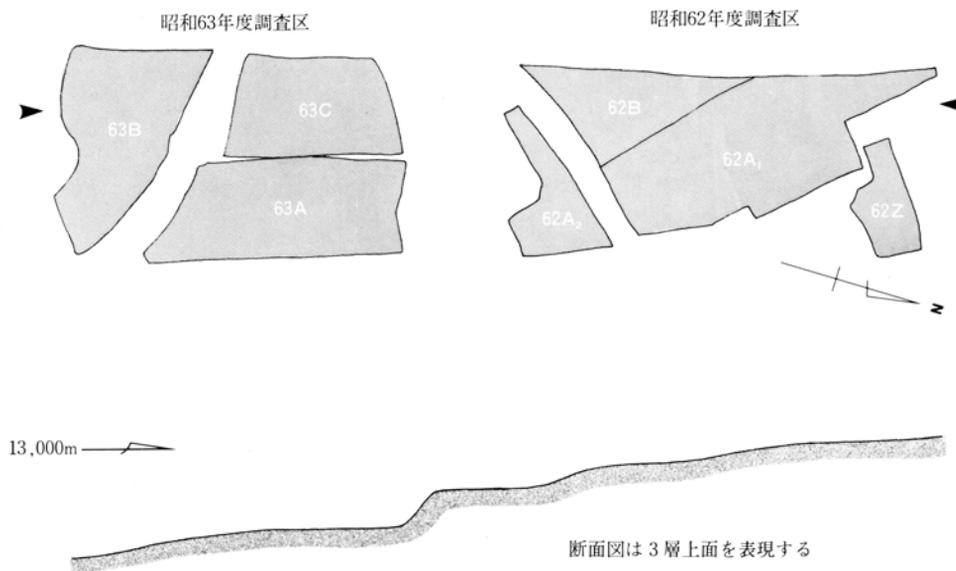
### 1. 基本層位

志貴野遺跡は、前章で述べたように洪積台地の縁端部に所存している。遺跡の基本的な層位は、灰色土層（1層）、淡茶褐色土層（2層）、赤褐色粘土層（3層）、黄褐色砂層（4層）で、3層・4層が洪積世の堆積物である。これらの基本層位のうち今回の遺構検出面としたのは3層上面で、調査区部分の現地地形もこの土層上面のレベルに影響を受けている。なお、1層・2層については、南方でやや厚く堆積する傾向が認められるが、基本的にはこの上部を覆っているに過ぎない。なお、調査区南部分については開析谷（NR01）が存在していることが調査時に明らかにされている。この谷地形は遺跡の活動以前に形成されたもので、遺跡の活動時にはすでにゆっくりと埋没の方向をたどり、現在では完全に埋没している。

以下、調査区の基本的な層位を上層より順に説明を加える。

### 層位

- 1層：耕作土層で、厚さは30cm程度、軟質である。調査区の全面を覆っており、ローリングの著しい古代～近世の土器片に混ざって、現代ビニール片などを含む。
- 2層：いわゆる遺物包含層で、厚さは20cm程度。炭化物・焼土・3層ブロックなどを含む。南方に向かうにつれて厚くなる傾向が認められる。遺構・谷地形の埋土も基本的に



第6図 志貴野遺跡の地形（S = 1 / 2000）

はこの範疇に含まれる。

3層：厚さ100cm程度で、粘質。固く締まっている。色調は赤褐色を基調とするが、下部は黄身を帯びている。

4層：厚さは確認できなかった。パサパサとして崩れやすい砂層である。直径1～3cm大のチャート転石を含む。

## 2. 遺構

今回検出した遺構は、竪穴住居・掘立柱建物・柵・土坑・溝・井戸などがみられるが、年代的には古墳時代後期・奈良時代～平安時代およびそれ以降に大別できる。これらの分布状況は全体として62年度調査区の南半分に集中する傾向を示し、この場所では遺構が複雑に切り合う状況を窺うことができる。なおこのうち、62A<sub>1</sub>区の東側半分については遺跡発見以前に耕作に伴う天地返しが実施されており、3層上面を20～30cm掘削する程度の攪乱を受けている状況にあった。従ってこの部分については、竪穴住居のような掘り込みの浅い遺構はすでに消失していることが考えられることを付記しておく。一方、63年度調査区は遺構の分布は薄く、標高7.5m以上の平坦面に限って検出できるという状況を呈しており、前述した谷地形の制約を受けている。

攪乱部分

以下、本項では遺構の種類別に説明を加えていくが、ここでは事実報告のみに留め、全体の組み合わせ・変遷などについては、第6章で改めて述べることとする。

### 竪穴住居

竪穴住居は42軒検出されている。いずれも平面が一辺4～5m程度のほぼ正方形を呈し、検出面からの掘り込みが10～20cmという形状が一般的であるが、時代が下がるにつれ、小型化の傾向もみられる。時期別には、古墳時代後期に属するもの（S B05・07・15・16・18・21・23～26）、奈良時代～平安時代に属するもの（S B01～03・11～14・17・19・22・32・34～37）、に区分でき、主軸の方位では北北西を向くもの（S B07・09～24・26～37）、北西を向くもの（S B01～06・08）に区分できる。床面には、直径30cm程度の支柱穴を四か所所有するが、検出できない例も多い。また、幅20cm程度の周溝を有する例（S B10・11・12・16・20・23・24・33～35）もみられるが、全面に連続して存在する例はS B11のみで多くはこれが部分的に確認できるにすぎない。壁面には幅20～30cm・長さ30～40cm程度のわずかな突出部が見られるものが一般的である。この突出部は壁面の中央部分に一軒一箇所設定されるが、コーナー部分に位置する場合もある（S B02・03・05・22・27）。なお、カマド前者については、北壁に存在する例（S B02・03・05・22・27）、東壁に存在する例（S B12）南壁に存在する例（S B13）がみられる。この部分は埋土に焼土・炭化物が多く含まれる他、スサ入りの焼土塊をも混入している。また、床面に被熱状況も確認できるため、カマドであったことが考えられる。ただしこれらはいずれも完全に崩壊しており、具体的な構造などについては明らかにし得なかった。なお、S B12からは、焼土分布範囲のほぼ中央から、土師器甕（10）が伏せた状態で出土しており、このカマドには、土師器甕を転用した支脚が用いられていたことが推定できる。

カマド

### 掘立柱建物

掘立柱建物は34軒確認されている。これらの大半は平面形が2×3ないし2×4程度のものである。柱穴の掘方は、平面円形がもっとも多く、検出面での直径が0.3~0.4m、深さ0.5m前後のものが大半を占めている。掘方の柱通りは必ずしも厳密とはいえず、不良なものも数例みられる。次にこれらの時期であるが、周知のように掘立柱建物は、厳密な意味での床面を検出することが困難である場合が多い。志貴野遺跡においてもこれは同様で、床面検出の困難さから明確な形での伴出遺物を検出し得た建物は一軒のみみられない。柱穴中の出土遺物も、一部に奈良時代~平安時代に属する遺物がみられるが、全体的に乏しい。また、他の遺構との切り合い関係から前後関係を判断する方法もあるが、これが可能なものは数軒に留まる。

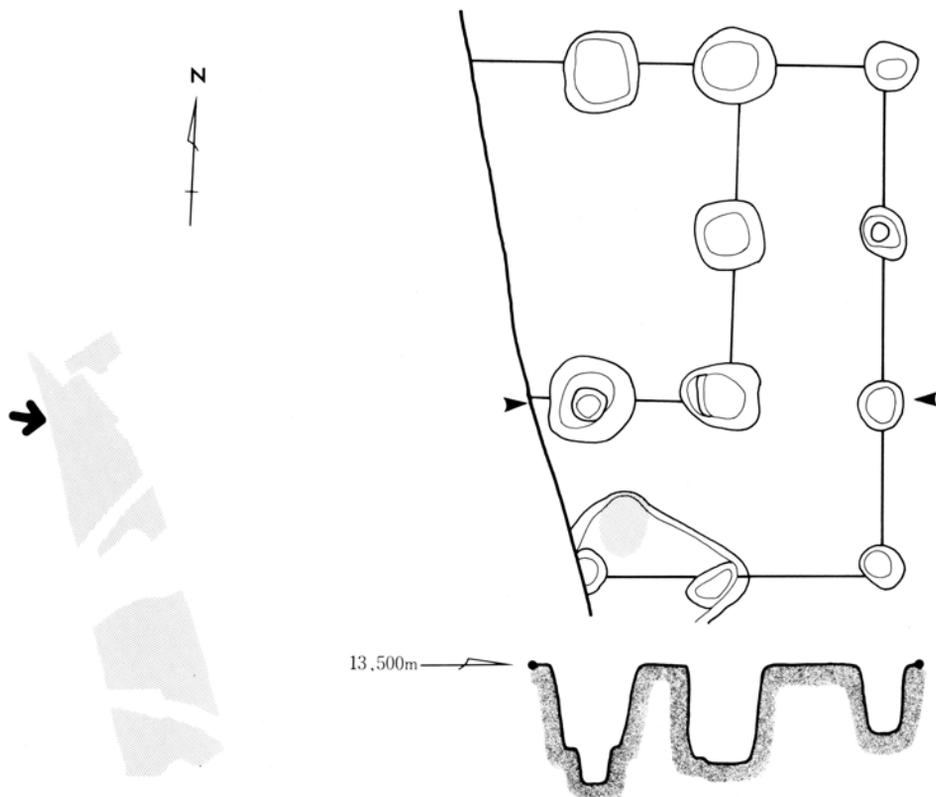
なお掘立柱建物は、廂の有無によりさらに掘立柱建物Aと掘立柱建物Bに区分できる。

#### 掘立柱建物A

S B38一軒のみ検出された。桁行は調査区外に達し規模は不明であるが、梁行は6.7mをはかる。形状は、東・西・南に廂を有するものと推定できる。検出面での柱穴は、母屋部分が平面隅丸方形を呈し、一辺1.0m、深さ0.6m、柱痕径0.2mだが、廂部分については、平面円形で、直径0.6m、深さ0.3m、柱痕径15cmと母屋部分に比較してやや小さい。

#### 掘立柱建物B

今回検出された掘立柱建物のうちS B38を除くすべてがこれに含まれる。基本的な形状



第7図 掘立柱建物A実測図・S B38 (S = 1/100)

などは前述した通りであるが、このうちやや特殊な構造を有するものについてさらにここで説明を加える。

#### 総柱の建物（SB46・57）

SB42は桁行が調査区外に達し、規模は不明。SB57は2×3の規模で、柱通りは悪い。東南隅にほぼ1×1程度を占有する土坑（SK18）を有する。埋土中より灰釉系陶器・土鍋が出土している。

#### カマドを有する建物（SB42）

SB42は2×2の規模を有する柱通りの悪い建物だが、床面積の1/3程度の土坑（SK18）を有している。土坑の平面形は、直径3.6m、短径1.7m程度の隅丸方形を呈し、南壁にカマドを持つ。埋土中より奈良時代に属する遺物が出土している。

#### 溝により囲まれる建物（SB39・SB40）

SB39は2×2、SB40は2×3の規模を有する建物。同一空間上に位置し、時間的差異を有している。西側と南側に浅い溝（SD01）が存在する。

#### 柵

柵は4本検出されている。これらは直線的に延びるやや小規模のもの（SA01・04）、L字状に延びるやや大規模なもの（SA02・03）に大別できる。帰属時期については前述の掘立柱建物と同様判然としない。前者を柵A、後者を柵Bと区分する。

#### 柵A

平面円形の掘方を有するもので、大きさは直径0.3m深さ0.2mとやや小規模である。ともに東西へと展開する。柱間の距離はSA01が東から1.6m-1.2m-2.0m-1.0m-1.7m-2.6m、SA04が東から1.2m-1.4m-1.8m-2.4mである。

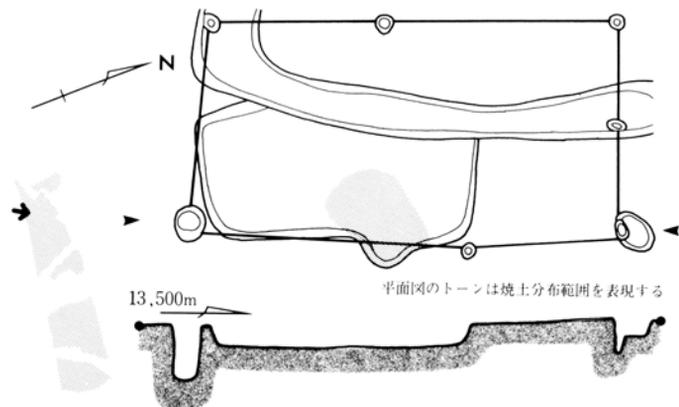
#### 柵B

柵Aと同様円形の掘方を有するが、大きさは直径0.3m、深さ0.7mとやや大きい。特にSA02は掘方に対して異常なほど深く、他の柵と比較してより強固に設定されたことが推定できる。SA02・03とも西より東へ延び、直角に折れ曲がり南に延びて行く。柱間の距離はSA02が西から5.3m-4.4m-2.0m-3.7m-1.3m-2.4m-3.1m-2.6m-2.0m-2.2m-1.8m-1.7m-1.9m-4.4m。SA03が2.0m-0.8m-1.7m-2.5m-1.1m-3.6m-2.2m-3.6m-3.8mである。

#### 土坑

土坑は今回の調査で検出した遺構のうちもっとも多数存在するが、大きさ・形状・分布

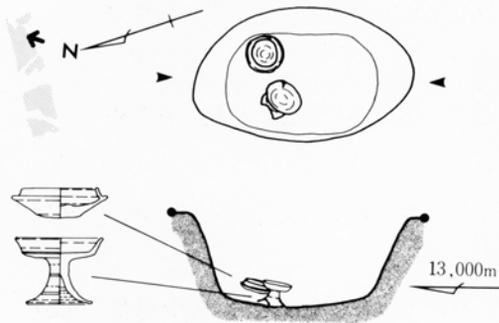
特殊な建物



第8図 掘立柱建物B実測図・SB42（S=1/100）

強固な柵

状況とも特に傾向を見出すことができなかった。また、前述した掘立柱建物に付属する土坑の他、用途を推定しうるものはない。ただし、遺物を多数出土した土坑もみられ、これらについては破棄土坑としての用途を推定し得る（SK07・09）。



第9図 SK07実測図

### 溝

溝は検出した数量はさほどではない。標準的な規模は幅0.5m、深さ0.3m程度で、SD01を除き自然地形に従う形で展開している。年代的には奈良時代に属する溝（SD01）の他、中世前半に属する溝（SD06・08・09）、中世後半ないし近世に属するもの（SD03・07）がみられる。なお溝はその推定される用途から溝Aと溝Bに区分できる。

### 溝A

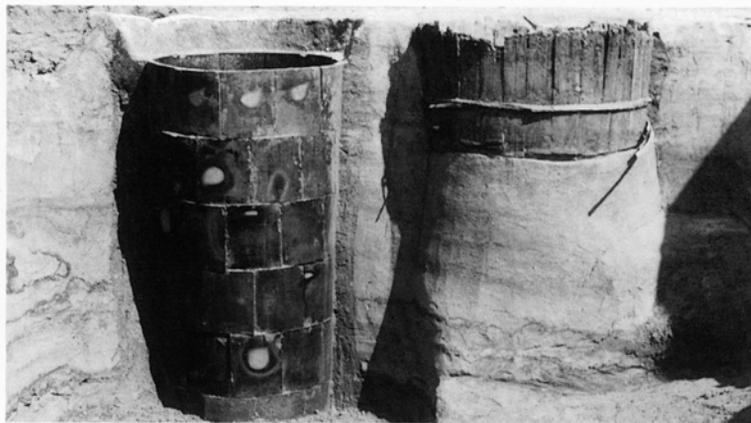
溝AにはSD01がある。掘立柱建物SB39・40の西側と南側にL字状に屈曲して所在する。幅0.5m、深さ0.2mをはかり、全長10mを検出した。

### 溝B

SD01を除く全てがこれにあたる。地割の用途を有していると推定でき、調査区周囲の畑地と、基本的に一致する。

### 井戸

掘方は直径1.1mを残す。深さ2.9m。井戸枠は基底部に材を円形に打ち込んだ後、瓦質の井戸側専用材を用い、直径0.8mの円形に積み上げている。現状で7段まで確認できた。近世に属する。



第10図 SE01（西より）

## 第4章 遺物

### 1. 土器・陶磁器

今回の調査により出土した遺物には、土器・陶磁器類、金属製品、石製品、土製品などがみられるが、量的には土器・陶磁器類が圧倒的に多い。

以下今回の出土遺物について説明を加えるわけであるが、用語などの混乱を避けるため土器・陶磁器類について事前に若干の整理を行う。

**種類**：種類としては土器・陶器および中国陶磁器がある。さらに土器については土師器、種類陶器については須恵器・灰釉系陶器<sup>註1)</sup>・施釉陶器と区分する。

**器種**：器種には椀・杯・皿・盤・蓋・壺（瓶）・甕・鉢等を用いる。なお、土師器煮沸器種具についてはさらに第6章に述べる呼称を用いる。

#### SB03

1は須恵器盤。高台を有し、ややにぶい形状を呈する。外底部は回転ヘラ削りを施すが、中央部にのみ回転糸切り痕を残す。作りはやや雑である。8世紀後半。

#### SB07

2は須恵器杯。丸みを帯びた体部を有する。底部中央に回転ヘラ切り痕を留めるが、周囲は回転ヘラ削り調整によって消されている。3は須恵器蓋。やや小振りで、天井部中央にヘラ切り痕を留めるが、周囲には2と同様回転ヘラ削り調整が加えられている。2・3とも7世紀代。

#### SB08

4は土師器甕。2類大型。黒斑を有する。

#### SB09

5・6は灰釉系陶器椀。5は三ヶ月形の高台を有する。外底部は回転ヘラ削り調整を施す。無釉。6はやや浅めの形状を有する。時期は5・6とも9世紀末～10世紀前半。

#### SB11

7～9まで須恵器。7・8は杯。ともに腰部に稜を有するが、7が緩やかであるのに対し、8はシャープである。なお、8は無高台で、外底部に回転ヘラ削り調整を施す。底部がやや歪む。9は蓋で傘形を呈する。天井部外面に回転ヘラ削り調整を加える。10・11は土師器甕。10は2類小型。10は底部を欠失するもほぼ完形である。11は1類小型に属する。7～9は8世紀。10・11も同時期か。

#### SB12

12・13は須恵器杯。12は高台を有する形状である。高台脇は狭く、腰部は緩やかな稜を有する。外底部はていねいな回転ヘラ削り調整を施す。13は底部を欠失するが、腰部の形状から無高台の杯と推定できる。12・13とも8世紀中頃～後半。

#### SB13

14～16は須恵器。14・15は杯。14は深手である。15は無高台で、やや丸みを帯びた体部

を有する。外底部には静止糸切り痕が観察できる。16は蓋で鈕を有さない形状。口縁部はにぶく屈曲する。天井部には回転糸切り痕が観察できる。17～19は灰釉系陶器。17は椀で底部を欠失するが、シャープな作りで、内面に淡緑色の灰釉が厚くかかる。18は皿で器高は低く、がっちりとした角高台を有する。外底部は中央に糸切り痕を認めるが、周囲は回転へら削り調整によって消されている。内面には緑茶色の灰釉がかかる他、三又トチの使用痕も残存する。19は肩部のやや張る丸みを帯びる形状を有する。色調は淡灰色を呈する。胴部1/2以下には回転へら削り調整がみられ、肩部外面には濃緑色の灰釉がかかる。20・21は土師器甕。20は内面に板状工具による調整痕がわずかに残る。14～19は8世紀末～9世紀初頭。17・18は9世紀前半。

#### SB17

22～29は灰釉系陶器。22～26は椀。いずれも口縁部を欠失する。高台は低くつぶれるが、比較的強くナテ付けされている。端部には22・23・25がモミ、24・27が砂粒の圧痕が観察できる。28は壺底部片。29は鉢。高台端部にモミ痕がみられ、腰部外面にはへら削り痕を観察できる。22～27が12世紀末、28・29も同時期か。

#### SB19

30～42は須恵器。30～37は杯。30～32は高台を有する。30は腰部が強く屈曲する浅手の形状で、外底部は回転へら削り調整を施す。31はやや深手の形状で、小振りである。体部に「耳」を有した痕跡を確認できる。外底部は回転へら削り調整を施す。32は底部のみ残存する。高台より底部中央が突出する。底部中央に糸切り痕を確認できるが、周囲は回転へら削りによって消されている。33～36は無高台の杯で、外底部に糸切り痕が観察できる。なお、36は腰部に稜を有する可能性もみられる。38～40は盤で、38は外底部に回転へら削り調整を施す。39は生焼けのため表面が摩滅し、詳細は不明である。40は高い脚を持つ高盤。41は蓋で天井部外面に回転へら削り調整を施す。42は壺で外底部に回転糸切り痕を観察できる。43は土師器甕2類小型である。30～42は8世紀。43も同時期か。

#### SB23

44は須恵器杯で無高台。丸みを帯びた深手の器形。やや焼成不良であるが、シャープな作りである。底部中央に回転へら削り痕が確認できるが、周囲は回転へら削り調整によって消されている。7世紀後半。

#### SB24

45は須恵器杯で高台を有する。腰部が屈曲する形状で、作りはシャープである。外底部には回転へら削り調整を施す。8世紀中頃。

#### SB25

46～48は須恵器杯。46は高台を有する。外底部は回転へら削り調整を施す。47・48は無高台で、丸みを帯びた深手の形状。外底部には回転へら削り痕を残すが、さらに47は周囲に手持ちへら削り調整を施す。46～48は8世紀中頃。

#### SB30

49は土師器甕。時期は特定できない。

#### S B31

50は須恵器杯。無高台である。外底部は糸切り痕を観察できる。51～58は灰釉系陶器。51～58は椀である。三ヶ月形の高台を有する。51は外底部には回転ヘラ削り調整を施す。焼成不良で表面の様子が観察しづらいが、施釉痕が確認できる。52は腰部に弱い稜を有する。外底部には回転ヘラ削り調整を施す。腰部内外面に施釉痕を残す。53は外底部に糸切り痕が観察できる。腰部内外面に施釉痕を残す。54は角高台を有する椀で、底部を1/2残存させる破片であるが、中央にヘラ状工具による「凸」形の切り込みを有する。欠落している部分も含めると十字形を呈していたのか。外底部は回転ヘラ削り調整痕、内面には釉の剥落痕が確認できる。55～57は皿。55はやや深手の皿で、三ヶ月形の高台を有する。外底部には回転ヘラ削り調整を施す。内面から外面腰部まで淡緑色の灰釉をハケヌリしている。56は低くつぶれた三ヶ月形の高台を有する。外底部には、回転糸切り痕が確認できる。なお、灰釉を施された痕跡がわずかに観察できる。57は三ヶ月形の高台を有する。外底部には回転ヘラ削り痕が確認できる。施釉は残存部分については認められない。59～63は土師器甕。62は1類大型、59・60・63は2類大型、61は2類小型である。時期は54が9世紀前半、51・52・55・57は9世紀後半、53・56はやや下る。

特殊な椀

#### S B32

64は土師器甕で2類小型である。

#### S B34

65は須恵器杯で高台を有する。腰部が屈曲し、口縁部に至る。やや焼成不良で摩滅が著しいが、外底部に手持ちヘラ削り調整が確認できる。66は土師器甕。65は7世紀末頃。66も同時期か。

#### S B35

67～69は須恵器。67は杯。68は蓋。傘形の体部に偏平な鈕を有する。天井部外面に回転ヘラ削り調整を施す。69は須恵器壺で短く立ち上がる口縁部を有する。8世紀後半。

#### S B36

70は須恵器杯で無高台である。やや丸みを帯びた浅手の形状をとる。外底部には回転糸切り痕が観察できる。8世紀後半。

#### S B38柱穴

71～73は須恵器。71・72は杯。71は高台を有する形状で、腰部で稜をもって立ち上がる。72は無高台で底部外面に回転ヘラ削り調整を施す。73は長頸瓶。太く直線的な頸部が短く外反して口縁部を成す。色調は暗灰色を呈する。74は土師器甕1類。71～73は8世紀後半。74も同時期か。

#### S B65柱穴

75は灰釉系陶器広縁段皿。低くつぶれた高台を有する。外底部には回転ヘラ削り調整を施す。内面に淡緑色の灰釉を施す。

#### S K01

76は須恵器杯身で、やや小振りである。

#### S K02

77～80は須恵器。77～79は無高台の杯。腰部で稜をもって立ち上がる。外底部・腰部外面は回転ヘラ削り調整を施す。80は蓋で傘型を呈する。天井部外面に回転ヘラ削り調整を加える。81は土師器甕。77～80は8世紀末～9世紀初頭。81はやや上る。

#### S K03

82は須恵器杯。高台を有する形状で、稜をもって立ち上がる。外底部は回転ヘラ削り調整を加える。8世紀前半。

#### S K04

83は須恵器壺。胴部にわずかのふくらみを持たせてにぶく直立する口縁部を有する。

#### S K05

84は須恵器杯身。小振りである。外底部には回転ヘラ切り痕を無調整で残す。7世紀後半。

#### S K06

85は土師器甕。

#### S K07

86・87は須恵器。86は杯身で完形。小振りである。外底部には回転ヘラ切り痕を無調整で残す。87は高杯で脚部の一部を欠く他は完形。小振りである。脚部中央に一条の沈線がめぐる。7世紀後半。

#### S K08

88は須恵器で、無高台の杯。腰部で稜をもって立ち上がる。外底部・腰部は回転ヘラ削り調整を施す。

#### S K09

89～94は灰釉系陶器碗。三ヶ月形の高台を有する。外底部には回転ヘラ削り痕が確認できる。なお、89・90・93・94は腰部外面にもこれが確認できるほか、90は中央にやや広く糸切り痕を残す。施釉の有無は、89・94が無釉、90が灰釉ハケヌリ、91・92は灰釉ツケガケ痕が確認できる。95・96は土師器甕2類。95が大型で96は小型である。90が9世紀後半～10世紀初頭、89・91～94は10世紀初頭。95・96も同時期か。

#### S K10

97は灰釉系陶器碗。三ヶ月形の高台を有する。腰部・外底部は回転ヘラ削り調整。内面から腰部外面まで、黄緑色の灰釉をハケヌリしている。9世紀後半～10世紀初頭。

#### S K11

98は須恵器蓋。偏平ボタン状の鈕を有する。口縁部は屈曲する。天井部外面に回転ヘラ削り調整を施す。8世紀後半。

#### S K12

99は須恵器横瓶。短く外反する口縁部を有する。体部は外面に平行タタキ痕、内面に当て具痕を観察できる。時期は特定できない。

#### S K 13

100・101は須恵器。100は無高台の杯。外底部には回転糸切り痕を観察できるが、周囲には回転ヘラ削り調整を雑に加える。101は蓋。偏平ボタン状の鈕を有する。口縁部は屈曲する。天井部外面には回転ヘラ削り調整を施す。100・101とも8世紀後半。

#### S K 14

102は須恵器で無高台の杯。外底部には回転糸切り痕が確認できる。103・104は土師器甕でいずれも1類。103は小型、104は大型か。

#### S K 15

105は灰釉系陶器長頸瓶。二段成形で、灰白色の胎土を有する。肩部には緑色の灰釉がかかる。8世紀末～9世紀初頭。

#### S K 16

106は須恵器で無高台の杯。腰部で稜をもって立ち上がる。外底部・腰部は回転ヘラ削り調整を施す。

#### S K 18

107・108は灰釉系陶器碗で小型である。107は無高台で無釉。器高は低く外底部に回転糸切り痕が観察できる。108は低くつぶれた高台を有する。107が12世紀末。108はこれよりやや遡る。

#### S K 19

109は灰釉系陶器碗。厚手で丸みを帯びた形状を有する。高台は低くつぶれ、端部にはモミ圧痕が観察できる。口縁部に四ヶ所、灰釉をツケガケした痕跡を残す。12世紀。

#### S K 20

110は灰釉系陶器碗で小型である。無高台で無釉。器高は低く、外底部に回転糸切り痕が観察できる。12世紀末頃。

#### S K 21

111～115は灰釉系陶器碗。厚手で、器高の低い形状をとる。115は小型である。高台は低くつぶれ、113を除き端部にモミ圧痕が確認できる。なお、113を除き無釉。113は灰釉をツケガケした痕跡を留める。なお、115は内面に墨書が確認できる。116・117は土師器。116は皿か。ロクロを使用している。外底部には回転糸切り痕が観察できる。117は鍋。短く外反する口縁部に折り曲げによる玉縁状の口端部を形成する。111～115が12世紀前半～中頃。116・117も同時期か。

#### S K 22

118は灰釉系陶器。碗で小型である。無高台で無釉。器高は低く、外底部に回転糸切り痕が観察できる。12世紀末。

#### S K 23

119～125は須恵器。119・120は無高台の杯。119は腰部で稜をもって立ち上がる。外底部・腰部外面は回転ヘラ削り調整を加える。なお、120～122の外底部には、回転糸切り痕が観察できる。122は、腰部に稜を有するのかも知れない。123・124は蓋。123は宝珠鈕を有する。いずれも口縁部は屈曲し、天井部外面に回転ヘラ削り調整を施すが、124は中央に糸切り痕を残す。125は壺。胴部にふくらみを持たせてにぶく直立する口縁部を有する。119～125は8世紀後半。

#### S K 24

126は灰釉系陶器の椀。厚手で、器高の低い形状を有する。高台は低くつぶれ、端部にモミ圧痕が確認できる。無釉である。12世紀。

#### S K 25

127は須恵器。無高台で丸みを帯びた深手の形状を有する。体部外面には回転ヘラ削り調整を施す。7世紀。

#### S K 26

128は須恵器杯身。外底部にはヘラ切り痕が確認でき、周囲に回転ヘラ削り調整を施している。7世紀。

#### S K 27

129～140は須恵器。129～135は杯。129～131は、高台を有し腰部で稜を有し立ち上がる。130・131は外底部回転ヘラ削り調整。132～135は無高台の杯。132は丸みを帯びた形状を有する。外面は腰部以下に回転ヘラ削りを施す。133・134は底径が大きく、外底部に回転糸切り痕が観察できる。135は腰部で稜をもって立ち上がる。外底部・腰部は回転ヘラ削り調整を施す。137・138は蓋。137は口縁部が屈曲し、天井部外面に回転ヘラ削り調整を施す。138は無鈕の蓋で天井部に糸切り痕が観察できる。139・140は壺。139は胴部にふくらみを持たせて直立する口縁部を有する。140は底部片で、外底部に回転糸切り痕が観察できる。なお、140は杯の可能性も考えられる。141は灰釉系陶器長頸瓶。淡灰色を呈する。142・143は土師器甕でいずれも1類。142は大型。143は小型である。133・134は8世紀中頃。132・135・137・139・140は8世紀後半。136・138は9世紀初頭。

#### S K 28

144は須恵器。無高台の杯で、外底部には糸切り痕が観察できる。8世紀後半。

#### S K 29

145は灰釉系陶器椀で小型である。無高台で無釉。外底部に墨書が確認できるが判読できない。時期は12世紀中頃。

#### S K 30

146は灰釉系陶器椀で、三ヶ月形の高台を有する。外底部・腰部外面には回転ヘラ削り痕が確認できる。内面に淡緑色の灰釉をハケ塗りする。9世紀後半～10世紀初頭。

#### S K 31

147は須恵器杯身。外底部にはヘラ切り痕が確認でき、周囲に回転ヘラ削り調整を加えて

いる。148・149は土師器甕。同一個体である可能性も考えられる。147は6世紀後半頃。148・149も同時期か。

#### S K 32

150～156は須恵器。150～154は杯。150は高台を有し、外底部に回転ヘラ削り調整を施す。151～154は無高台の杯。151～153は腰部に稜をもって立ち上がる。回転ヘラ削り調整は、151が腰部の1/2と外底部。152と153が外底部に施される。154は腰部に丸みを有する。155は盤で、やや低い脚を有する。外底部は回転ナデ調整。156は蓋で偏平ボタン状の鈕を有する。口縁部は屈曲する。天井部は外面に回転ヘラ削り調整を施す。157～159は灰釉系陶器。157は椀で角高台を有する。外底部は回転ヘラ削り調整。内面には濃緑色の灰釉が厚くかかる。158は皿。高台等の形状は157と一致するが、無釉である。159は長頸瓶の底部片。160～165は土師器で、160は椀。161～165は甕で161～163・165が1類大型、164が2類小型である。150・156・159は8世紀後半。157・158は9世紀前半。

#### S K 33

166は須恵器壺で、胴部にふくらみを持たせて直立する口縁部をつける。8世紀末。

#### S K 34

167は灰釉系陶器皿で、体部外面より内面にかけて濃緑色の灰釉をハケヌりする。

#### S K 35

168は灰釉系陶器椀で、三ヶ月形の高台を有する。外底部・腰部外面には、回転ヘラ削り痕が確認できる。腰部内外面に淡緑色の灰釉をハケヌりする。

#### S K 36

169は灰釉系陶器椀で、ほぼ直線的に延びる体部と、ゆがむ三ヶ月形の高台を有する。外底部に回転糸切り痕が観察できる。12世紀。

#### S K 37

170は灰釉系陶器皿で、ややゆがむ三ヶ月形の高台を有する。外底部・腰部外面には回転ヘラ削り痕が確認できる。腰部内外面に淡緑色の灰釉をハケヌりする。外底部に記号風の墨書が認められる。

記号風墨書

#### S D 01

171～176は須恵器。171～174は杯で、171・172・174は無高台。173は判断できない。172・173は腰部から立ち上がるがにぶい。175は盤。176は蓋で、口縁部が屈曲し天井部外面には回転ヘラ削り調整を加える。鈕は持たないと推定される。171～175は8世紀。176は9世紀初頭。

#### S D 05

177は灰釉系陶器椀で、直線的な体部を有する。口縁部には縁帯を有し、先端はやや尖る。高台を有するが、歪みが著しく、端部にはモミ圧痕が観察できる。13世紀中頃。

#### S D 06

178・179は灰釉系陶器椀で底部片である。12世紀末。

## NR01

谷地形埋土からの出土遺物で、180～226が須恵器。180～204が杯。205・206が盤。207は合子である。外底部の様子は、回転ヘラ削り調整のものが180・182～184・186～192・195・203・205～209。糸切り痕無調整のものが194・199～202・204。糸切り痕をナデ消したものが204。周囲のみ回転ヘラ削り調整を加えたものが193。手持ちヘラ削り調整を施すものが196～198と区分できる。208～210は蓋。220は円面硯か。229～276は灰釉系陶器。229～241は椀。245～256までが皿である。施釉状況は232・234～241・256が無釉。233・242・243・245・247・251～253が灰釉ハケヌリ、230・231・246・248～256・254・255は灰釉が内面に厚くかかる。なお、254はヒダを有する耳皿であるが、内面に陰刻花文を施す。259は長頸瓶。270～273は平瓶。274は浄瓶で先端部・鏝部欠失後も研磨して再利用している。276は蓋。陰刻花文を刻み、鉛釉を施す。277は円面硯。灰白色を呈する。278～284は施釉陶器。285は中国陶磁。286～301は土師器である。

## 2. 土製品・そのほかの土器

土製品・そのほかの土器には、瓦・土錘・製塩土器などがある。

瓦は、十数点みられるが、いずれも遺構に伴う資料ではない。出土したものはすべて平瓦・丸瓦の破片である。図版に示す資料はいずれもNR01出土。淡褐色の焼成不良品で、胎土に2～4mm大の赤褐色粒子を含む。土錘も十数点出土している。ただし帰属時期が明確にできるものは少ない。一般的形状は、中央がやや張る円筒形で、重量は110g、穴の直径が15mm程度だが、これより大型のものも小型のものも存在している。製塩土器は脚部片がみられる。

## 3. 金属製品

数量的に乏しく、出土しているものはすべて鉄製品。315は長方形の鉄板で、四方に直径3mmの小穴と、中央に長辺3.5mm、短辺1.2mmの長方形のキリヌキがみられる。用途不明。318・319は刀子か。315・318・319とも遺構資料であるが、時期は特定できない。

## 4. 石製品

石製品は、数点砥石がみられるのみである。このほか、1期以前のものとして、321の石鏃、322の石錘がみられる。323はスクレーパーの類か。

## 5. 植物遺体

竪穴住居・土坑の埋土中より出土した炭化物のうち、わずかに種を同定できるものは、米とモモの種子がある。前者はSB11（土師器甕10の内容土中）・SK16、後者はSK16・SK17。

注(1) 本書においてはいわゆる「灰釉陶器」と「山茶碗」とを同一の概念で用いる  
赤塚次郎「灰釉系陶器」『土田遺跡』愛知県埋蔵文化財センター1987

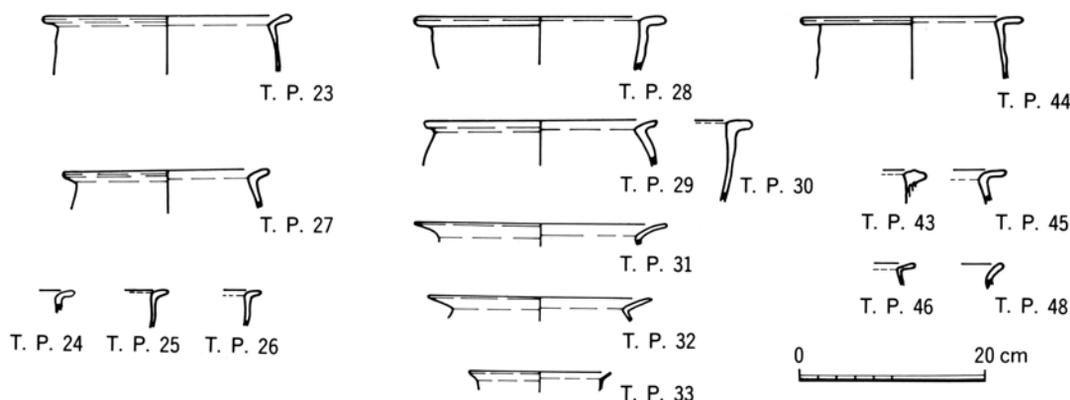
## 第5章 自然科学的分析

### 1. 試料の考古学的位置

今回の発掘調査に関連し、土器の胎土分析（重鉍物分析）をパリノ・サーヴェイ社に依頼して実施している。本章ではこの結果を報告する。以下にパリノ・サーヴェイ社から提出された報告書をそのまま掲載するが、事前に分析に用いた試料の性格を提示しておく。分析に用いた試料は48点である。分析の主眼は、志貴野遺跡の調査でその実態が明らかになりつつある奈良時代～平安時代の土師器甕である。具体的な試料の内訳は48点中22点を志貴野遺跡出土遺物（T.P.23～27）を用い、残り26点を地理的な比較試料として他遺跡出土遺物を用いている。具体的遺跡は5ヶ所で、西三河の遺跡として岡崎市ハサマ遺跡（T.P.23～27）、中道遺跡（T.P.28～29）、東三河の遺跡として宝飯郡御津町石堂野遺跡（T.P.31～34・40）、高坂遺跡（T.P.35～39）、尾張の遺跡として海部郡甚目寺町大湫遺跡（T.P.41～48）である。これらを後述する形態分類で示すと、T.P.48が4類に入る他はすべて1・2類にあたる。また、時間的比較試料として古墳時代後期に属する試料も合わせて実施している。T.P.18～22・35～42がそれである。なお、本書掲載実測図と今回の分析試料との対応関係であるが、巻末の付表にT.P.（テストピース）を付けて表現している。

試料の性格

対象遺跡



第11図 重鉍物分析用試料実測図

### 2. 分析目的と試料

試料は、愛知県内の各地の遺跡より出土した奈良時代～平安時代の土師器の甕計48点である。試料の出土した遺跡名、表面観察結果などは表1に示す。

今回は同時代で同一形状の土師器について、胎土重鉍物分析を行い、地域的に隔たった7ヶ所の遺跡間で土器胎土に差が認められるかどうか検討することを目的とした。

### 3. 分析方法

土器片を鉄乳鉢を用いて粉碎し、水を加え超音波洗浄装置により分散、#250の分析篩により水洗、粒径1/16mm以下の粒子を除去する。乾燥の後篩別し、得られた1/4 - 1/8 mmの粒子をテトラプロモエタン（比重約2.96）により重液分離、重鉍物のプレパラート作製、偏光顕微鏡下にて同定した。同定の際、変質等で同定の不可能な粒子は「その他」とした。

方法

#### 4. 分析結果

鉍物の同定粒数は、250個を目標としたが試料自体の量が少ないものが多かったこともあり、これに満たない試料が全体の3/4以上の37点あった。さらに同定粒数が100個に満たない試料は全体の半数近い21点もあった。これらの試料は組成を正しく表していないと考えられるので、データとして他の試料とは同等には扱えない。したがって、後述する試料のグループ分けからは除外した。各試料の重鉍物組成は、表2、表3に示す。全体的にみて角閃石・黒雲母またはザクロ石を多く含むものが多い。しかし、中にはジルコンや斜方輝石+単斜輝石を多く含む試料も認められる。

#### 5. 考察

##### (1) 試料のグループ分け

分析結果をもとに各試料の重鉍物組成において優占する鉍物、含まれる鉍物の組合せ及びその量比などから以下のような試料のグループ分けをおこなった。

##### グループ 分け

- I グループ (No.4・11・12・31・34)  
ザクロ石が最も多い。
- II グループ (No.7・8・28~30)  
黒雲母が最も多く次にザクロ石が多い。
- III グループ (No.10・18~21・35・36)  
角閃石または黒雲母が最も多く、少量のジルコンとザクロ石を伴う。
- IV グループ (No.37・38)  
角閃石が非常に多い。
- V グループ (No.39・40)  
鉍物の組合せはIIIグループに似るが、IIIグループに比べて角閃石と黒雲母の量比が少ない。
- VI グループ (No.41・42・45・47)  
他の試料に比べてジルコンの量比が大きい。
- VII グループ (No.43・48)  
斜方輝石+単斜輝石が最も多い。

##### (2) 胎土の地域性について

本分析の試料は、時代・器形とも同一のものであるが、前項のような胎土の差が認められる。冒頭に記したように胎土の差と試料の出土した遺跡の場所との関係に着目し、考察を試みる。

前項のグループとの関係では、I・IIIグループは矢作川流域の試料と東三河の試料が混在し、IIグループは矢作川流域の試料のみ、IV・Vグループは東三河の試料のみ、VI・VIIグループは尾張低地の試料のみという対応が認められる。つまり、矢作川流域・東三河の試料ではザクロ石を多く含むなどの共通性が認められるのに対し、尾張低地の試料はザクロ石を全く含まずジルコン・斜方輝石+単斜輝石を多く含むなど異質な点が多い（しかし同定粒数100個未満のT.P.44・46はザクロ石を含み共通性が全くないとはいえない）。この

傾向は、ともに領家変成岩と領家深成岩の分布域である矢作川流域・東三河地域と古生層の山地を背後にひかえた濃尾平野の一部である尾張低地との地質学的背景の違いを表しているとも考えられる。

## 6. まとめにかえて

これまでに当社では、財団法人 愛知県埋蔵文化財センターからの依頼により継続的に愛知県の土器の胎土分析を行っている。分析の対象とした土器は、弥生時代中期から中世までの弥生式土器及び土師器である。

これら全試料の胎土の重鉱物組成を再検討したところ、斜方輝石+単斜輝石が比較的多くかつ斜方輝石>単斜輝石という組成上の特徴が各時代を通じて認められた。具体的には、阿弥陀寺関連試料（1988年報告、弥生中期）のIグループ、諏訪遺跡関連試料（1988年報告、弥生後期）のIグループ、町田遺跡関連試料（1988年報告、弥生後期から古墳）のVIIグループ、土田遺跡関連試料（1986年報告、古墳前期）のVグループ、本報告のVIIグループ、土田遺跡関連試料（1986年報告、中世）のIIIグループ、阿弥陀寺遺跡関連試料（1987年報告、中世）のIグループが、これに相当する。

ここで上記のグループに属する個々の試料の出土した遺跡の地域に着目すると、すべてが濃尾平野内に分布している。また、杉山遺跡試料（1987年報告、中世）も含め愛知県東部のいわゆる三河地域に分布する遺跡から出土した試料の中には、上記のグループに属するものが1点もないこともわかった。実際の点数では、濃尾平野の遺跡の試料255点のうち106点が上記のグループに属し、三河地域の遺跡の試料118点はすべて上記のグループには入らない（同定粒数100個未満のものは除いてある）。

以上の状況から次のような事が推定できる。まず、斜方輝石と単斜輝石の起源であるが、これについては前回の町田遺跡関連試料の報告の中で名古屋周辺域にはそれらの鉱物の起源となるような地質の分布域は見あたらないとした。しかし、濃尾平野に多量の土砂を供給する河川の一つである木曾川の上流には安山岩質のテフラを噴出する御岳火山があることから、前回報告書中の上記の部分は、ここで訂正しなければならない。実際に、御岳山麓から木曾谷にかけては莫大な枚数のテフラにより構成される新期御岳テフラ層などが分布しており、このテフラ層の中には斜方輝石+単斜輝石が多く、かつ斜方輝石>単斜輝石であるような鉱物組成を示すものが多いことも確かめられている（竹本ほか、1987）。このような堆積層を起源とする砂が、木曾川などにより濃尾平野に供給されていることは十分に考えられることである。したがって、上記の特徴的な組成を持った胎土の土器は、その出土遺跡の分布範囲も考慮するならば、濃尾平野地域における在地の土器である可能性が考えられる。

斜方輝石  
と単斜輝  
石

一方、濃尾平野地域出土の土器は、上記の特徴的な組成以外の胎土の土器も多数ある。そのなかでも三河地域の土器とよく似た組成を示す胎土の土器も多いことから、三河地域の土器は濃尾平野地域に運ばれるものが多かったが、逆に濃尾平野地域の土器は三河地域にはほとんど運ばれることがなかったという一方通行的な土器の移動形態があった事が示

土器の移  
動形態

される。

以上の2点の問題については、どちらもあくまで現段階のデータのみを基にして推定した結果であり、今後さらなる検討が必要なことはいうまでもない。

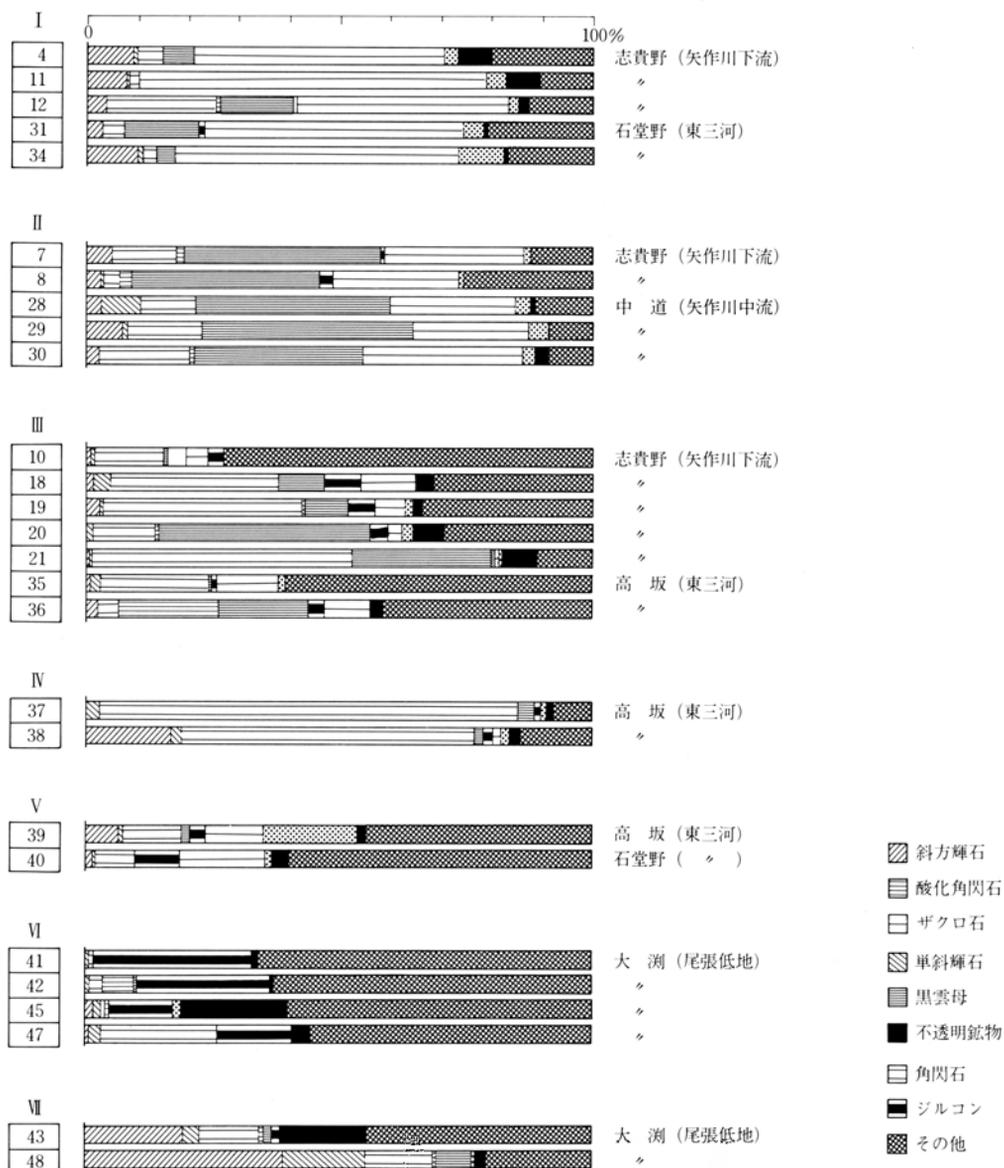
引用文献

竹本弘幸・百瀬貢・平林潔・小林武彦「新期御岳テフラ層の層序と時代—中部日本における編年上の意義」『第四紀研究』25、p. 337-352.

謝辞

今回の分析に際しましては、岡崎市教育委員会、西尾市教育委員会より比較試料の提供を受けました。そのおりに、斎藤嘉彦氏・荒井信貴氏・松井直樹氏には試料に関する御教示をいただきました。謝意を表します。

表1 分析試料の分類



※同定粒数100個未満のものは除いた

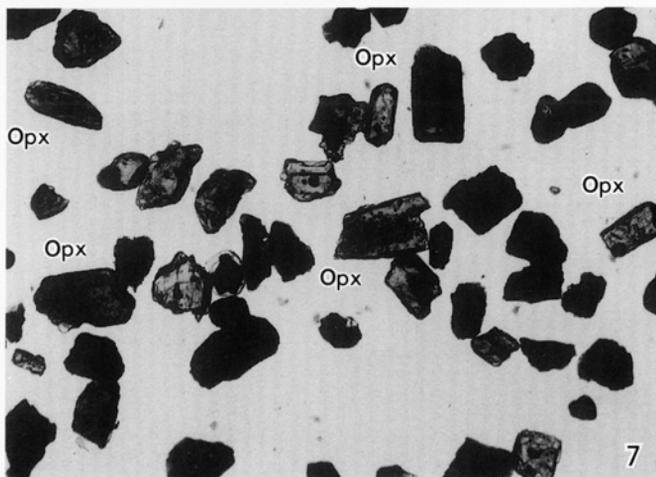
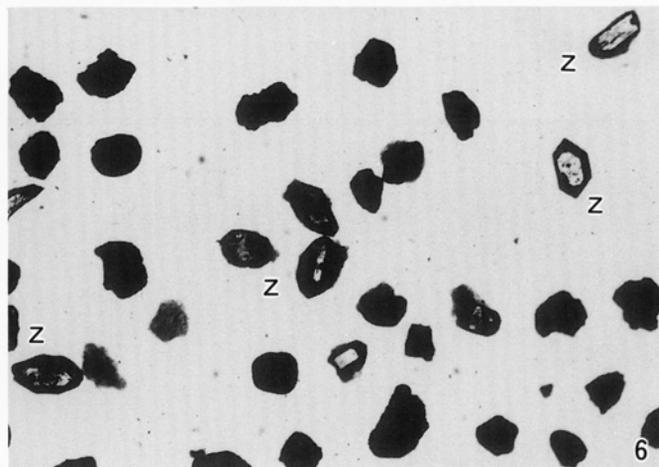
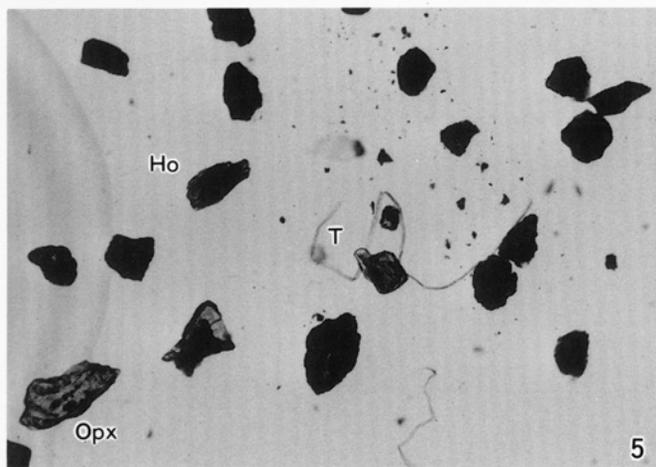
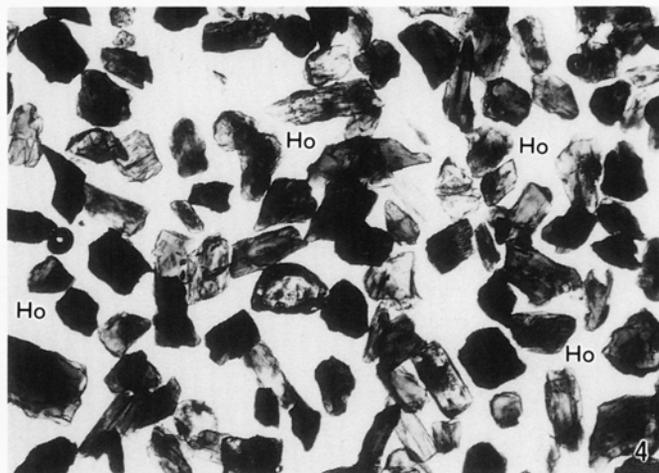
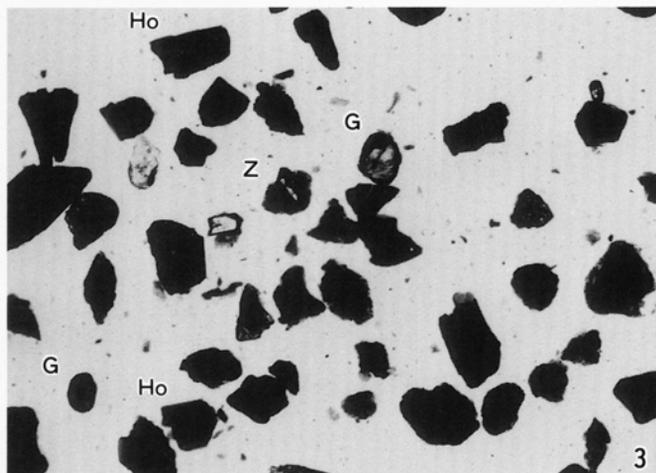
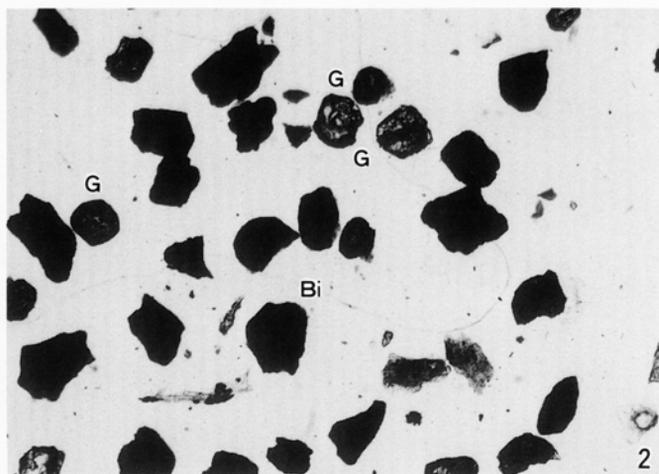
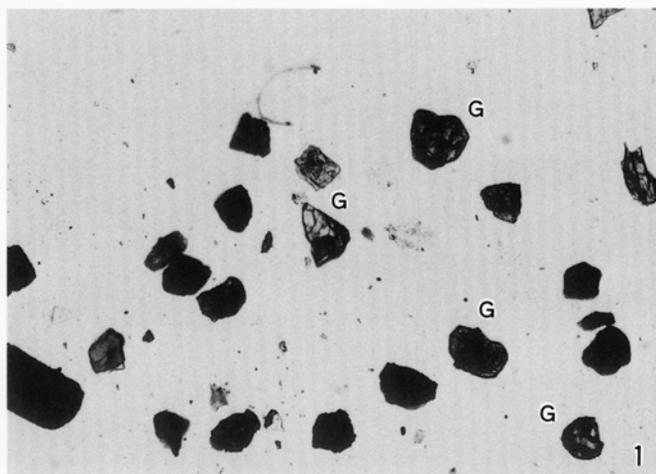
表2 各試料の特色

試料番号	遺跡名(所在地)	出土地点	表面の色(表・裏)	表面の質感(表・裏)	表面にみられる砂粒など(表・裏)
T.P.1	志貴野(矢作川下流)	S K32	灰白・灰白～褐灰	粗い	白色岩片多量、黒雲母片微量含む。
T.P.2	"	"	浅黄橙・同	やや粗い	白色・灰色岩片少量含む。
T.P.3	"	"	淡赤橙～にぶい橙 ・灰白～にぶい橙	粗い	白色岩片多量を含む。
T.P.4	"	"	浅黄橙・にぶい橙	粗い	白色・灰色岩片多量を含む。
T.P.5	"	"	灰白・同	粗い	白色・灰色岩片多量を含む。
T.P.6	"	S B31	灰白・同	粗い	白色・灰色岩片多量を含む。
T.P.7	"	"	灰白～淡赤橙・灰白	粗い	白色・灰色岩片多量、黒雲母片微量含む。
T.P.8	"	S B34	にぶい橙・同	粗い	白色・灰色岩片多量、黒雲母片微量含む。
T.P.9	"	S B13	にぶい橙・明褐灰	やや粗い	白色・灰色岩片少量、黒色斑晶少量含む。
T.P.10	"	"	にぶい黄橙・にぶい褐	粗い	白色岩片多量、黒雲母片微量含む。
T.P.11	"	S K09	にぶい褐・褐灰	ややきめ細かい	白色粒多量、黒雲母片微量含む。
T.P.12	"	"	にぶい橙～褐灰 ・にぶい赤橙～にぶい橙	粗い	灰色岩片多量、黒雲母片微量含む。
T.P.13	"	S K28	明褐灰・同	やや粗い	白色粒・灰色岩片少量含む。
T.P.14	"	S B11	灰褐・褐灰	ややきめ細かい	白色粒・白色岩片少量含む。
T.P.15	"	S K14	褐灰・灰白	粗い	白色・灰色岩片多量を含む。
T.P.16	"	"	浅黄橙・灰褐	やや粗い	白色・灰色岩片少量含む。
T.P.17	"	II期遺構	浅黄橙・灰白	粗い	白色・灰色岩片多量を含む。
T.P.18	"	"	褐・にぶい橙	粗い	白色岩片(最大径7mm)多量を含む。
T.P.19	"	古墳時代比較試料	明赤褐・灰褐	粗い	灰色岩片多量、白色岩片少量、黒雲母片微量含む。
T.P.20	"		明赤褐・同	やや粗い	白色岩片少量含む。
T.P.21	"		にぶい橙・暗褐	粗い	白色・灰色岩片多量、黒雲母片少量含む。
T.P.22	"		灰褐・褐灰	粗い	白色粒・白色岩片多量を含む。
T.P.23	ハサマ(矢作川中流)		浅黄橙・灰黄	やや粗い	灰色岩片少量含む。
T.P.24	"		にぶい橙・浅黄橙	やや粗い	白色・灰色岩片少量含む。
T.P.25	"		にぶい褐・灰褐	粗い	白色・灰色岩片多量、黒雲母片微量含む。
T.P.26	"		灰白・同	やや粗い	白色・灰色岩片少量含む。
T.P.27	"		にぶい黄橙・灰黄褐	粗い	白色・灰色岩片多量を含む。
T.P.28	中道(矢作川中流)		にぶい橙・にぶい黄橙	ややきめ細か	灰色岩片、黒色斑晶多量、黒雲母片少量含む。
T.P.29	"	浅黄橙・にぶい黄橙～灰	粗い	灰色・白色岩片・黒色斑晶多量、黒雲母片微量含む。	
T.P.30	"	にぶい橙・褐灰	やや粗い	白色・灰色岩片多量、黒雲母片少量含む。	
T.P.31	石堂野(東三河)	にぶい橙・同	やや粗い	白色・灰色岩片多量を含む。	
T.P.32	"	灰白・同	粗い	白色・灰色岩片多量を含む。	
T.P.33	"	淡赤橙 ・淡い赤橙～褐灰	やや粗い	白色・灰色岩片多量を含む。	
T.P.34	"	にぶい橙・同	やや粗い	白色・灰色岩片少量含む。	
T.P.35	高坂(東三河)	黒～褐 ・にぶい黄褐～にぶい赤褐	ややきめ細か～粗い	白色粒少量含む。-白色岩片(最大径5mm)多量、赤色粒少量含む。	
T.P.36	"	古墳時代比較試料	浅黄橙～灰褐・浅黄橙	粗い	白色・灰色岩片多量、黒雲母片微量含む。
T.P.37	"		赤褐・同	粗い	白色岩片(最大径5mm)多量を含む。
T.P.38	"		にぶい褐・同	やや粗い	白色岩片少量含む。
T.P.39	"		にぶい橙・にぶい黄橙	やや粗い	白色・灰色岩片少量含む。
T.P.40	石堂野(東三河)		にぶい黄橙・同	粗い	白色・灰色岩片多量を含む。
T.P.41	大湖(尾張低地)		灰白・同	きめ細か	灰色岩片少量含む。
T.P.42	"		黒・灰褐	きめ細か	砂粒目立たず。
T.P.43	"		褐灰・にぶい橙～灰褐	ややきめ細か	黒色・灰色岩片多量を含む。
T.P.44	"		灰白・灰褐	きめ細か	黒色斑晶少量、灰色岩片微量を含む。-砂粒目立たず。
T.P.45	"		灰褐・明褐灰	きめ細か	黒色斑晶・灰色岩片微量含む。
T.P.46	"	明褐灰・褐灰～明褐灰	粗い	白色・灰色岩片多量を含む。	
T.P.47	"	古墳時代比較資料	にぶい橙・橙	ややきめ細か	白色粒微量を含む。
T.P.48	"		にぶい橙・灰褐	粗い	黒雲母片少量、白色・灰色岩片・黒色斑晶微量含む。

\* 岩片 : 粒径約0.5～2mm程度の角ばった砂粒。  
粒 : 粒径0.2mm程度。外見的には粘土の微細な固まりのように見える。

表3 分析結果

試料番号	重 鉱 物 組 成													同定鉱物粒数	グループ別		
	カンラン石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石		酸化角閃石	他の角閃石	黒雲母		緑レン石	ジルコン	ザクロ石	電気石			不透明鉱物	その他
				緑色	褐色			緑色	赤褐色								
T.P. 1		1		4				3	6			12	1		11	38	
" 2		11		10								20	2	3	15	61	
" 3		5		6	1			1			1	23	2		16	55	
" 4		16	1	9				9	2			88	5	12	35	177	I
" 5		2		1								7			14	24	
" 6		1		8							1	30			10	50	
" 7		7		17	1	2		22	34		1	39	2		17	142	II
" 8		7	1	7	1	6		11	83		6	63	2		63	250	II
" 9		6		9					1			16	2	2	4	40	
" 10		1	1	22			1		1		6	7		5	115	159	III
" 11		16	1	4								145	8	14	22	210	I
" 12		9		51	1	2		11	25		1	102	4	5	31	242	I
" 13		4		1							1	25	3	1	5	40	
" 14		3		1								13	2		6	25	
" 15		4		5		1			1			20	2		12	45	
" 16		8		3					1			31	5		17	65	
" 17		3															
" 18		3	8	84				12	11	2	18	27	1	8	76	250	III
" 19		6	1	100		1		19	3	1	13	15	4	4	83	250	III
" 20			2	23		1		1	77		7	5	4	11	54	185	III
" 21		1	1	130				16	53		2	2	2	16	27	250	III
" 22		2		11				2			2	32	4	7	15	75	
" 23		12		4							1	40	1		9	67	
" 24		2		5				6	1			16	2	3	12	47	
" 25		3		3				1				17		1	4	29	
" 26		2		2					1		2	11	1	1	5	25	
" 27	2	1		2								8			6	19	
" 28		5	14	20				52	19			45	5	2	21	183	II
" 29		7	1	15				35	8			23	4		9	102	II
" 30		3		22		1		27	15			39	3	3	11	124	III
" 31		5		7				4	21		2	88	7	1	36	171	I
" 32		3		2							1	9	4		4	23	
" 33		2		2					2			12		2	4	24	
" 34		11	1	3				1	3			63	10	1	19	112	I
" 35		1	5	54				1			3	31	3	1	151	150	III
" 36	4	5		10		50	2	17	28	3	8	23	1	5	97	250	III
" 37			6	208				8			3	3	1	2	19	250	IV
" 38		42	5	146		1		3			5	4	4	5	35	250	IV
" 39		8	1	15			1		2		4	15	24	2	56	128	V
" 40		3	1	19							21	41	3	8	143	239	V
" 41			2		2						79			3	164	250	VI
" 42			2	2	3	12		1			52			1	122	195	VI
" 43		24	4	14	1	1			2		2			21	54	123	VII
" 44				1								8		1	10	20	
" 45	1	2	2	1		1					16		2	27	74	126	VI
" 46		1		1								14	3		15	34	
" 47		2	6	58			1				37			9	137	250	VI
" 48		99	41	33	1	1		11	7				2	5	50	250	VII



- |   |                  |            |
|---|------------------|------------|
| 1 | Iグループ (T.P. 4)   | Opx : 斜方輝石 |
| 2 | IIグループ (T.P. 8)  | Ho : 角閃石   |
| 3 | IIIグループ (T.P.18) | Bi : 黒雲母   |
| 4 | IVグループ (T.P.37)  | Z : シルコン   |
| 5 | Vグループ (T.P.39)   | G : ザクロ石   |
| 6 | VIグループ (T.P.41)  | T : 電気石    |
| 7 | VIIグループ (T.P.24) |            |

0  2mm

第12図 検出重鉱物

## 第6章 考察

### 1. 遺跡の時期別変遷

本項では今回検出された遺構について整理し、時期別の変遷についてまとめてみる。志貴野遺跡の遺構は前述したように、古墳時代～平安時代が中心であるが、この間継続的に存在するのではなく、奈良時代前半の資料が乏しい。従ってここに遺跡規模の時間的な断絶を想定し、これ以前をⅠ期（古墳時代）、これ以後をⅡ期（奈良時代後半～平安時代末）として区分する。また、Ⅱ期については奈良時代後半をⅡ-1、平安時代をⅡ-2期と細分する。なお、時期判断に若干の躊躇を有する掘立柱建物についてであるが、柱穴埋土中に遺物がみられたものは（掘方中に限る）、小片を除くと、S B38・65の2軒に留まる。ただしこれら2軒がⅡ期に属する遺物を出土していること、掘立柱建物柱穴が、ⅠないしⅡ-1期の遺構と重複する場合、多くは後者の方が新しいこと、遺跡全体でⅠ期・Ⅱ-1期とⅡ-2期との極端ともいえる竪穴住居の数量差は、全体での出土遺物量の差があまりみられない事実から判断すると不可解であることなどから、掘立柱建物の多くはⅡ-2期に属するものと判断できよう。なお、Ⅱ-2期以外についても、同時期の他の遺跡の様子から掘立柱建物が存在していたことはほぼ確実にいうことができる。ただし具体的にどの建物が該当するかは現状では判断の材料を得ていない。

#### 主要遺構の動向

以上の想定から志貴野遺跡の主要遺構の動向を考えると以下のようなになる。

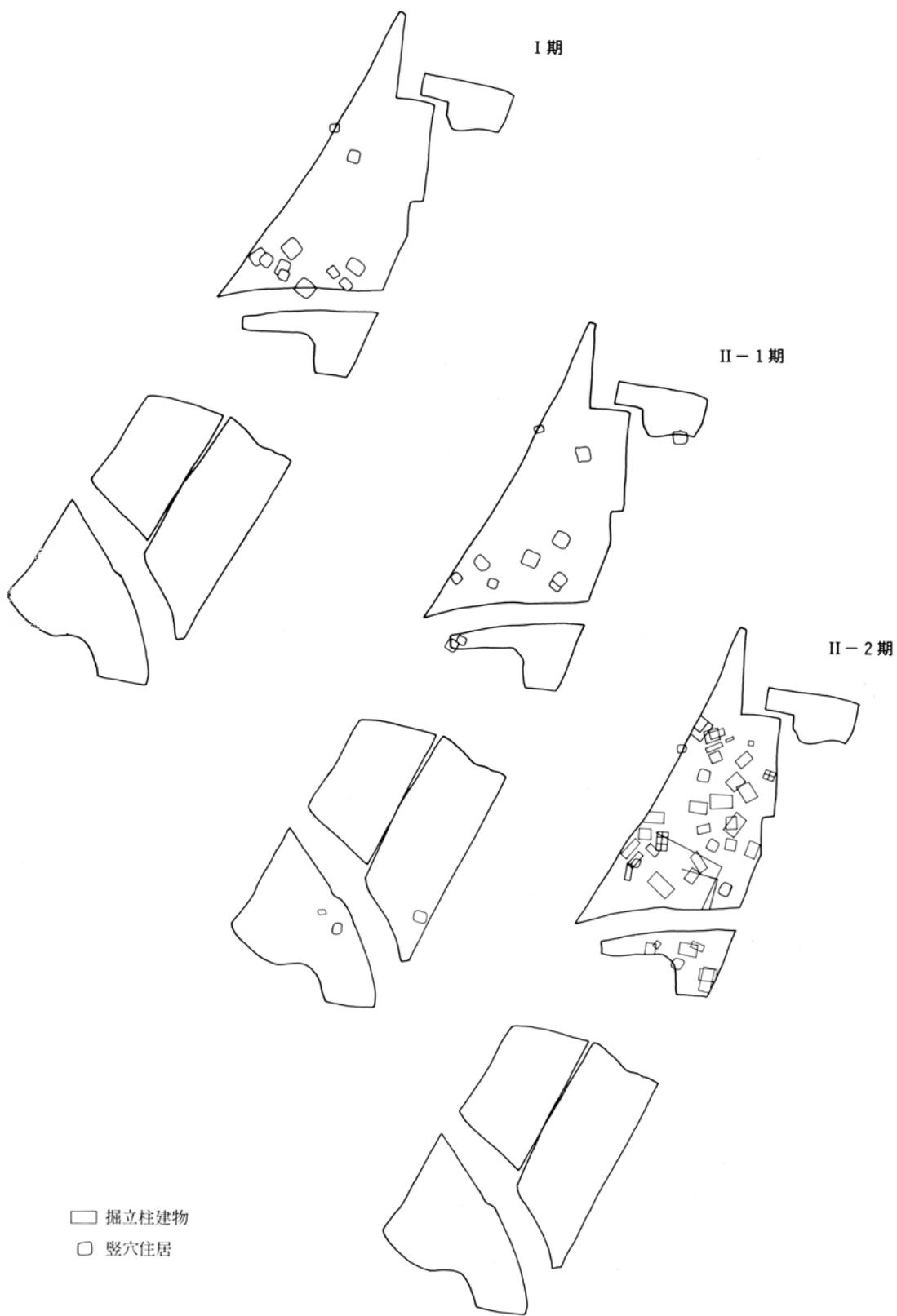
##### Ⅰ期

ほぼ古墳時代に該当する。62年度調査区を中心に竪穴住居によって構成される。

##### Ⅱ期

ほぼ奈良時代後半～平安時代末に該当する。検出できた遺構の差異から大きく2つに区分する。Ⅱ-1期は、ほぼ奈良時代の後半に該当し、Ⅰ期と同様に竪穴住居によって構成される集落である。遺構・遺物の量は、全時期で最も多い。遺構の広がりやⅠ期と比較してやや大きく従来あまり遺構が存在しなかった63年度調査区においても希薄ながら竪穴住居の存在を見ることができる。次にⅡ-2期であるが、この段階に入ると様相が大きく異なり、掘立柱建物を主体とするものに変化している。建物の方位による規制はあまり明確ではない。また、S A02・03の出現はこの段階に明確な区画が出現し始めたことを暗示している。ただし、中世集落に一般的にみられるような溝を設定した方格子割りはまだ存在しない。

なお、今回確認したⅡ-1期からⅡ-2期への変遷は、集落の景観を大きく変化させるもので、遺跡規模での画期として認められる。ただしこれが近接する集落も巻きこんだ変化であったか否かは現状では判断できない。なお、志貴野遺跡北方2.4kmに所在する加美遺跡においては同時期に視覚的な変化は確認できないことから、後者であった可能性が大きい。また、この差異の歴史的意味については現状では明らかにできない。



第13図 主要遺構の変遷 (S=1/2000)

## 2. 土師器煮沸具について

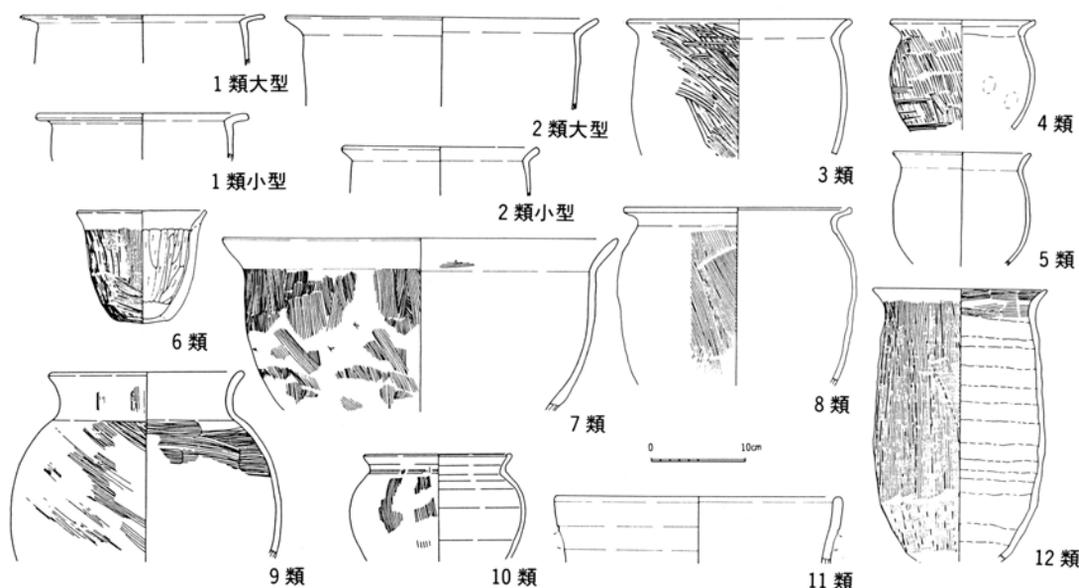
(1)

前項で述べたように、志貴野遺跡では古墳時代～平安時代に属する資料の出土を見ることができた。ところで当地域ではこの時代の土器研究は主に生産地出土資料を中心に進められているのが実情で、断片的な集落跡出土資料についても生産地の動向を検証するに用いられているに過ぎない。また一方では近年からの集落跡出土資料の増加に呼応し、消費地である集落遺跡資料に主眼を置いた報告も提出されはじめている<sup>注(1)</sup>。これらの成果から当地域の集落遺跡での器種の組合せを、最も数量の多い供膳具で言うと、専ら陶磁器類で占められているということ、またこれらは陶器生産地の生産内容に呼応し、奈良時代～平安時代前期は須恵器で占められ、灰釉系陶器の生産が定着するに伴いこれが主体を占めるものに変化するという変遷をたどることなどがしだいに明らかにされてきた。そしてその理由として当地域に巨大な陶器生産地が存在していることが考えられたのはいまさら言うまでもなからう。しかしこうした状況は現状では旧郡単位はおろか旧国単位すら超越した広大な範囲について同様のことが言い得てしまう状況である。大生産地帯に近接して所在する地域ではこれらからほぼ一元的に供給を受けやすいからであろう。したがって、当地域のこの時代を供膳具の様相から区分することは難しかった。今回ここで土師器煮沸具に注目する理由は、こうした問題点を少しでも解決の方向に向けるため、また新たな編年の指標として利用するためである。

### 目的

(2)

志貴野遺跡資料を基軸に愛知県下の土師器煮沸具の器種分類を行う。なお、これは志貴野II期に併行する時代に限定している。



第14図 土師器煮沸具実測図

## 1類

甕で、口縁部が横方向にほぼ直線的に延びる形状を呈する。全面横ナデ調整を基本とするが、(通常の)ハケメ調整の痕跡を留めるものもある。体部の器壁は薄い。今回の調査では全形を窺えるものは得られてないが、西尾市教育委員会による志貴野遺跡の調査で出土した資料には全形を知り得るものが存在する。これによれば全体の形状はやや長い胴部を有する形で、丸底を呈する。体部に把手を有する例もある。法量の差により大型と小型に細分できる。 分類

## 2類

甕で、基本的な形状は1類と同一であるが、口縁部が斜め上方に延びる。全体の形状は1類と同様と推定できる。体部に把手を有する例もある。やはり大型と小型に細分できる。

## 3類

甕で、2類に似る形状を呈するが、外面に深く深いハケメ調整痕を残すのを特長とする。なお、口縁部内側には(通常の)ハケメ調整を残す場合もあるが、ナデ消すこともある。全形を知り得る資料に恵まれていないが、大型でやや長い胴部を有する形状か。

## 4類

甕で、球形の体部を有し、外面に3類と同様の深く深いハケメ調整痕を残す。なお、口縁部内側には(通常の)ハケメ調整を残す場合もあるが、ナデ消すこともある。底部の形状は不明である。

## 5類

甕で、球形の体部を有する。全面横ナデ調整を基本とする。底部の形状は不明である。

## 6類

甕で、深鉢の形態。口縁部は短く外反し、器壁は厚く小型である。外面には(通常の)ハケメ調整痕を残し、内面には縦方向の板ケズリ痕が観察できる。煮沸痕は確認できない。

## 7類

甕で、鉢形を呈する容量の大きい器種である。外面には(通常の)ハケメ調整痕を残す。体部に把手を有する例もある。底部の形状は不明である。

## 8類

甕で、小さな肩部を形成し、やや丸く短い口縁部が付く。口端はやや上方につまみあげられる。外面に(通常の)ハケメ調整後を残す。全形を知り得ていないが、やや長い胴部を有する形状で、底部の状況は不明である。

## 9類

甕で、球形の胴部に外反する口縁部を有する。形状からは壺と呼称したほうが正しいのかも知れないが、外面にススの付着痕が観察できるため用途を意識してこれに含めた。外面には(通常の)ハケメ調整痕、内面には指頭による横ナデ調整を観察できる。

## 10類

鍋で、球形の胴部に短い口縁部を有する。口端は折り返しにより玉縁状を呈する。いわ

ゆる「伊勢型鍋」。器壁は薄く丸底である。

#### 11類

釜で、鉢型の形状を呈する。いわゆる「羽釜」。器壁は厚く、口縁部下4.0cmには、幅1.7cm程度の剥落痕があり、「鏝」を有したことが考えられる。全形を知り得ていない。

#### 12類

甕で、古墳時代以来の伝統的器種のいわゆる「長胴甕」で、長い胴部に短く丸く外反する口縁部を有する。外面に縦方向のハケメ調整痕を残す。器壁は薄く、丸底を呈する。

(3)

以上、志貴野Ⅱ期に並行する時期を中心に土師器煮沸具の分類を試みたが、ここで他遺跡の資料を用いて検証する。なお、現状で比較資料として提示できるものは少ないが、大枠を理解するにおいては障害にならない程度の量に達していると考えられる。

### 西三河

#### 西三河

西三河地域でこの時期に属する遺跡の報告事例は、安城市加美遺跡・豊田市高橋遺跡がある。

##### 加美遺跡<sup>注(2)</sup>

加美遺跡は安城市に所在する。地形的には、洪積台地の東端に立地している。主要な遺構は、中世後半のもので、方格地割の実施された集落が検出されている。本項に関わるものとしては加美Ⅱ期とされる時期で、竪穴住居12軒が検出されている。出土している土師器煮沸具には1類・2類・9類がある。

##### 高橋遺跡<sup>注(3)</sup>

高橋遺跡は豊田市に所在する。地形的には洪積台地の西端に立地している。主要な遺構は弥生時代のもので、竪穴住居で構成される集落が検出されている。本項に関わるものとしては、七次調査で検出された8号・11号・23号住居はほぼ同位置に所在し切り合う、弥生時代の竪穴住居で、廃絶後のくほみが後世の破棄土坑として利用されている。出土している土師器煮沸具は7類である。

### 東三河

#### 東三河

東三河地域でこの時期に属する遺跡の報告事例は、新城市諏訪遺跡・馬場遺跡、一宮町西浦遺跡がある。

##### 諏訪遺跡<sup>注(4)</sup>

諏訪遺跡は新城市に属する。地形的には豊川の河岸段丘中位面に立地している。本項に関わる時期の集落遺跡で、竪穴住居37軒・掘立柱建物10軒を検出している。出土している土師器煮沸具は1類・2類・8類・12類である。

##### 馬場遺跡<sup>注(5)</sup>

馬場遺跡は新城市に所在する。立地状況・年代などほぼ諏訪遺跡と一致している。調査により竪穴住居2軒・石組遺構が検出されている。出土している土師器煮沸具は1類・2類である。

#### 西浦遺跡<sup>注(6)</sup>

西浦遺跡は一宮町に所在する。地形的には沖積低地の微高地上に立地している。本項に関わる時期の集落遺跡である。調査により土坑・溝などが検出されているが、今回注目するのはS B 01と呼称されている竪穴住居出土資料である。出土している土師器煮沸具はすべて2類である。

#### 尾張

#### 尾張

尾張地域でこの時期に属する遺跡の報告事例は、名古屋市名古屋城三の丸遺跡、清洲町清洲城下町遺跡・朝日西遺跡・甚目寺町大淵遺跡・一宮市清郷遺跡・稲沢市尾張国府遺跡がある。

#### 名古屋城三の丸遺跡<sup>注(7)</sup>

名古屋城三の丸遺跡は名古屋市に所在する。地形的には洪積台地の北西端に立地している。主要な遺構は近世のもので、尾張藩の重臣達の上屋敷地区とされている。本項に関わるものとしては、竪穴住居十数軒・掘立柱建物1軒が検出されている。出土している土師器煮沸具は3類・4類である。

#### 清洲城下町遺跡<sup>注(8)</sup>

清洲城下町遺跡は清洲町に所在する。地形的には沖積低地の微高地上に立地している。主要な遺構は中世～近世初頭のもので、『清須城』を中核にした城下町遺跡として知られている。本項に関わるものとしては溝2本が確認されている。出土している土師器煮沸具は1類・3類・4類である。

#### 朝日西遺跡<sup>注(9)</sup>

朝日西遺跡は清洲町に所在する。地形的には沖積低地の微高地上に立地している。清洲城下町遺跡に関連する遺跡として知られている。主要な遺構は中世～近世初頭のものである。今回注目するのは59E S K 238と呼称されている土坑出土資料である。出土している土師器煮沸具は1類である。

#### 大淵遺跡<sup>注(10)</sup>

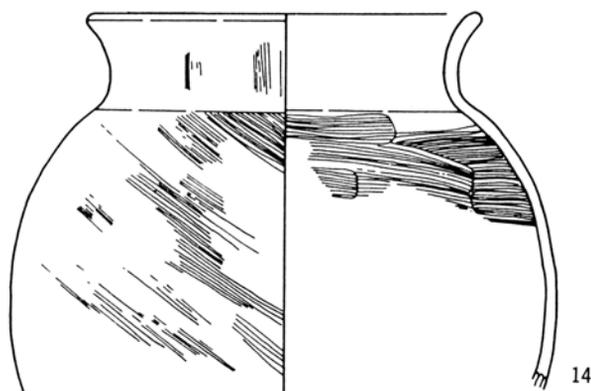
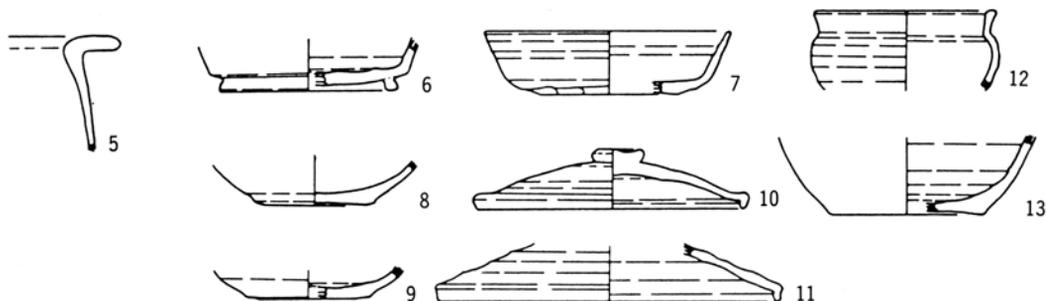
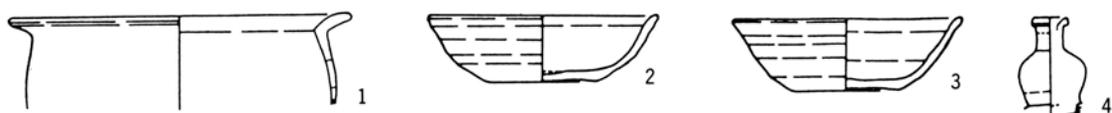
大淵遺跡は甚目寺町に所在する。地形的には沖積低地の微高地上に立地している。本項に関わる時期を中心とする集落遺跡で、掘立柱建物数十軒・溝・土坑などが検出されている。出土している土師器煮沸具は1類・3類・4類・6類である。

#### 清郷遺跡<sup>注(11)</sup>

清郷遺跡は一宮市に所在する。地形的には沖積低地の微高地上に立地している。本項に関わる時期の遺跡で竪穴遺構・鍛冶遺構などが検出されている。出土している土師器煮沸具は1類・2類である。

#### 尾張国府遺跡<sup>注(12)</sup>

尾張国府遺跡は稲沢市に所在する。地形的には沖積低地の微高地上に立地している。本項に関わる時期の遺跡で、多数の遺構が検出されているが、今回注目するのはS K 131と呼称されている土坑である。出土している土師器煮沸具は10類である。



1~15…加美遺跡  
 (1~4…SB02)  
 (5~11…SB25)  
 (14・15…SB12)  
 16~26…高橋遺跡  
 (16~24…8号・11号・23号住居上面)

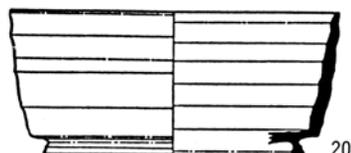
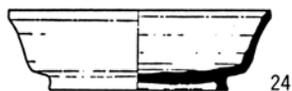
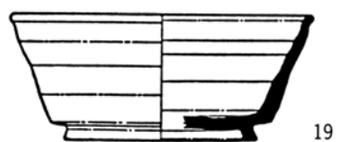
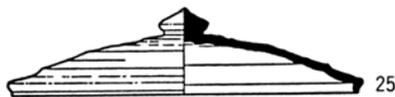
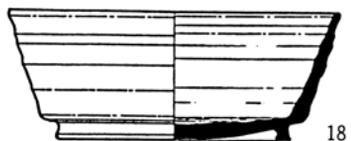
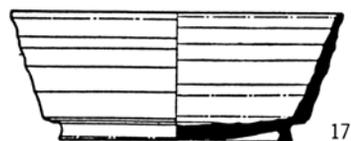
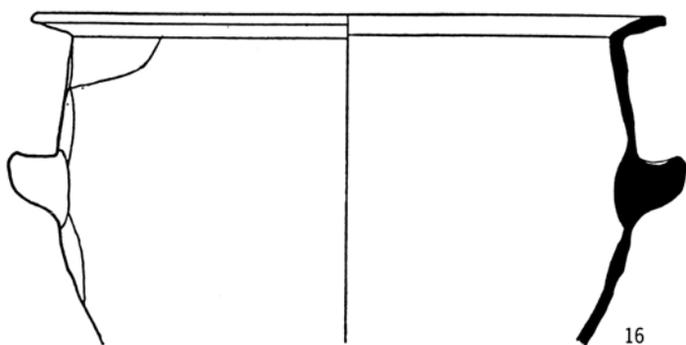


図15 比較資料実測図① (1/4)

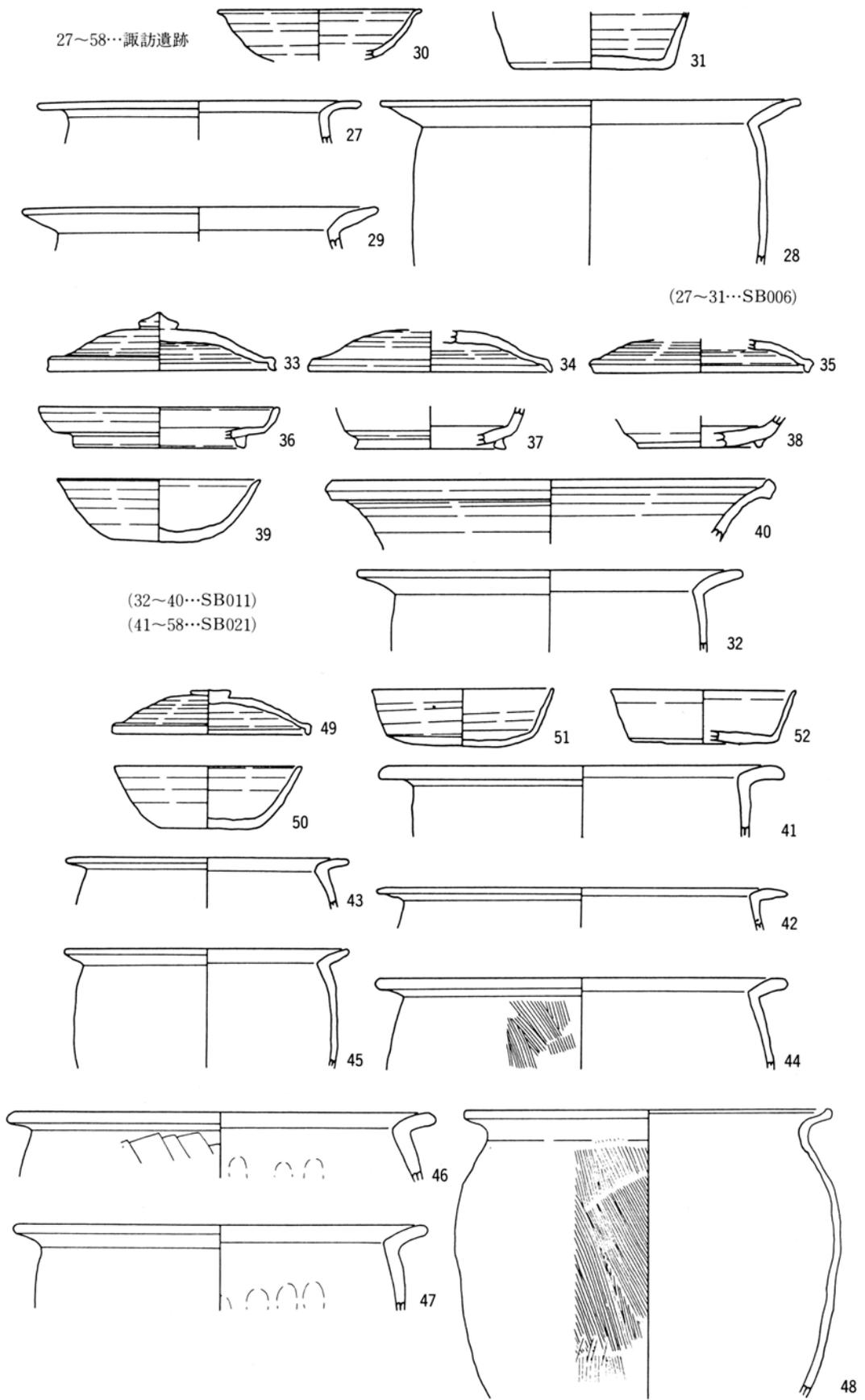


図16 比較資料実測図② (1/4)

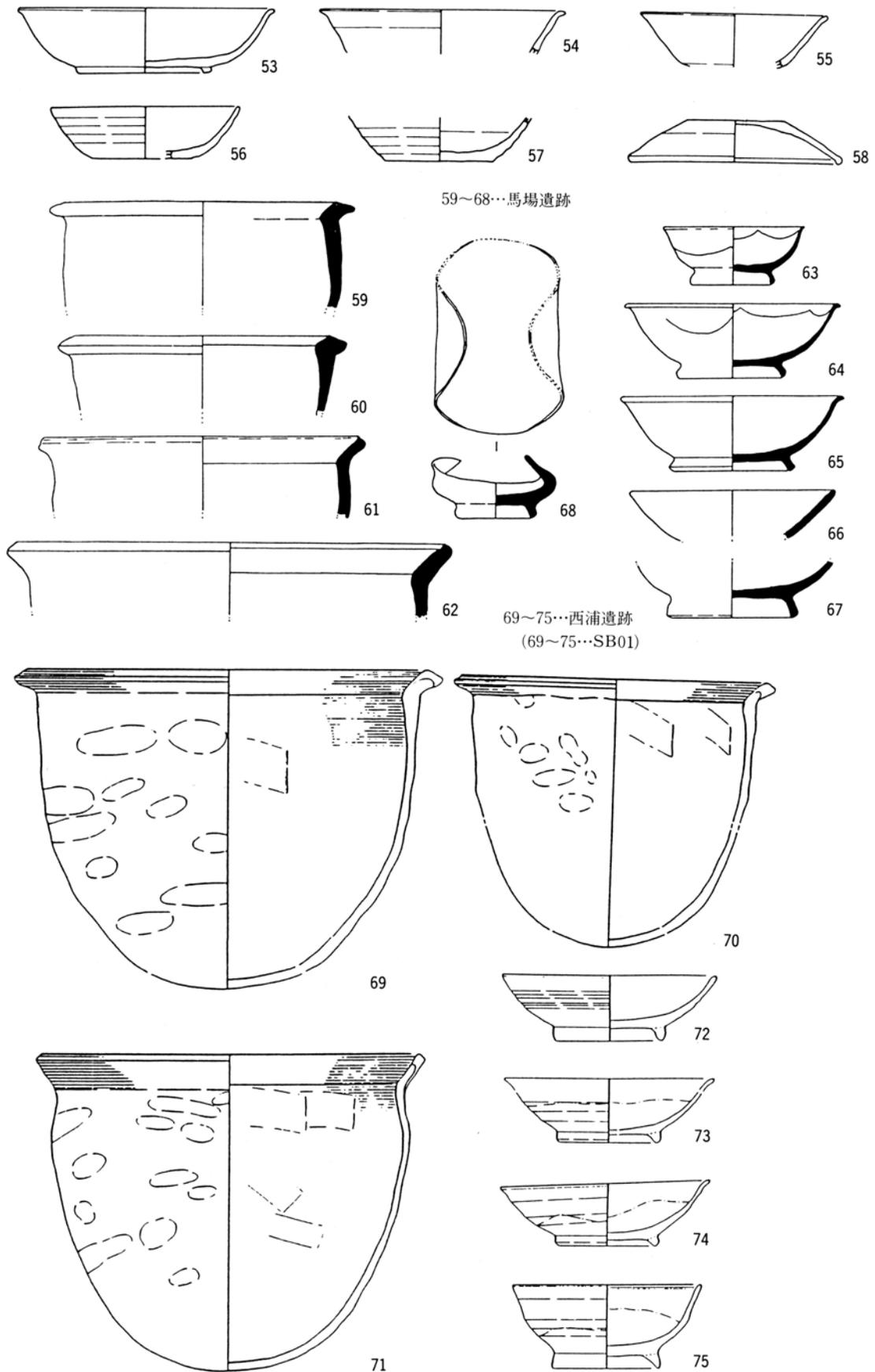
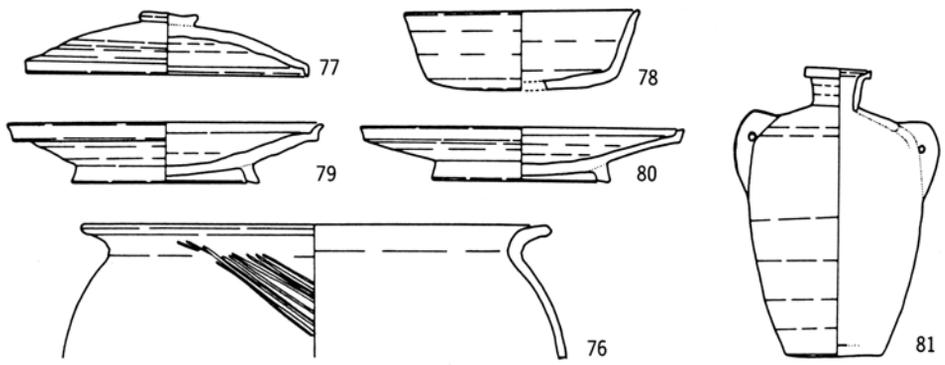
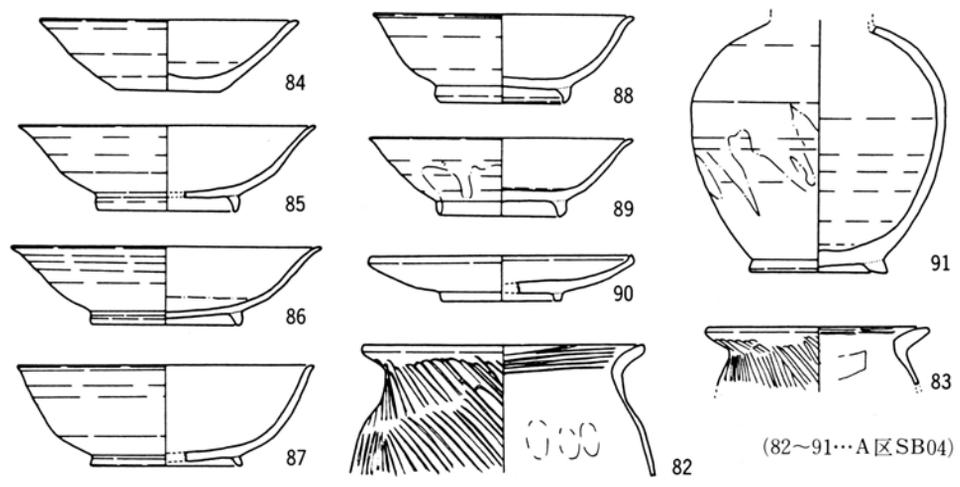


図17 比較資料実測図③ (1/4)



76~95...名古屋城三の丸遺跡

(76~81...A区SB11)



(92~97...A区SK807)

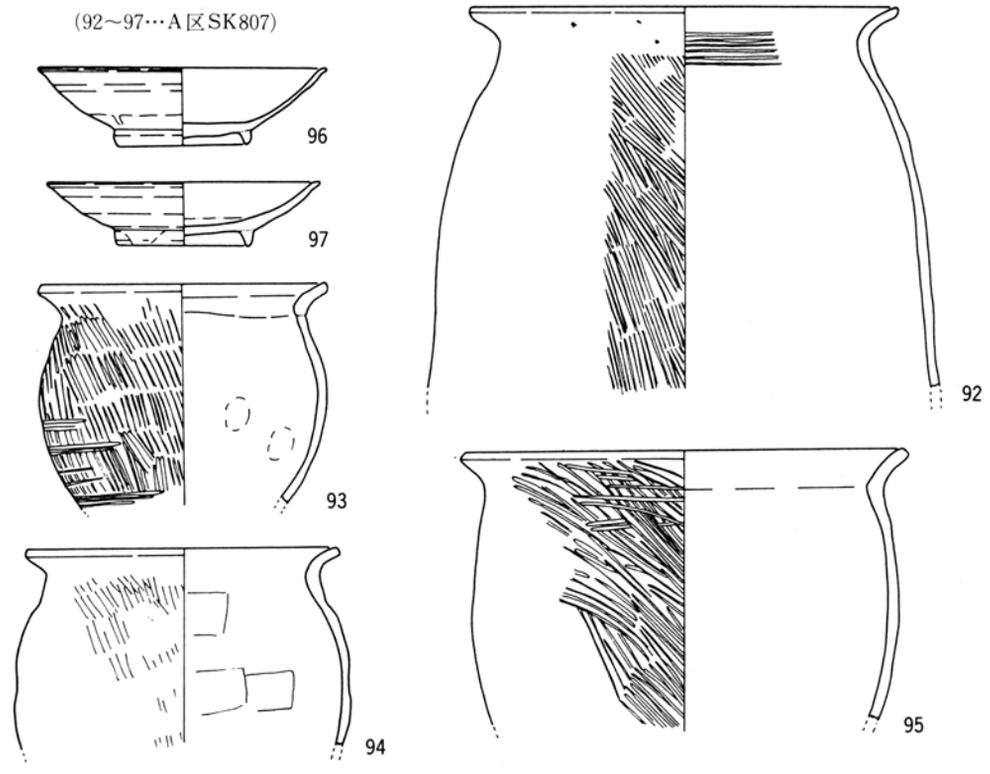


図18 比較資料実測図① (1/4)

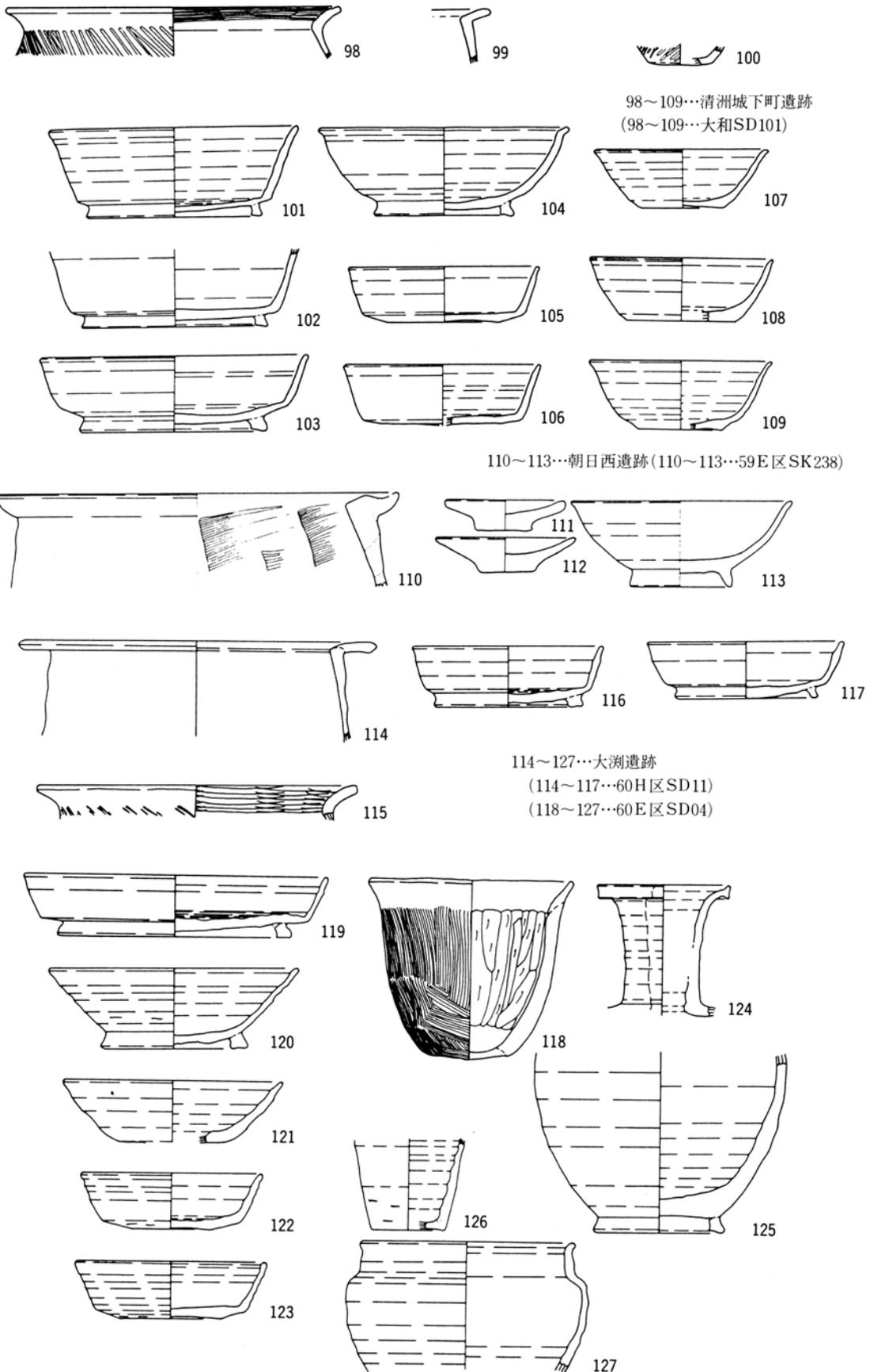


図19 比較資料実測図⑤ (1/4)

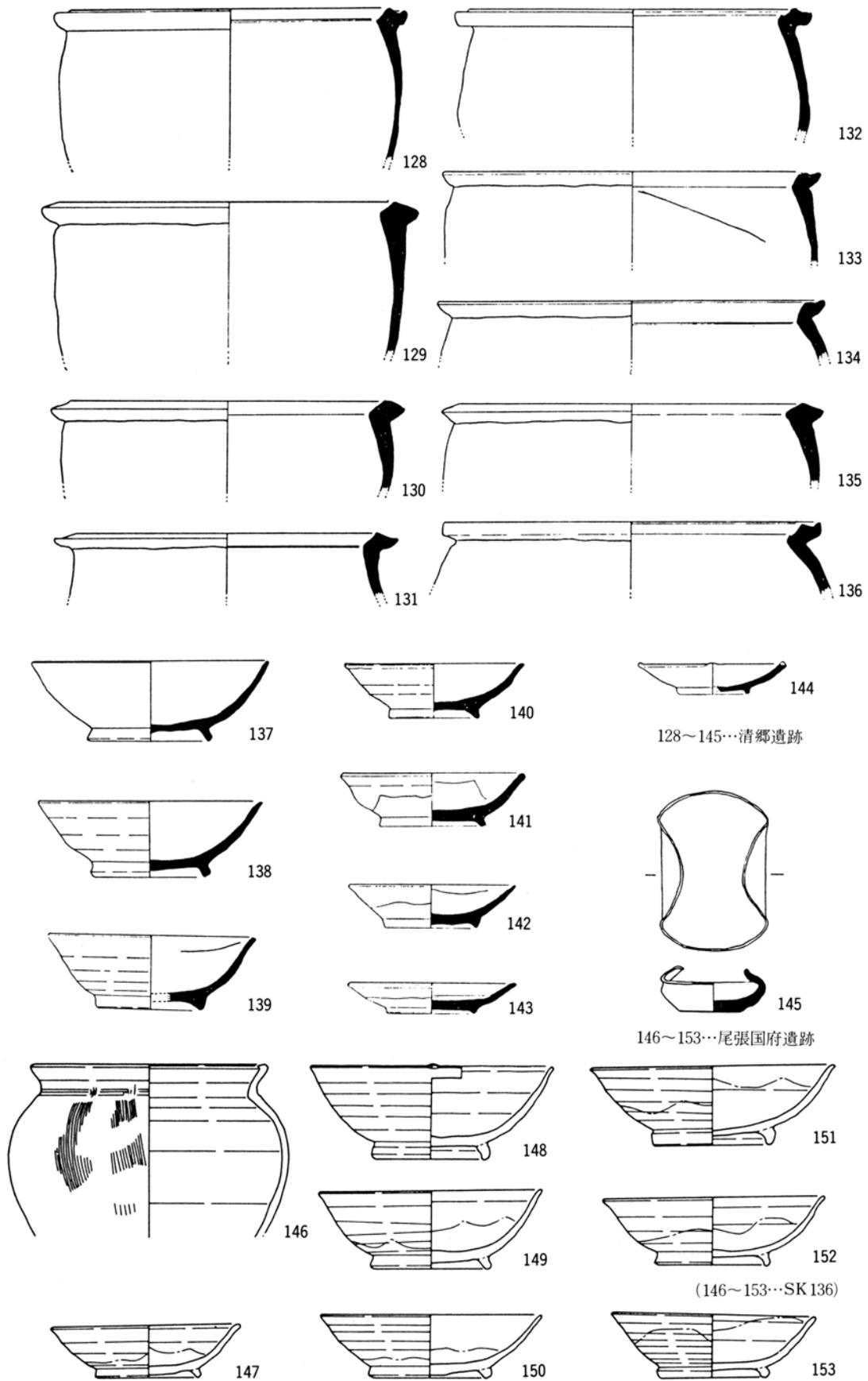


図20 比較資料実測図⑥ (1/4)



器煮沸具の主体となるのは甕で、西三河地方は1・2類が、尾張地方は3・4類がその主体となっていることがわかる。なお、特殊なものとして6～9類がみられるが、これらは多くが単一の遺跡から1点ないし数点確認されているのみで、基本形式として成立し得るかどうかすら判然としない。いずれにしろ、これらの全体に占める量的乏しきからこの地域の主体的な器種にはなりえないであろう。この時代に主体的になりうる煮沸具は長胴形を呈し、カマドを意識したような器形をとっていることは明らかである。

この様子は、平安時代中頃まで続く訳であるが、11世紀に入ると新たな動きが見られる。10類の出現がそれである。この10類は、いわゆる「伊勢型鍋」<sup>註(13)</sup>で、従来から言われるように中世前半に主体を占める器形である。一方、1・2類は器高の低いヘルメット状に変化すると推定される。従来言われている「清郷型甕」<sup>註(14)</sup>がそれである。この動きは球形の胴部を有する10類の出現とも類似している。竪穴住居の下火化に伴う作り付けカマドの減少と呼応するのであろうか。

伊勢型鍋

清郷型甕

次に1・2類の製作技法であるが、これらは前述したように全面ナデ調整を基本とするが、ハケメ調整痕を残すものが諏訪遺跡で確認されている。これについては諏訪遺跡に近接する長野県伊那谷周辺ではハケメ調整痕を残す土師器甕が主体となっているようであり、ここに系譜を求めることができるのだろうか。もしこのように考えることができるのならば、これは1・2類から区別し、同様のハケメ調整痕を残す8類とともに東三河地方で主体を占める以外の器種として区別できるのかもしれない。

前項まで述べたように、当地域における土師器煮沸具は12類存在することが考えられた。ただし現状では資料不足で、その基軸となったのが三河地方では1・2類、尾張地方では3・4類であったことを指摘できるのみで、これらの型式学的な資料操作及びその具体的変遷は今後の課題としたい。

基本器種

以上、志貴野遺跡でみられた煮沸具を志貴野II期について若干の整理を試みたが、今回はその資料的制約から編年を組むには至らなかった。今後の再検討が必要である。

注

- (1) 斎藤考正「灰釉陶器の研究I」『名古屋大学文学部研究論集XCV』1986
- (2) 愛知県埋蔵文化財センター『加美遺跡』1989
- (3) 豊田市教育委員会『高橋遺跡7次発掘調査報告書』1977
- (4) 愛知県埋蔵文化財センター『諏訪遺跡』1989
- (5) 愛知県教育委員会「馬場遺跡」『豊川用水関係埋蔵文化財調査報告』1972
- (6) 一宮町教育委員会「西浦遺跡の調査」『一宮東部地区ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』1987
- (7) 城ヶ谷和宏「三の丸遺跡出土の奈良・平安時代土器」『愛知県埋蔵文化財センター年報昭和63年度』1989
- (8) 清洲町教育委員会『清洲城下町遺跡I』1987
- (9) 佐藤公保「中世土師器研究ノート(1)」『愛知県埋蔵文化財センター年報昭和60年度』1986
- (10) 池本正明「大洲遺跡III期に見る平安時代の土器」『愛知県埋蔵文化財センター年報昭和61年度』1987
- (11) 稲沢市教育委員会『尾張国府跡発掘調査報告書(V)』1983
- (12) 一宮市市編さん室「清郷遺跡」『新編一宮市史資料編4』1974
- (13) 新田洋「平安時代—中世における煮炊用具—「伊勢型鍋」—に関する若干の覚え書き」『三重考古研究1』1985
- (14) 注121に同じ

## 第7章 ま と め

今回実施した志貴野遺跡の調査は古墳時代後期～平安時代末の集落遺跡としては西尾市域における初の調査事例となった。また、調査面積が7000㎡とやや広い範囲に及んでいるため、その成果が期待されることとなった。そして調査の結果、前章までに述べたような成果を得るに至ったが、以下にこの成果をまとめておく。

### 遺構

まず、今回の調査で検出した遺構は、I期（古墳時代）、II期（奈良時代後半～平安時代）と区分できる。さらにこれを時間的に眺めることによりこの地域における集落遺跡の具体的様子が明らかになってきた。この中で、II-1期からII-2期への変化は、集落が竪穴住居を主体とするものから掘立柱建物が主体とするものに変化していることが想定でき、ここに遺跡としての画期を認めることができた。また、この変化は多分に社会的変革を背景に有することが予想でき、しかもこれがこの地域すべての集落に共通の変化でないことと予想できることに、若干の興味を覚える。

### 遺物

次に遺物について述べるが、遺物についても、従来この地域においてはその様相が不明確であったことなどから貴重な知見を得るに至っている。なお、今回若干まとめて出土した土師器煮沸具は、編年を組むまでには至らなかったが、今後新たな年代の指標として、さらに注目していくべきであろう。ただし今回紹介した内容は、9・10世紀を中心としているもののその前後をも含んだもので、時間幅がやや広いものになっていること、この時代の集落遺跡は現状では調査時例に乏しく、前述のように年代の枠を大きく設定したにもかかわらず、比較資料に乏しいことなどの問題点がある。従って今回はあえて現状でこの時期に属するものと推定されるもの全てを（数量的に乏しいものも含めて）扱うという意味で、全て並列に設定する方法をとっている。従って今回報告するものは、型式学的な資料操作が十分なされたものではなく、今後これらの編年を完成させるための前段階的作業としての位置を考えたものである。また、今回合わせて行った土師器甕の重鉍物分析についてはデータ不足が最大の原因で良好な結果を得てはいない。これは全体にテストピースとした試料が少なすぎた可能性も考えられる。ただし今回は各テストピースの重量を記録せずにバリノ・サーヴェイ社に提出してしまったため、重鉍物が乏しく、分類不能とされた一群には、胎土そのものに重鉍物が少ない（混和材をあまり用いない）という特色を持つ可能性も含まれており、今後同様の分析を再度試みる必要があると思われる。そして、三河地方で最もポピュラーとなり得る1・2類と名古屋市名古屋城三の丸遺跡の調査でその存在が明らかになってきた尾張地方（名古屋台地と言うべきか）で主体を成すであろう3・4類との差異が単に形状・製作技法の面からのみでなく、胎土の自然科学的分析による差異についてもデータ化されることを期待する。

（池本正明）

### 考察の問題点

## (竪穴住居)

## 主要遺構計測一覧

遺構番号	調査区別遺構番号	長辺×短辺	備 考	遺構番号	規 模	長辺×短辺	備 考
S B01	89 Z S B01	4.5×-		S B63	2×3	2.2×5.5	ひずみ
02	62 A <sub>1</sub> S B02	2.2×-		64	3×5	8.3×4.4	"
03	62 A <sub>1</sub> S B03	4.4×-		65	2×3	1.6×4.7	"
04	62 A <sub>1</sub> S B06	3.8×3.4		66	1×2	4.3×2.1	
05	62 A <sub>1</sub> S B05	2.6×-		67	2×3	1.8×2.2	
06	62 B S B04	2.5×-		68	2×8	5.9×3.9	
07	62 A <sub>1</sub> S B07	3.9×3.8		69	2×(3)	3.9×-	
08	62 B S B01, 62 A <sub>1</sub> S K85	3.7×3.3		70	2×(4)	3.6×-	
09	62 A <sub>1</sub> S B08	4.5×4.5		71	2×(4)	3.0×-	
10	62 A <sub>1</sub> S B09	4.9×4.4	二軒の切り合い	(櫓)			
11	62 A <sub>1</sub> S B10	5.4×5.0	二軒の切り合い	遺構番号	大 き さ		
12	62 A <sub>1</sub> S B11	5.7×4.4	四軒の切り合い	S A01	10.1m		
13	62 A <sub>1</sub> S B12	3.4×4.2	南カマド	02	24.8m+14.0m		
14	62 A <sub>1</sub> S B13	3.9×1.5		03	11.7m+ 9.6m		
15	62 A <sub>1</sub> S B14	3.7×3.0		04	8.3m		
16	62 A <sub>1</sub> S B15	4.0×3.1		(溝)			
17	62 B S B02	3.1×3.2		遺構番号	調査区別遺構番号	幅 × 深 さ	
18	62 B S B04	5.1×5.3		S D01	A <sub>1</sub> S D01	0.2~0.8 (12.0)	
19	62 B S B03	3.1×4.3		02	B S D07	1.4~1.8 ( 9.0)	
20	62 A <sub>1</sub> S B16	3.9×-		03	B S D08	0.5~1.2 (20.0)	
21	62 B S K110	2.0×-		04	B S D10	0.5~0.8 ( 9.0)	
22	62 B S B05	3.1×2.8		05	B S D14	0.7~1.4 ( 6.0)	
23	62 B S B06	3.3×3.1		06	B S D17	1.6 (15.0)	
24	62 B S B09	2.0×-		07	B S D24	1.6 (11.0)	
25	62 B S B13	3.1×3.7		08	A <sub>2</sub> S D02	0.8~1.5 ( 6.0)	
26	62 B S B12	5.3×-		09	A <sub>2</sub> S D03	0.9 (10.0)	
27	62 B S B08			(土坑)			
28	62 B S B07	2.9×-		遺構番号	規 模	長 辺 × 短 辺	
29	62 B S B14	3.0×0.8		S K01	A <sub>1</sub> S K10	0.4×0.3	
30	62 B S B10, S B11	6.9×-		02	A <sub>1</sub> S B01	3.6×1.7	
31	62 A <sub>2</sub> S B03	3.5×-		03	A <sub>1</sub> S K41	1.8×-	
32	62 A <sub>2</sub> S B01	2.8×2.5		04	A <sub>1</sub> S K43	2.5×-	
33	62 A <sub>2</sub> S B04	2.7×-		05	A <sub>1</sub> S K65	0.6×0.8	
34	62 A <sub>2</sub> S B02			06	A <sub>1</sub> P .192	0.2×0.3	
35	63 A S B03	4.4×3.5		07	A <sub>1</sub> P .199	0.5×0.3	
36	63 B S B01	2.5×3.4		08	B S K01	2.1×-	
37	63 B S B02	2.7×1.8		09	A <sub>1</sub> S K103	3.4×1.2	
(掘立柱建物)				10	A <sub>1</sub> P .453	0.4×0.3	
遺構番号	規 模	長辺×短辺	備 考	11	B S K107	2.3×1.0	
S B38	2×(2)ヒサシ	6.6×-	東と南に廂	12	A <sub>1</sub> S K118	1.0×0.8	
39	2×2	2.4×5.1	S D01を意識	13	B S K15	4.4×1.5	
40	2×3	4.2×4.9	"	14	A <sub>1</sub> S K128	1.1×2.3	
41	1×2	1.2×3.0	ひずみ	15	A <sub>1</sub> P .804	0.2×0.2	
42	2×2	2.8×6.0	土坑を有する	16	A <sub>1</sub> S K156	0.6×1.2	
43	1×1	1.7×1.7	竪穴住の主柱穴か?	17	A <sub>1</sub> S K133	1.6×0.7	
44	2×3	3.1×3.7		18	B S K22	2.2×1.8	
45	1×3	3.2×5.0		19	B S K34	0.7×0.4	
46	2×(2)以上	3.0×-	総柱	20	B P .211	0.3×0.2	
47	2×3	4.3×4.8	ひずみ	21	B P .203	0.5×0.3	
48	2×4	6.0×4.3	ひずみ	22	B S K35	2.0×0.6	
49	"	7.5×4.5		23	B P .300	0.2×0.2	
50	2×3	6.0×3.8		24	B S K66	5.7×2.0	
51	3×5	4.2×7.0		25	B S K67	1.6×0.5	
52	1×3	3.6×4.1		26	B S K63	1.0×1.2	
53	2×3	4.3×2.7		27	B P .369	0.3×0.3	
54	2×(3)以上	3.4×-		28	B S K61	5.3×2.1	
55	2×3	3.6×4.9		29	B S K109	3.1×-	
56	1×3	3.6×3.6		30	B P .264	0.4×0.3	
57	2×3	3.4×6.7	土坑を有するののか	31	B P .379	0.3×0.3	
58	2×2	4.2×3.2		32	A <sub>2</sub> S K186	0.8×1.3	
59	1×3	4.6×2.1		33	A <sub>2</sub> S K03	2.3×-	
60	1×4	6.4×3.0	ひずみ	34	A <sub>2</sub> P .22	0.4×0.4	
61	2×4	3.3×4.4		35	A <sub>2</sub> P .81	0.3×0.5	
62	(1)×3	6.8×-		36	A <sub>2</sub> P .90	0.5×0.3	

遺構番号	規模	長辺 × 短辺
37	A <sub>2</sub> P.120	0.3×0.4
38	A <sub>2</sub> SK13	0.8×-

(以上単位はm)

主要遺物計測一覧

No.	出土遺構	調査区別遺構番号	登録No.	口径	底径	器高	備考
1	S B03	62A <sub>1</sub> S B03	62-E-119	15.7	8.0	2.5	
2	S B07	62A <sub>1</sub> S B07	62-E-121	10.65	4.6	4.4	
3	S B07	62A <sub>1</sub> S B07	62-E-120	9.6	-	3.4	
4	S B08	62B S B01	62-E-31	27.8	-	-	
5	S B09	62A <sub>1</sub> S B08	62-E-123	-	7.6	-	
6	S B09	62A <sub>1</sub> S B08	62-E-124	15.6	-	-	
7	S B11	62A <sub>1</sub> S B10	62-E-128	12.4	-	-	
8	S B11	62A <sub>1</sub> S B10	62-E-129	11.7	9.5	3.0	
9	S B11	62A <sub>1</sub> S B10	62-E-127	14.6	-	-	
10	S B11	62A <sub>1</sub> S B10	62-E-68	14.4	-	-	
11	S B11	62A <sub>1</sub> S B10	62-E-67	-	-	-	T.P.14
12	S B12	62A <sub>1</sub> S B11	62-E-130	11.1	8.4	3.45	
13	S B12	62A <sub>1</sub> S B11	62-E-131	13.8	-	-	
14	S B13	62A <sub>1</sub> S B12	62-E-134	17.4	-	-	
15	S B13	62A <sub>1</sub> S B12	62-E-6	13.3	6.0	4.4	
16	S B13	62A <sub>1</sub> S B12	62-E-132	18.0	-	-	
17	S B13	62A <sub>1</sub> S B12	62-E-133	14.2	-	-	
18	S B13	62A <sub>1</sub> S B12	62-E-7	15.0	7.4	2.2	
19	S B13	62A <sub>1</sub> S B12	62-E-137	-	8.4	-	
20	S B13	62A <sub>1</sub> S B12	62-E-70	28.8	-	-	T.P.9
21	S B13	62A <sub>1</sub> S B12	62-E-69	-	-	-	T.P.10
22	S B17	62B S B02	62-E-41	-	7.8	-	
23	S B17	62B S B02	62-E-40	-	6.8	-	
24	S B17	62B S B02	62-E-39	-	6.2	-	
25	S B17	62B S B02	62-E-37	-	6.5	-	
26	S B17	62B S B02	62-E-38	-	7.0	-	
27	S B17	62B S B02	62-E-34	9.0	4.6	3.2	
28	S B17	62B S B02	62-E-33	-	11.0	-	
29	S B17	62B S B02	62-E-42	-	13.4	-	
30	S B19	62B S B03	62-E-53	16.2	12.0	4.1	
31	S B19	62B S B03	62-E-47	-	6.6	-	
32	S B19	62B S B03	62-E-46	-	10.7	-	
33	S B19	62B S B03	62-E-52	14.0	6.8	4.2	
34	S B19	62B S B03	62-E-54	-	8.8	-	
35	S B19	62B S B03	62-E-48	-	4.8	-	
36	S B19	62B S B03	62-E-55	-	5.4	-	
37	S B19	62B S B03	62-E-56	-	7.2	-	
38	S B19	62B S B03	62-E-51	17.7	10.0	2.2	
39	S B19	62B S B03	62-E-43	15.2	-	-	
40	S B19	62B S B03	62-E-44	13.4	-	-	
41	S B19	62B S B03	62-E-50	-	15.0	-	
42	S B19	62B S B03	62-E-49	-	4.8	-	
43	S B19	62B S B03	62-E-45	15.2	-	-	
44	S B23	62B S B06	62-E-32	6.6	6.2	4.8	
45	S B24	62B S B09	62-E-30	-	12.5	-	
46	S B25	62B S B13	62-E-59	-	13.0	-	
47	S B25	62B S B13	62-E-58	11.6	8.0	4.6	
48	S B25	62B S B13	62-E-57	-	5.2	-	
49	S B30	62B S B10	62-E-152	13.2	-	-	
50	S B31	62A <sub>2</sub> S B03	62-E-141	-	5.6	-	
51	S B31	62A <sub>2</sub> S B03	62-E-14	-	8.0	-	
52	S B31	62A <sub>2</sub> S B03	62-E-13	-	6.0	-	
53	S B31	62A <sub>2</sub> S B03	62-E-140	-	5.4	-	
54	S B31	62A <sub>2</sub> S B03	62-E-147	-	8.0	-	
55	S B31	62A <sub>2</sub> S B03	62-E-11	14.8	6.7	3.1	
56	S B31	62A <sub>2</sub> S B03	62-E-12	-	6.1	-	
57	S B31	62A <sub>2</sub> S B03	62-E-142	-	6.8	-	
58	S B31	62A <sub>2</sub> S B03	62-E-10	-	6.6	-	
59	S B31	62A <sub>2</sub> S B03	62-E-31	27.8	-	-	

No.	出土遺構	調査区別遺構番号	登録No.	口径	底径	器高	備考
60	S B31	62A <sub>2</sub> S B03	62-E-81	33.8	-	-	T.P.6
61	S B31	62A <sub>2</sub> S B03	62-E-83	20.4	-	-	
62	S B31	62A <sub>2</sub> S B03	62-E-82	-	-	-	
63	S B31	62A <sub>2</sub> S B03	62-E-84	-	-	-	T.P.7
64	S B32	62A <sub>2</sub> S B01	62-E-148	17.8	-	-	T.P.16
65	S B34	62A <sub>2</sub> S B02	62-E-149	14.3	10.4	4.75	
66	S B34	62A <sub>2</sub> S B02	62-E-80	-	-	-	T.P.8
67	S B35	63B S B03	63-E-149	-	6.6	-	
68	S B35	63B S B03	63-E-148	15.4	-	2.5	
69	S B35	63B S B03	63-E-147	7.0	-	-	
70	S B36	63A S B01	63-E-144	13.2	4.0	4.3	
71	SB38柱穴	62A <sub>1</sub> S K17	62-E-2	-	11.2	-	
72	SB38柱穴	62A <sub>1</sub> S K13	62-E-1	13.5	7.6	3.7	
73	SB38柱穴	62A <sub>1</sub> S K13	62-E-3	6.6	-	-	
74	SB38柱穴	62A <sub>1</sub> S K13	62-E-4	15.8	-	-	
75	SB65柱穴	62B P.267	62-E-104	13.7	6.7	2.15	
76	S K01	62A <sub>1</sub> S K10	62-E-154	10.1	-	-	
77	S K02	62A <sub>1</sub> S B01	62-E-115	12.6	6.6	3.85	
78	S K02	62A <sub>1</sub> S B01	62-E-116	-	6.0	-	
79	S K02	62A <sub>1</sub> S B01	62-E-117	-	7.0	-	
80	S K02	62A <sub>1</sub> S B01	62-E-118	14.0	-	-	
81	S K02	62A <sub>1</sub> S B01	62-E-114	13.9	-	-	
82	S K03	62A <sub>1</sub> S K41	62-E-150	10.6	7.4	3.8	
83	S K04	62A <sub>1</sub> S K43	62-E-157	9.4	-	-	
84	S K05	62A <sub>1</sub> S K65	62-E-161	8.6	-	3.0	
85	S K06	62A <sub>1</sub> P.192	62-E-93	11.1	-	-	
86	S K07	62A <sub>1</sub> P.98	62-E-79	7.8	-	3.2	
87	S K07	62A <sub>1</sub> P.98	62-E-78	9.2	6.8	7.0	
88	S K08	62B S K01	62-E-188	13.8	8.0	4.4	
89	S K09	62A <sub>1</sub> S K103	62-E-76	16.6	7.8	5.7	
90	S K09	62A <sub>1</sub> S K103	62-E-167	16.0	7.4	4.7	
91	S K09	62A <sub>1</sub> S K103	62-E-74	13.8	6.4	4.7	
92	S K09	62A <sub>1</sub> S K103	62-E-75	13.8	6.6	4.4	
93	S K09	62A <sub>1</sub> S K103	62-E-73	-	6.6	-	
94	S K09	62A <sub>1</sub> S K103	62-E-77	-	6.5	-	
95	S K09	62A <sub>1</sub> S K103	62-E-72	26.4	-	-	T.P.11
96	S K09	62A <sub>1</sub> S K103	62-E-71	-	-	-	T.P.12
97	S K10	62A <sub>1</sub> P.453	62-E-97	13.7	6.6	4.2	
98	S K11	62B S K107	62-E-125	14.6	-	3.1	
99	S K12	62A <sub>1</sub> S K118	62-E-168	12.2	-	-	
100	S K13	62B S K15	62-E-174	11.9	8.0	3.7	
101	S K13	62B S K15	62-E-173	14.0	-	2.95	
102	S K14	62A <sub>1</sub> S K128	62-E-220	12.2	6.2	3.4	
103	S K14	62A <sub>1</sub> S K128	62-E-66	19.4	-	-	T.P.15
104	S K14	62A <sub>1</sub> S K128	62-E-65	-	-	-	T.P.16
105	S K15	62A <sub>1</sub> P.804	62-E-90	7.3	-	-	
106	S K16	62A <sub>1</sub> S K156	62-E-165	12.0	6.7	3.6	
107	S K18	62B S K34	62-E-176	9.2	4.3	2.6	
108	S K18	62B S K34	62-E-177	-	4.0	-	
109	S K19	62B P.211	62-E-113	15.8	6.7	5.7	
110	S K20	62B P.203	62-E-111	8.1	4.1	2.2	
111	S K21	62B S K35	62-E-181	16.0	7.0	4.8	
112	S K21	62B S K35	62-E-88	16.2	7.8	4.7	
113	S K21	62B S K35	62-E-62	-	6.3	-	
114	S K21	62B S K35	62-E-63	-	6.8	-	
115	S K21	62B S K35	62-E-87	8.5	4.8	1.7	
116	S K21	62B S K35	62-E-60	-	3.6	-	
117	S K21	62B S K35	62-E-61	-	-	-	
118	S K22	62B P.300	62-E-110	8.4	4.2	2.4	
119	S K23	62B S K66	62-E-201	12.3	6.6	4.1	
120	S K23	62B S K66	62-E-199	11.7	4.8	4.45	
121	S K23	62B S K66	62-E-204	-	8.0	-	
122	S K23	62B S K66	62-E-200	-	5.1	-	
123	S K23	62B S K66	62-E-205	14.3	-	3.15	

No.	出土遺構	調査区別遺構番号	登録No.	口径	底径	器高	備考	No.	出土遺構	調査区別遺構番号	登録No.	口径	底径	器高	備考
124	S K 23	62 B S K 66	62-E-202	14.6	-	-		188	谷埋土	63 N R 01	63-E-163	-	11.3	-	
125	S K 23	62 B S K 66	62-E-203	15.5	-	-		189	谷埋土	63 N R 01	63-E-118	15.2	10.6	3.4	
126	S K 24	62 B S K 67	62-E-218	14.7	6.6	4.6		190	谷埋土	63 N R 01	63-E-162	14.5	11.9	3.5	
127	S K 25	62 B S K 63	62-E-190	12.3	3.8	5.0		191	谷埋土	63 N R 01	63-E-207	12.8	9.5	3.7	
128	S K 26	62 B P. 369	62-E-153	8.8	4.2	4.3		192	谷埋土	63 N R 01	63-E-16	14.7	8.0	5.2	
129	S K 27	62 B S K 61	62-E-185	15.4	-	-		193	谷埋土	63 N R 01	63-E-282	13.2	6.1	3.65	
130	S K 27	62 B S K 61	62-E-184	-	11.2	-		194	谷埋土	63 N R 01	63-E-7	11.6	5.7	3.9	
131	S K 27	62 B S K 61	62-E-193	-	6.0	-		195	谷埋土	63 N R 01	63-E-164	11.7	4.4	3.55	
132	S K 27	62 B S K 61	62-E-195	14.1	6.0	4.7		196	谷埋土	63 N R 01	63-E-254	12.85	8.2	3.3	
133	S K 27	62 B S K 61	62-E-188	12.2	6.6	4.0		197	谷埋土	63 N R 01	63-E-206	12.4	4.6	3.2	
134	S K 27	62 B S K 61	62-E-183	-	6.4	-		198	谷埋土	63 N R 01	63-E-212	13.5	3.6	3.8	
135	S K 27	62 B S K 61	62-E-186	-	6.4	-		199	谷埋土	63 N R 01	63-E-142	12.5	5.7	4.5	
136	S K 27	62 B S K 61	62-E-189	14.2	6.8	2.3		200	谷埋土	63 N R 01	63-E-208	12.5	5.1	4.3	
137	S K 27	62 B S K 61	62-E-196	21.4	-	-		201	谷埋土	63 N R 01	63-E-10	11.6	5.6	4.4	
138	S K 27	62 B S K 61	62-E-190	-	-	-		202	谷埋土	63 N R 01	63-E-245	11.7	5.4	3.5	
139	S K 27	62 B S K 61	62-E-192	10.4	-	-		203	谷埋土	63 N R 01	63-E-11	11.2	5.2	4.0	
140	S K 27	62 B S K 61	62-E-197	-	6.6	-		204	谷埋土	63 N R 01	63-E-155	12.8	6.6	3.6	
141	S K 27	62 B S K 61	62-E-194	7.1	-	-		205	谷埋土	63 N R 01	63-E-103	14.3	7.4	2.9	
142	S K 27	62 B S K 61	62-E-89	-	-	-	T. P. 13	206	谷埋土	63 N R 01	63-E-171	12.8	7.6	2.8	
143	S K 27	62 B S K 61	62-E-191	-	-	-		207	谷埋土	63 N R 01	63-E-140	9.8	8.8	3.6	
144	S K 28	62 B S K 109	62-E-126	11.7	5.4	3.9		208	谷埋土	63 N R 01	63-E-156	14.9	-	4.0	
145	S K 29	62 B P. 264	62-E-102	8.3	4.4	2.85		209	谷埋土	63 N R 01	63-E-91	12.7	-	3.0	
146	S K 30	62 B P. 379	62-E-107	14.0	6.8	4.3		210	谷埋土	63 N R 01	63-E-272	14.0	-	-	
147	S K 31	62 A <sub>1</sub> S K 186	62-E-8	9.5	-	3.1		211	谷埋土	63 N R 01	63-E-24	10.2	7.2	11.6	
148	S K 31	62 A <sub>1</sub> S K 186	62-E-170	17.2	-	-		212	谷埋土	63 N R 01	63-E-223	21.6	-	-	
149	S K 31	62 A <sub>1</sub> S K 186	62-E-169	-	-	-		213	谷埋土	63 N R 01	63-E-23	-	-	-	
150	S K 32	62 A <sub>2</sub> S K 03	62-E-23	-	9.0	-		214	谷埋土	63 N R 01	63-E-30	-	4.4	-	
151	S K 32	62 A <sub>2</sub> S K 03	62-E-29	13.6	7.0	3.5		215	谷埋土	63 N R 01	63-E-278	-	-	-	
152	S K 32	62 A <sub>2</sub> S K 03	62-E-15	13.2	7.0	3.3		216	谷埋土	63 N R 01	63-E-66	5.8	-	-	
153	S K 32	62 A <sub>2</sub> S K 03	62-E-16	12.4	6.5	3.4		217	谷埋土	63 N R 01	63-E-57	9.8	-	-	
154	S K 32	62 A <sub>2</sub> S K 03	62-E-18	12.2	-	-		218	谷埋土	63 N R 01	63-E-81	-	-	-	
155	S K 32	62 A <sub>2</sub> S K 03	62-E-17	13.6	8.8	3.5		219	谷埋土	63 N R 01	63-E-117	-	-	-	
156	S K 32	62 A <sub>2</sub> S K 03	62-E-21	18.0	-	3.6		220	谷埋土	63 N R 01	63-E-25	10.0	11.8	3.3	
157	S K 32	62 A <sub>2</sub> S K 03	62-E-27	-	7.6	2.3		221	谷埋土	63 N R 01	63-E-188	21.6	-	-	
158	S K 32	62 A <sub>2</sub> S K 03	62-E-26	15.2	7.8	2.4		222	谷埋土	63 N R 01	63-E-187	29.9	-	-	
159	S K 32	62 A <sub>2</sub> S K 03	62-E-28	-	13.4	-		223	谷埋土	63 N R 01	63-E-205	29.7	-	-	
160	S K 32	62 A <sub>2</sub> S K 03	62-E-19	-	-	-		224	谷埋土	63 N R 01	63-E-45	17.6	-	-	
161	S K 32	62 A <sub>2</sub> S K 03	62-E-24	27.8	-	-		225	谷埋土	63 N R 01	63-E-72	13.8	-	-	
162	S K 32	62 A <sub>2</sub> S K 03	62-E-25	-	-	-		226	谷埋土	63 N R 01	63-E-173	19.3	-	-	
163	S K 32	62 A <sub>2</sub> S K 03	62-E-20	-	-	-		227	谷埋土	63 N R 01	63-E-279	-	-	-	
164	S K 32	62 A <sub>2</sub> S K 03	62-E-85	-	-	-		228	谷埋土	63 N R 01	63-E-226	-	13.8	-	
165	S K 32	62 A <sub>2</sub> S K 03	62-E-86	-	-	-		229	谷埋土	63 N R 01	63-E-221	16.3	7.6	5.2	
166	S K 33	62 A <sub>2</sub> P. 22	62-E-100	14.0	-	-		230	谷埋土	63 N R 01	63-E-111	14.6	7.8	4.6	
167	S K 34	62 A <sub>2</sub> P. 81	62-E-94	13.4	-	-		231	谷埋土	63 N R 01	63-E-123	16.0	7.2	6.1	
168	S K 35	62 A <sub>2</sub> P. 90	62-E-95	-	7.0	-		232	谷埋土	63 N R 01	63-E-113	15.4	6.5	4.4	
169	S K 36	62 A <sub>2</sub> P. 120	62-E-99	14.3	7.0	4.15		233	谷埋土	63 N R 01	63-E-154	14.0	6.6	4.2	
170	S K 37	62 A <sub>2</sub> S K 13	62-E-172	-	6.9	-		234	谷埋土	63 N R 01	63-E-4	15.0	6.4	5.7	
171	S D 01	62 A <sub>1</sub> S D 01	62-E-206	13.75	8.2	3.85		235	谷埋土	63 N R 01	63-E-285	12.4	4.7	5.0	
172	S D 01	62 A <sub>1</sub> S D 01	62-E-211	12.4	-	-		236	谷埋土	63 N R 01	63-E-183	-	6.3	-	
173	S D 01	62 A <sub>1</sub> S D 01	62-E-210	13.4	-	-		237	谷埋土	63 N R 01	63-E-235	15.7	-	-	
174	S D 01	62 A <sub>1</sub> S D 01	62-E-207	-	6.2	-		238	谷埋土	63 N R 01	63-E-67	12.8	-	-	
175	S D 01	62 A <sub>1</sub> S D 01	62-E-209	19.8	-	-		239	谷埋土	63 N R 01	63-E-264	18.6	-	-	
176	S D 01	62 A <sub>1</sub> S D 01	62-E-208	15.2	-	-		240	谷埋土	63 N R 01	63-E-274	9.4	4.9	2.85	
177	S D 05	62 A <sub>2</sub> S D 05	62-E-215	13.0	5.6	5.3		241	谷埋土	63 N R 01	63-E-2	11.3	6.2	3.9	
178	S D 06	62 A <sub>2</sub> S D 03	62-E-214	-	6.8	-		242	谷埋土	63 N R 01	63-E-106	14.6	6.3	2.5	
179	S D 06	62 A <sub>2</sub> S D 03	62-E-213	-	6.4	-		243	谷埋土	63 N R 01	63-E-108	16.3	7.0	3.0	
180	谷埋土	63 N R 01	63-E-157	17.4	11.4	6.4		244	谷埋土	63 N R 01	63-E-238	15.0	8.3	2.6	
181	谷埋土	63 N R 01	63-E-48	13.8	-	-		245	谷埋土	63 N R 01	63-E-240	13.8	7.6	2.5	
182	谷埋土	63 N R 01	63-E-150	-	11.4	-		246	谷埋土	63 N R 01	63-E-99	14.1	6.8	2.4	
183	谷埋土	63 N R 01	63-E-166	-	10.7	-		247	谷埋土	63 N R 01	63-E-1	14.6	7.0	2.8	
184	谷埋土	63 N R 01	63-E-167	-	10.0	-		248	谷埋土	63 N R 01	63-E-3	13.5	6.6	2.0	
185	谷埋土	63 N R 01	63-E-8	-	10.2	-		249	谷埋土	63 N R 01	63-E-130	12.7	-	-	
186	谷埋土	63 N R 01	63-E-80	-	12.3	-		250	谷埋土	63 N R 01	63-E-219	17.6	-	-	
187	谷埋土	63 N R 01	63-E-160	-	10.4	-		251	谷埋土	63 N R 01	63-E-127	15.2	-	-	

No.	出土遺構	調査区別遺構番号	登録No.	口径	底径	器高	備考
252	谷埋土	63 NR01	63-E-107	-	8.1	-	
253	谷埋土	63 NR01	63-E-211	18.6	7.7	2.25	
254	谷埋土	63 NR01	63-E-31	-	4.8	-	
255	谷埋土	63 NR01	63-E-202	-	7.0	-	
256	谷埋土	63 NR01	63-E-107	8.0	5.0	1.5	
257	谷埋土	63 NR01	63-E-211	-	11.8	-	
258	谷埋土	63 NR01	63-E-12	7.6	-	-	
259	谷埋土	63 NR01	63-E-14	10.0	-	-	
260	谷埋土	63 NR01	63-E-137	-	-	-	
261	谷埋土	63 NR01	63-E-112	10.4	-	-	
262	谷埋土	63 NR01	63-E-6	-	4.8	-	
263	谷埋土	63 NR01	63-E-5	-	4.5	-	
264	谷埋土	63 NR01	63-E-200	-	15.2	-	
265	谷埋土	63 NR01	63-E-69	-	8.8	-	
266	谷埋土	63 NR01	63-E-20	-	8.0	-	
267	谷埋土	63 NR01	63-E-161	-	9.8	-	
268	谷埋土	63 NR01	63-E-214	-	6.1	-	
269	谷埋土	63 NR01	63-E-22	-	12.2	-	
270	谷埋土	63 NR01	63-E-17	-	18.0	-	
271	谷埋土	63 NR01	63-E-126	-	15.0	-	
272	谷埋土	63 NR01	63-E-270	-	13.3	-	
273	谷埋土	63 NR01	63-E-188	-	14.1	-	
274	谷埋土	63 NR01	63-E-189	-	-	-	
275	谷埋土	63 NR01	63-E-27	-	-	-	
276	谷埋土	63 NR01	63-E-26	-	-	-	
277	谷埋土	63 NR01	63-E-303	15.0	-	-	
278	谷埋土	63 NR01	63-E-291	-	4.4	-	
279	谷埋土	63 NR01	63-E-225	8.8	-	-	
280	谷埋土	63 NR01	63-E-188	-	6.5	-	
281	谷埋土	63 NR01	63-E-53	12.4	-	-	
282	谷埋土	63 NR01	63-E-181	11.6	-	-	
283	谷埋土	63 NR01	63-E-37	12.0	-	-	
284	谷埋土	63 NR01	63-E-36	10.2	-	-	
285	谷埋土	63 NR01	63-E-186	-	3.6	-	
286	谷埋土	63 NR01	63-E-21	13.8	8.0	3.0	
287	谷埋土	63 NR01	63-E-301	44.2	-	-	
288	谷埋土	63 NR01	63-E-237	31.0	-	-	
289	谷埋土	63 NR01	63-E-213	28.9	-	-	
290	谷埋土	63 NR01	63-E-230	26.4	-	-	
291	谷埋土	63 NR01	63-E-214	22.0	-	-	
292	谷埋土	63 NR01	63-E-206	29.0	-	-	
293	谷埋土	63 NR01	63-E-221	21.6	-	-	
294	谷埋土	63 NR01	63-E-200	25.6	-	-	
295	谷埋土	63 NR01	63-E-215	21.2	-	-	
296	谷埋土	63 NR01	63-E-121	16.7	-	-	
297	谷埋土	63 NR01	63-E-302	-	-	-	
298	谷埋土	63 NR01	63-E-119	-	-	-	
299	谷埋土	63 NR01	63-E-94	-	-	-	
300	谷埋土	63 NR01	63-E-125	-	-	-	
301	谷埋土	63 NR01	63-E-58	-	-	-	
302	包含層	63検出	63-E-28	-	-	-	
303	包含層	63検出	63-E-91	14.2	7.2	5.2	
304	包含層	63検出	63-E-261	30.4	-	-	

(以上単位はcm)

# 小島遺跡

〈開発前の沖積低地〉

——西尾市矢作古川——

1989 早春



# 第1章 調査経過

## 1. 調査の経緯

小島遺跡は、愛知県西尾市小島町字岡ノ山に所在する。愛知県土木部は、西三河地区において国道23号バイパス線の建設を行っており、愛知県埋蔵文化財センターは、この工事に伴う遺跡の調査を委託され、昭和61年度より西尾市域で、試掘調査及び発掘調査を実施している。

小島遺跡は、文化庁編集の全国遺跡地図には記載されておらず、昭和62年度に矢作川左岸から東側の平野部における国道用地内の試掘調査によって、遺物包含層が検出されたため遺跡として認定された。平成元年2月から3月上旬にかけて、試掘調査で遺物の検出された沖積地と同一面の下位区と、道路を隔てて近接する丘陵の南斜面で、人為的に削られて平坦面をなす上位区のを合わせて1000㎡の発掘調査を行った。(第1図)

## 2. 位置と環境

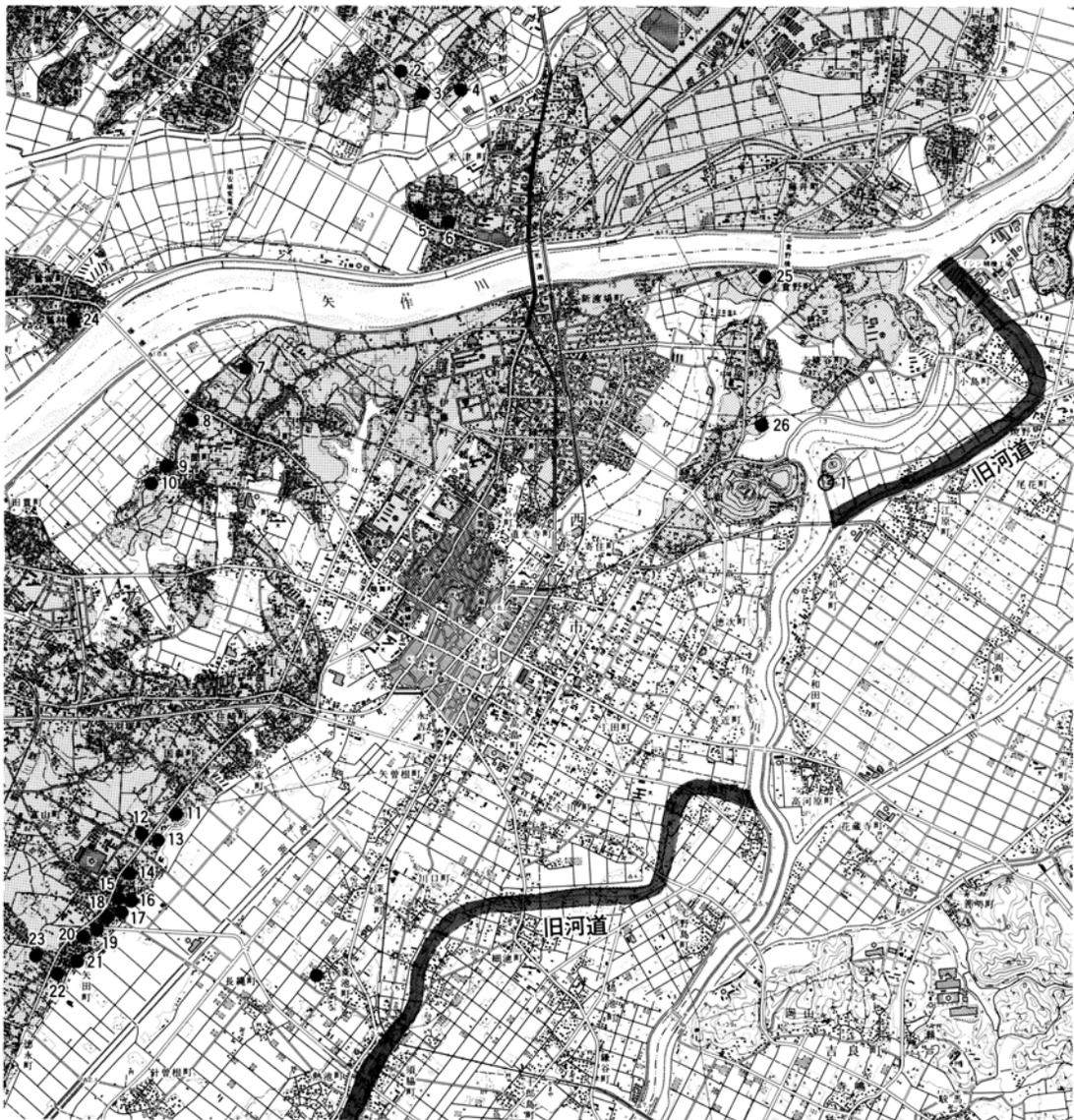
西尾市は、西三河平野の南部に位置する。市域の北東部から西部にかけては碧海台地が、東部から南部には沖積低地が広がる。市の東の境界は、美濃三河高原南部の山地帯で、碧海台地の東側には、これに連なる残留丘が存在する。小島遺跡は、岡ノ山と呼ばれる標高29.6mの残留丘の南斜面及び裾部の沖積地に所在する。調査区の東側と南側は、三河湾まで続く沖積低地で、西側は、下位区との比高差約4mの堤防を隔てて矢作古川が流れる。

本遺跡の主要な時期は中世末から近世初頭にかけての時期である。市域の中世及び近世の遺跡は、南中根町と米津町付近、小間町付近、上矢田町と下矢田町付近に集中する。(第2図) 現在の矢作川が、17世紀初頭に開鑿される以前は、米津町近辺まで海が湾状に入りこんでいたと推測され、南中根町から小間町にかけての台地縁辺に貝殻の人為的な散布地



第21図 調査区位置図 (1/5000)

が確認されている。淡水産の貝が認められる地点もあるが、いずれも鹹水産の貝を主体とする。出土遺物としては、中世の灰釉系陶器・土鍋を中心とする。矢田町には、集中して十数ヶ所の散布地が存在し、いずれも中世後半から近世初期の時期で、淡水あるいは鹹水産の貝が認められる。小島遺跡付近では、集落遺跡である志貴野遺跡及び蔵屋敷遺跡で中世の遺構が検出されている。また、矢作川との分岐点から小島遺跡の下流300mの江原橋付近までの矢作古川の河床からは、古代末から中世前半の遺物が多数出土する。しかし、この地域の当該期の遺跡は、市西部に比較して少なく、ほとんど解明されていない。



- |            |            |             |         |             |
|------------|------------|-------------|---------|-------------|
| 1 小島遺跡     | 2 貝ス貝塚     | 3 荒子貝塚      | 4 城山貝塚  | 5 蔵屋敷貝塚     |
| 6 里貝塚      | 7 六ッ家貝塚    | 8 浜屋敷貝塚     | 9 小間貝塚  | 10 小間大塚(貝塚) |
| 11 不動貝塚    | 12・13 北野貝塚 | 14 東出貝塚     | 15 郷後貝塚 | 16 屋下貝塚     |
| 17~19 熊子貝塚 | 20 熊野社貝塚   | 21・22 円入庵貝塚 | 23 西浦貝塚 | 24 荒井貝塚     |
| 25 志貴野遺跡   | 26 蔵屋敷貝塚   |             |         |             |
- ※網フセは碧海台地

第22図 遺跡位置図 (1/50,000)

## 第2章 遺構

### 1. 基本層序

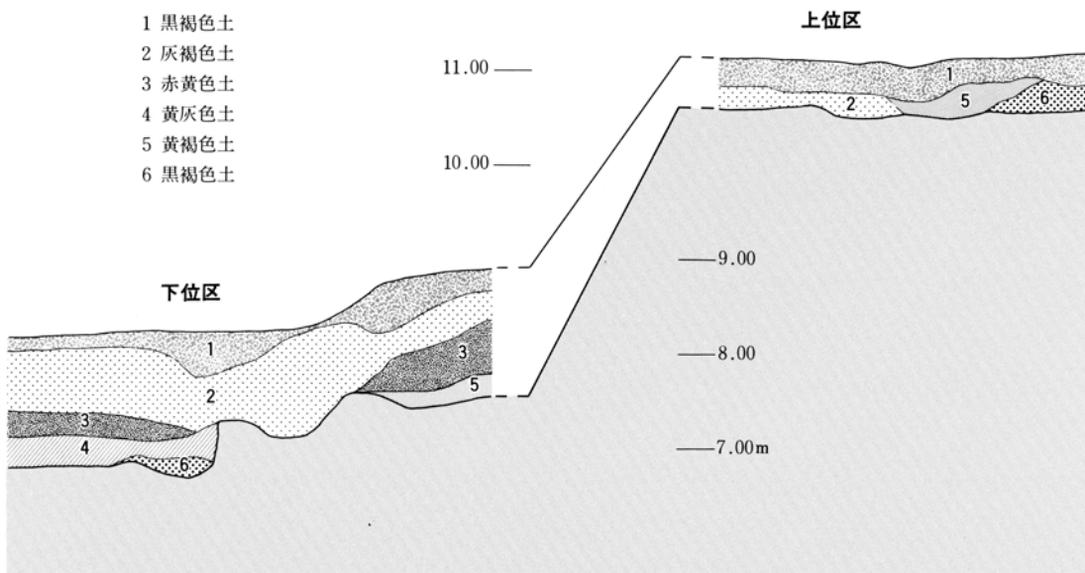
調査区北半の上位区は、丘陵の緩斜面を水平に削って整地し、近年まで宅地となっていた部分である。標高11.5mを測る。層序は、I. 黒褐色土（現表土）・II. 灰褐色土（旧耕作土）で、深さ0.6～0.7mで基盤の洪積層の赤褐色土に達する。下位区の南2/3は沖積地で、標高約8mを測り、北1/3は丘陵の裾の緩斜面で、標高8.5～9mを測り、調査前は畑地であった。層序は、沖積地部分では、I. 黒褐色土（表土）・II. 灰褐色（耕作土）・III. 明赤黄色土（客土）・IV. 黄灰色土（旧耕作土）で、深さ1.2～1.5mで洪積層の赤褐色土に至る。緩斜面の部分では攪乱が多く、II層とIII層が複雑に混じる。（第3図）

### 2. 遺構

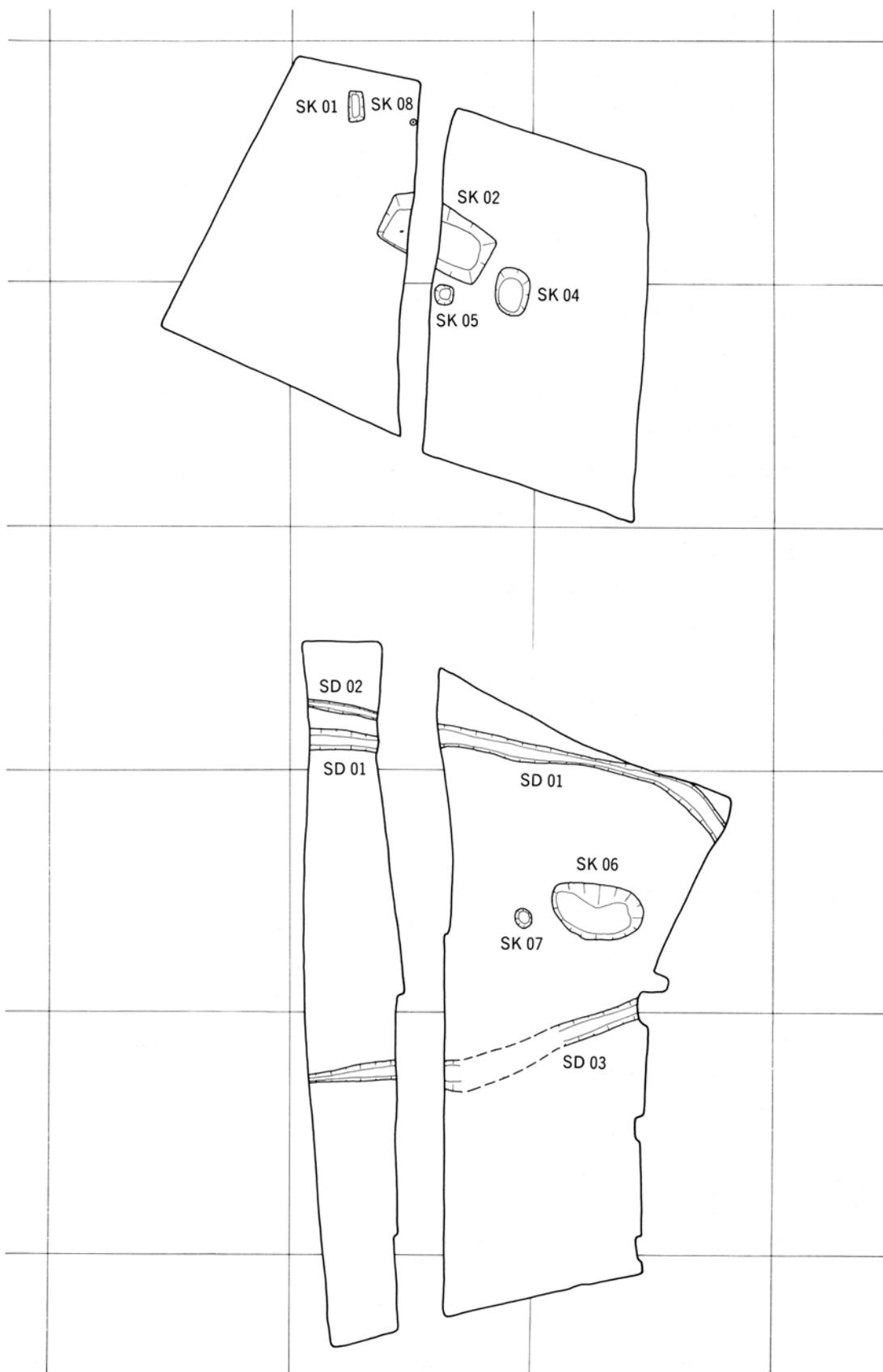
遺構は、上位区と下位区を合わせて土坑6基・溝3条を検出した。（第4図）

上位区 土坑4基を検出した。調査区中央のSK02は、南北2.5m・東西4.6mのほぼ長方形をなし、瓦及び近世後半から近代の陶器片が少量検出された。他の3基の土坑からも近世後半以降の時期の遺物が、少量出土した。いずれも、家屋等の建造物に伴うものと考えられる。

下位区 土坑2基・溝3条を検出した。SK06は、南北1.3m・東西2.5mの楕円形で、深さ0.4mを測る。埋土中より16世紀末～17世紀前半の陶器類及び土師器類が出土した。江戸時代初期の土坑と考えられる。溝3条は傾斜地の等高線に沿った方向で、調査区を東西に横断する。いずれも、幅0.4～0.7m・深さ約0.2mで、耕地の用排水に関連するものと推測される。遺構に伴う遺物はなく、近代以降の時期と考えられる。



第23図 基本層序



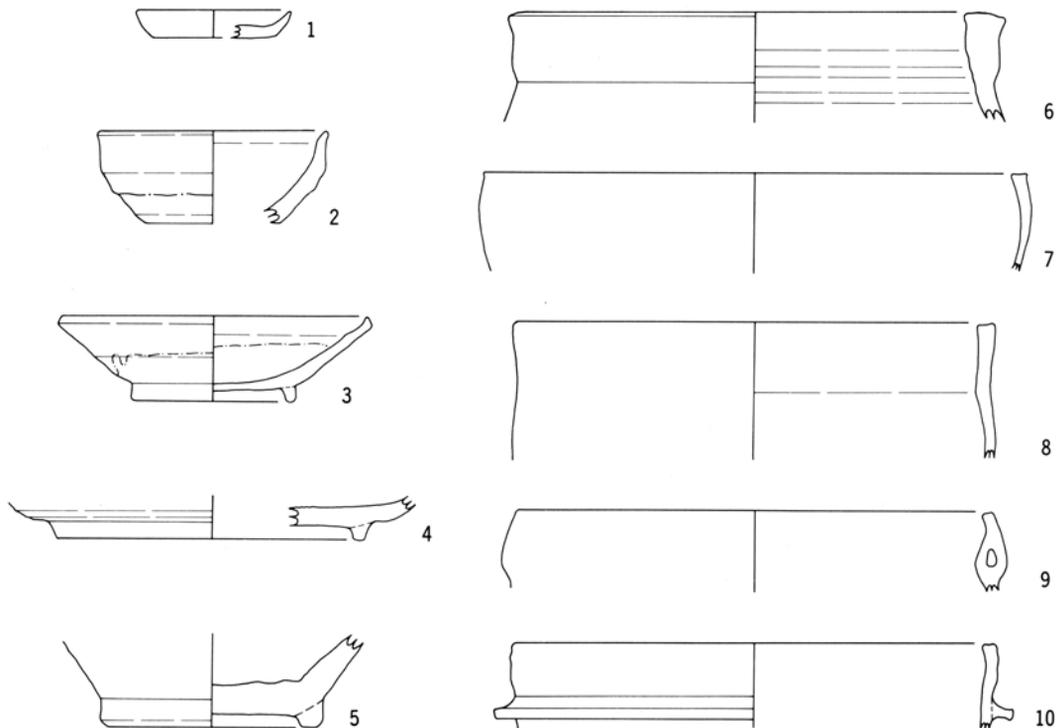
第24図 遺構全体図 (1/250)

### 第3章 遺物

遺物は、上位区では遺構検出面からの出土が多く、下位区は、Ⅳ層及び遺構検出面から出土したものが大きな割合を占める。

上位区 出土遺物は、弥生時代後期土器・12世紀から14世紀代の灰釉系陶器・16世紀から17世紀代の陶器類及び土師器類・近世後半以降の陶器類及び土師器類が出土した。出土量は、整理用の箱1箱分で、遺構に伴わず、図示しえるものは無かった。

下位区 出土遺物の構成は、上位区と同じであるが、中世から近世初頭の土師器類・陶器類がやや多く検出され、S K06の埋土中よりこの時期の遺物がまとまって出土した。第25図はS K06資料である。1は土師器で、轆轤成形で底部に回転糸切り痕を残す。2は、天目茶碗で、体部は直線的に開き、口唇部はほぼ直立し、端部がわずかに外反する。褐色がかかった鉄釉が施される。3は輪奘皿で、外面には口端から約1/4まで、内面は口端から約1/2までと底部分に灰釉が施される。4は、大皿で、内外面全体及び底部まで灰釉が施される。6は、常滑焼の甕の口縁部である。7は、土鍋の口縁部である。口縁上端面は強くなでられ、外面に煤が付着する。8は、土鍋で口縁部から下がった部分で屈曲し、内面に稜線をなす。外面には煤が付着する。9は、土鍋で、口縁部が内湾する形態のものである。7・8が精選された胎土で、明黄灰色を呈するのに対して、9は、褐色で砂粒を多く含む荒い胎土である。10は、口縁部下部に鏝が廻る形態の土鍋である。これらは、16世紀後葉から17世紀前半の時期に属す。



第25図 出土遺物 (1/4)

## 第4章 ま と め

矢作古川が、現在の流路に確定したのは17世紀と推定されている。地形及び土地利用の状況から矢作川（新川）との分岐点から江原橋の間の本来の自然流路は、第2図に示した位置にあったことが推測されている。新川から分岐して数百m下流の西の大郷山と東の馬場山の間低地及び、約2.0km下流の西の八ツ面山の女山と東の岡ノ山の間低地が掘削され、この間の流路が成立したのは新川開鑿以前と考えられるが、その目的、詳しい時期は不明である。慶長十年（1605年）に志貴野町から米津町にかけての碧海台地を横断して、長さ1300m 幅36m 深さ7.2mあるいは3.6mの人工的な流路の掘削を開始し、数年後下流部に堤防を築き、矢作川が固定され、現在の形になったことが文献で確認されている。この時点では、古川の本来の流路の二ヶ崎川と、人為的な竜宮川は併存していたが、その後、延宝七年（1679年）には、二ヶ崎川の流路は新田となっていたことが記録されている。新川成立後約60年までのある時点で、古川の旧河道が不必要となって廃され、埋め立てられたことが明かになっている<sup>注(1)</sup>。

小島遺跡調査の目的の一つは、調査区に接する古川の人為的な流路の17世紀以前とされる開鑿時期の確定であった。調査区で検出された遺構は、17世紀代と考えられる1基の土坑以外は、これより新しい時期のものであり、下位区で堤防の土盛に伴う層序などは認められず、この問題に関連するものは確認されなかった。遺物に関しては、中世末期以降の時期に属し、大部分は包含層中より検出された近代のものである。下位区では、耕作土と客土中から中世から近世初期の遺物がやや集中して出土しており、時期が推定できる土抗の埋土より陶器類と土師器類がまとまって検出されている。これは、竜宮川開鑿を含めたこの地域の環境変化と関連するものと推測されるが、直接この川の成立に関わる現象とは考えられない。中世までは岡ノ山の南斜面には集落は存在しないが、竜宮川成立後に削平などの宅地のための整地が行われ、現在のような地形になったことが推定されるが、竜宮川の開鑿の時期・状況については不明である。文献史料による究明と共に、今後解明すべき課題である。

また、古川河床からは前述したように、古代から中世にかけての遺物が出土し、西尾市教育委員会に、12世紀代を中心とする灰釉系陶器及び土師器の甕が保管されている。これらは流水による摩滅が少ないうえ、完形品に近いものも含まれ、付近から流入したと考えられる状況にある。今回の調査では、この時期の遺構・遺物はなく、遺物の状況も異なり関連性はない。周辺の遺跡の調査を通じて追求すべき問題と考えられる。（酒井俊彦）

注(1) 以上は『西尾市史 1』自然環境を参照した。

S K

主要遺構計測一覧

番号	調査区別遺構番号	長径	短径	深さ(m)
1	S K01	1.2	0.6	0.2
2	<S K02> <S K03>	4.6	2.5	0.1
4	S K04	2.0	1.4	0.1
5	S K05	0.9	0.8	0.2
6	S K06	2.5	1.3	0.4
7	S K07	0.9	0.6	0.5
8	P. 1	0.2	0.2	0.2

主要遺物計測一覧

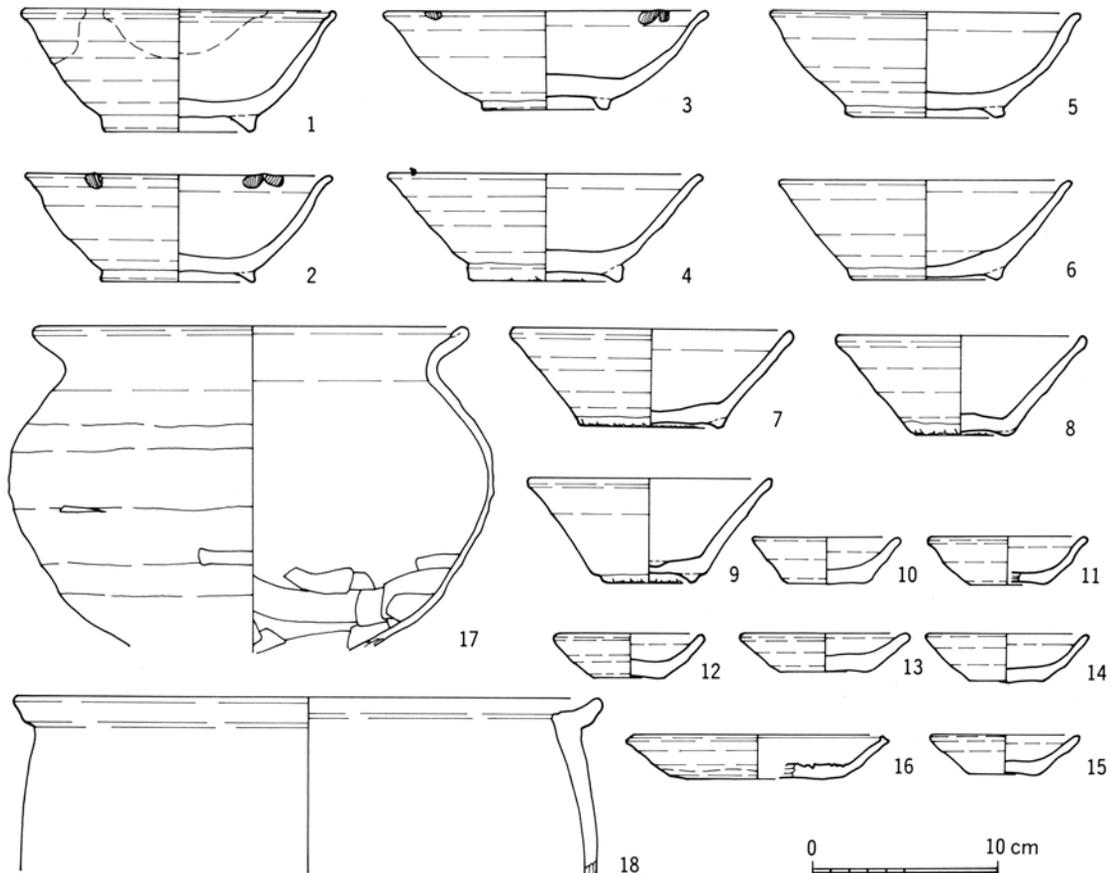
No.	口径	底径	器高	登録番号
1	8.2	6.6	1.4	62-E-1
2	12.2	-	-	62-E-2
3	16.4	8.4	4.5	62-E-3
4	-	16.4	-	62-E-4
5	-	11.2	-	62-E-5
6	25.0	-	-	62-E-6
7	29.0	-	-	62-E-7
8	25.4	-	-	62-E-8
9	25.2	-	-	62-E-9
10	25.9	-	-	62-E-10

S D

番号	調査区別遺構番号	幅	深さ(m)
1	S D01	0.8	0.4
2	S D02	1.3	0.2
3	S D03	0.9	0.4

付載

ここでは、矢作古川河床採集の遺物実測図を掲載する。この資料は現在西尾市立東部中学校に保管されており、同校の神谷知幸教諭の御好意により掲載した。1～9は灰釉系陶器碗で、1は施釉、2・3は輪花がみられる。また、4・7～9は高台端部にモミ圧痕が確認できる。10～15は灰釉系陶器皿。いずれも深手、無高台。16は施釉陶器卸皿、17・18は土師器煮沸具で、志貴野遺跡で報告した分類に従えば、17が10類、18が2類である。(池本正明)



第26図 矢作古川河床出土遺物

# 図 版

〈開発前の碧海台地〉

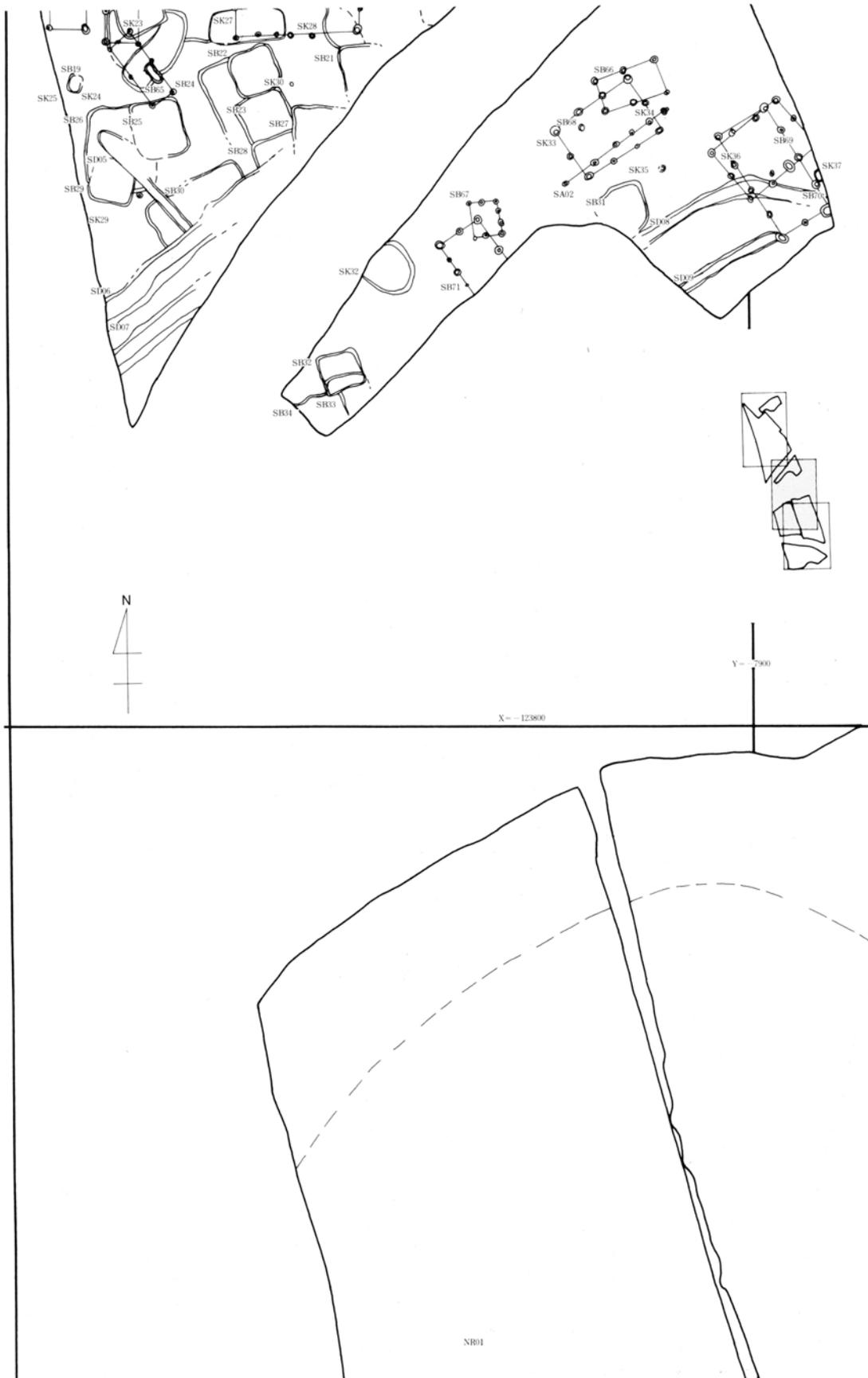
——安城市桜井神社境内——

1989 初夏

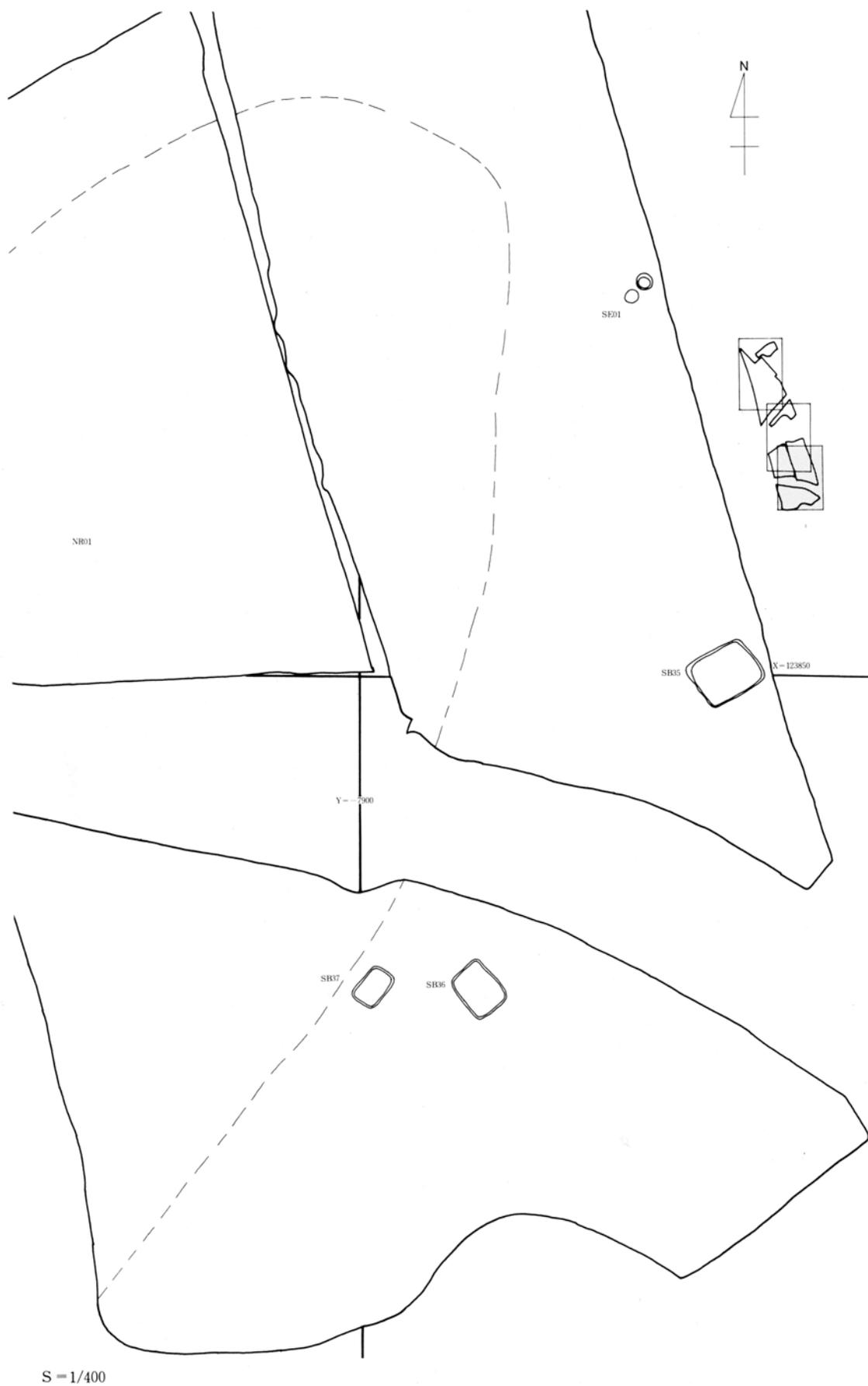


図版 1 遺構図①



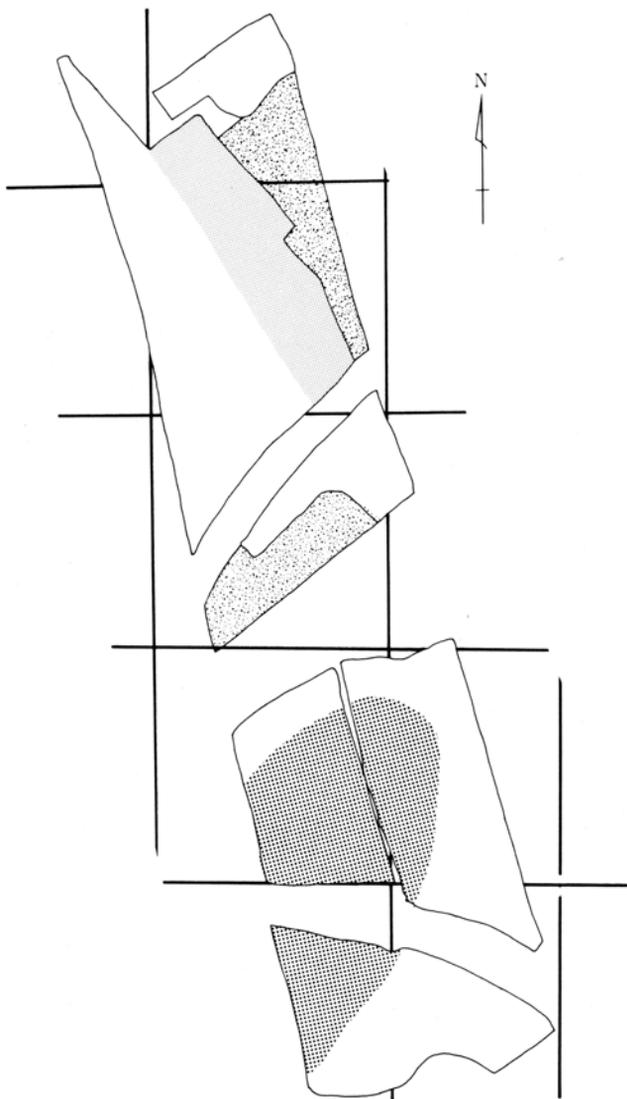


図版 3 遺構図③





昭和62年度調査区全景



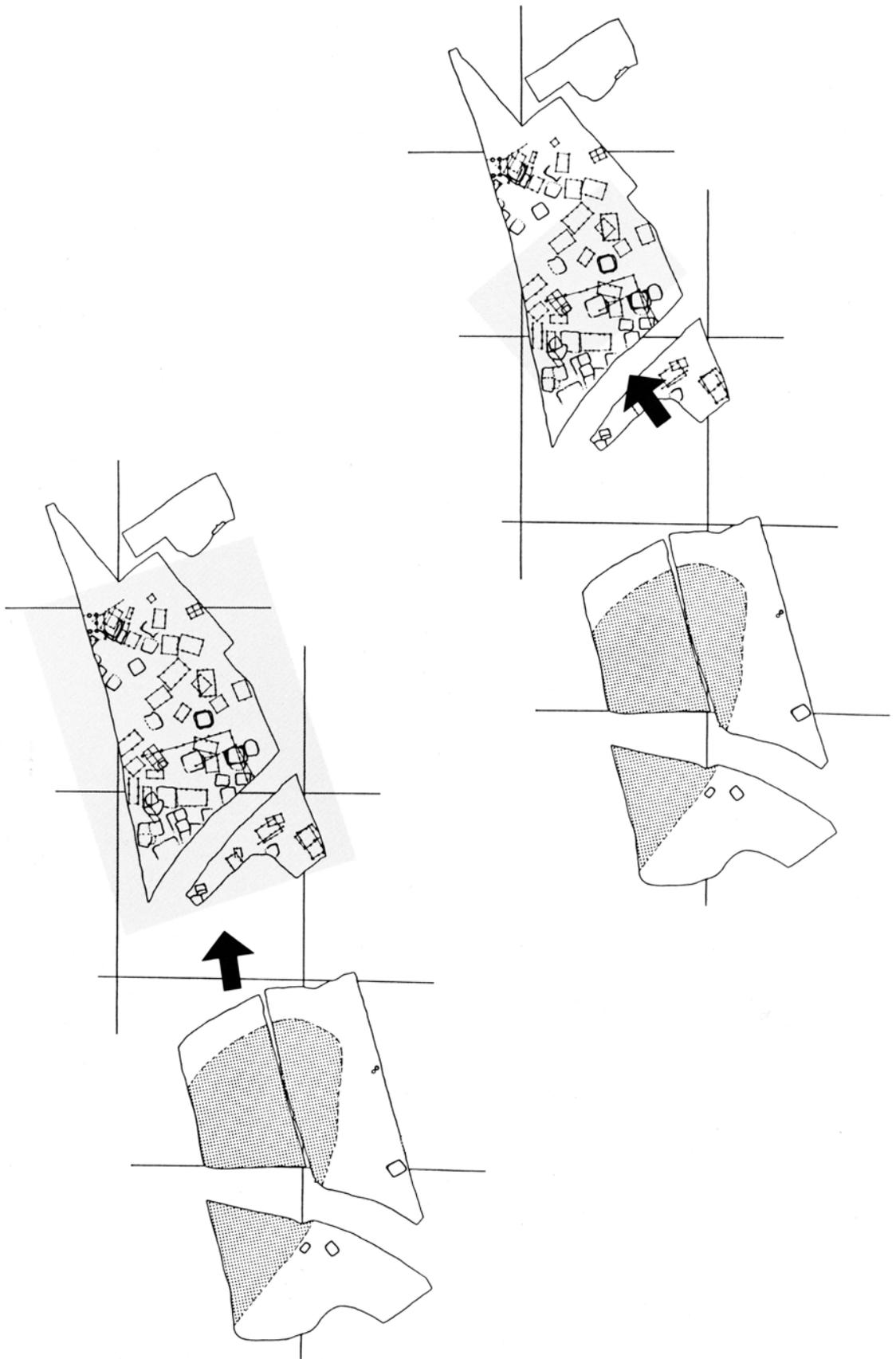
耕作時に検出面を20~30cm程度削る天地返しを受けている

谷の範囲

攪乱部分

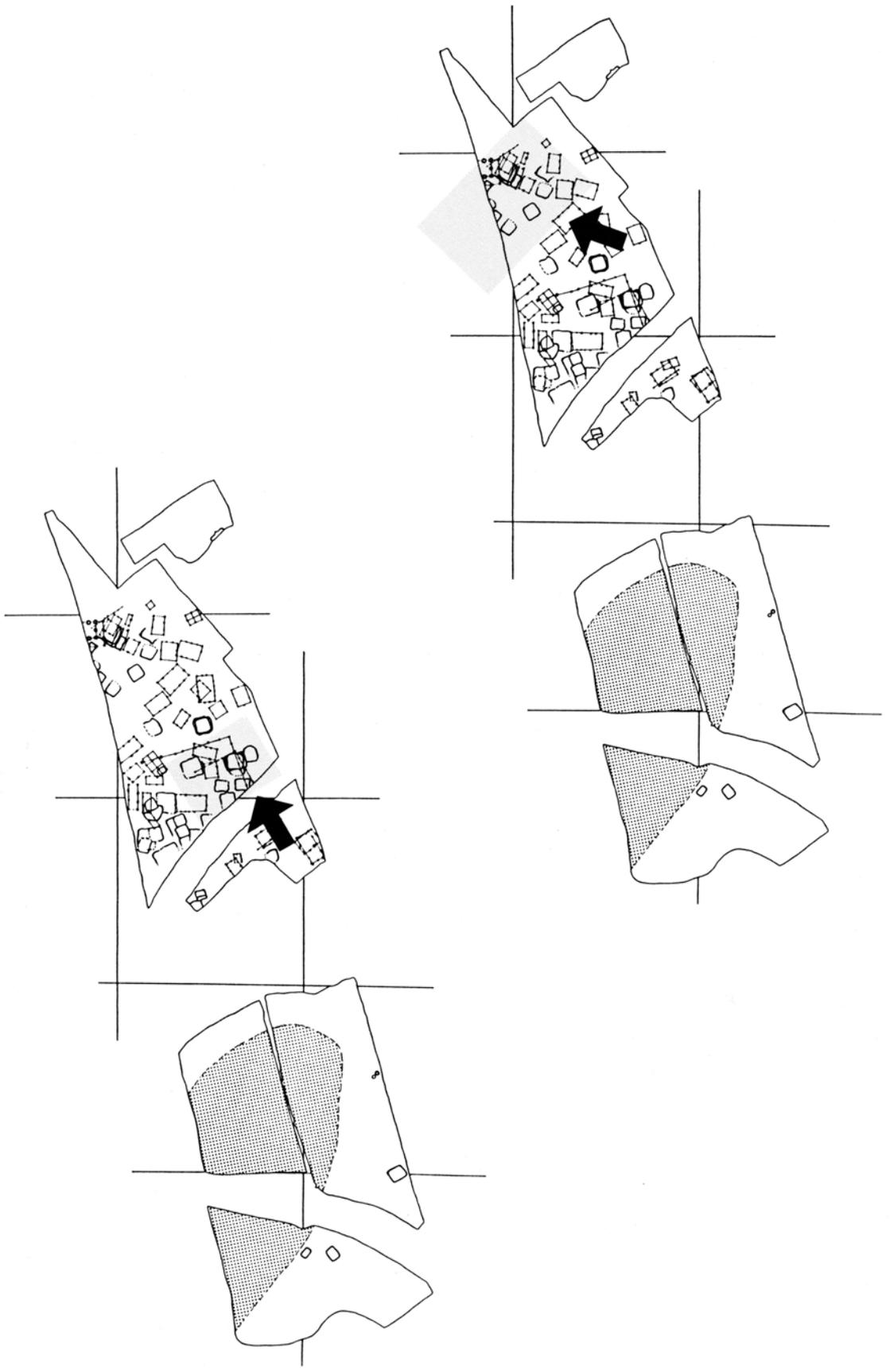


昭和63年度B区全景





上 遺構集中部分  
下 SB11周辺

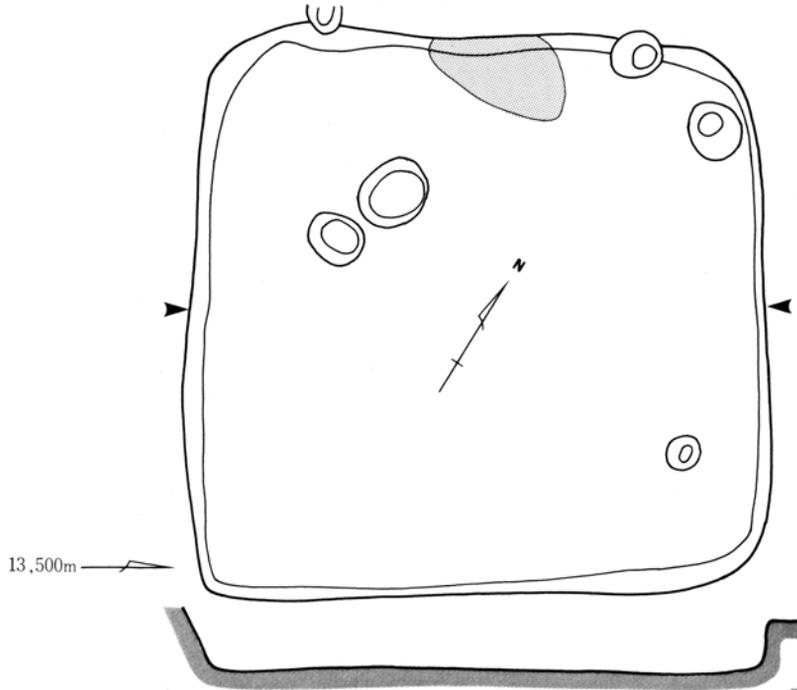




上 SB10~14  
下 SB02~07・38

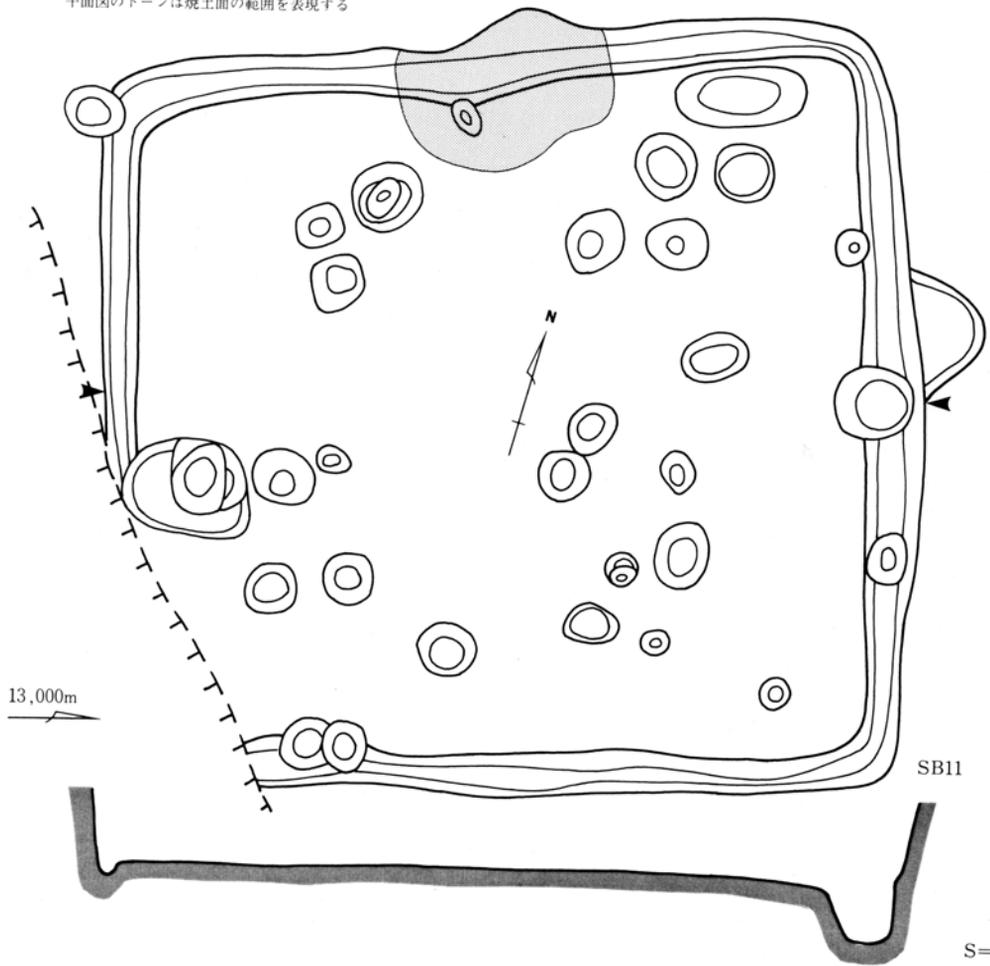


上 SB38  
下 SK07



SB07

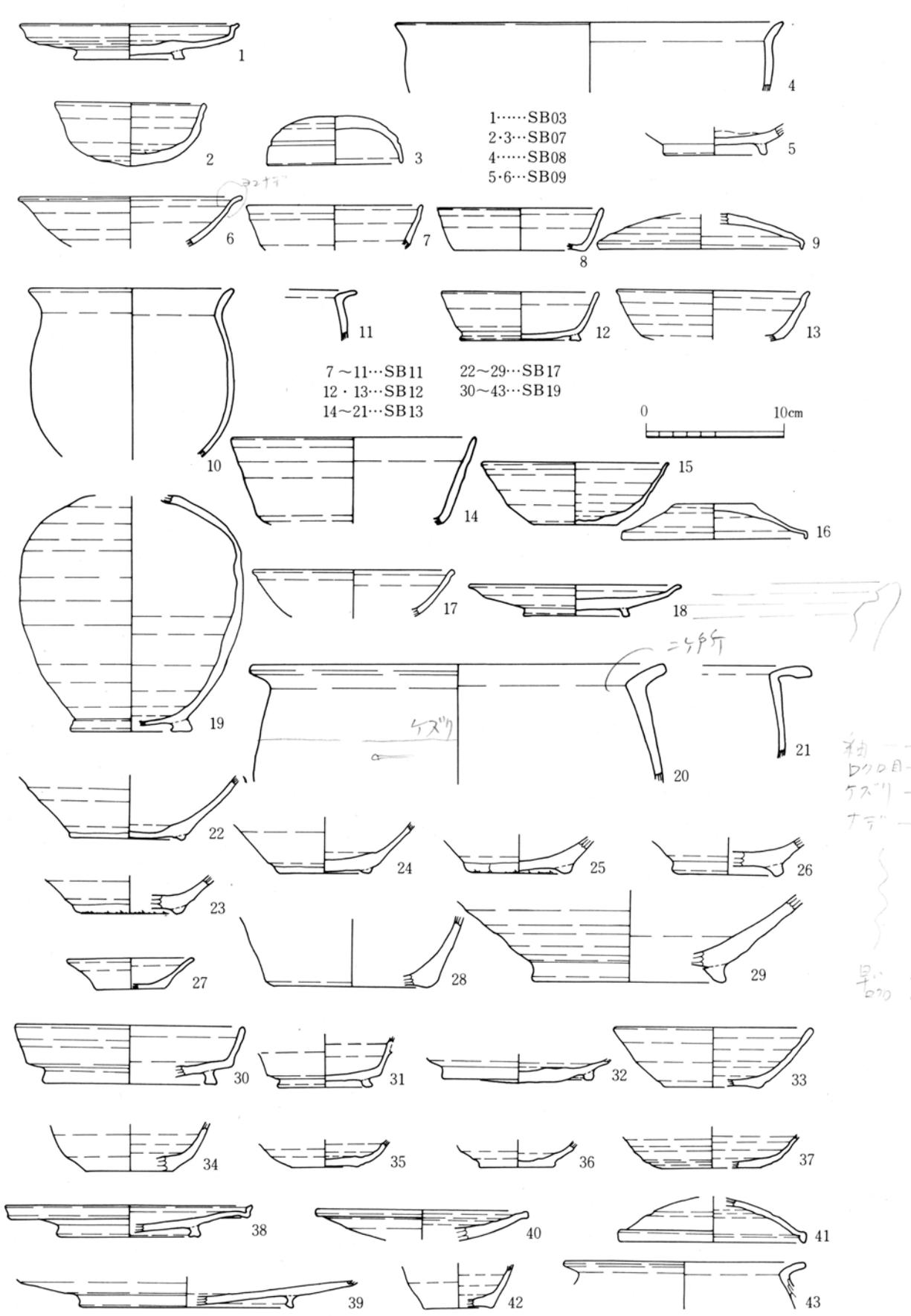
平面図のトーンは焼土面の範囲を表現する



SB11



上 SB07  
下 SB11

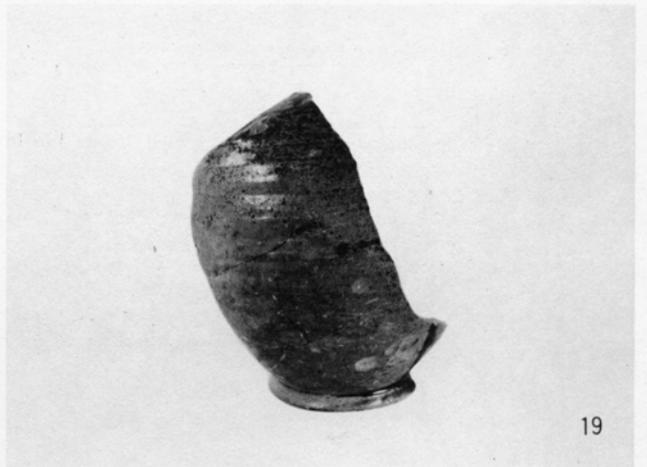
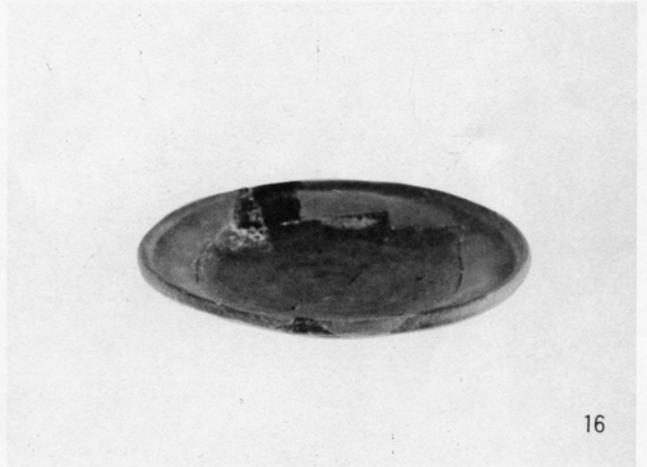
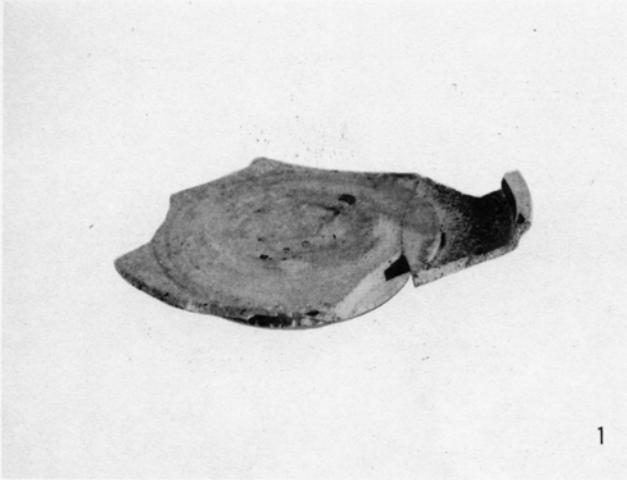


1...SB03  
 2-3...SB07  
 4...SB08  
 5-6...SB09

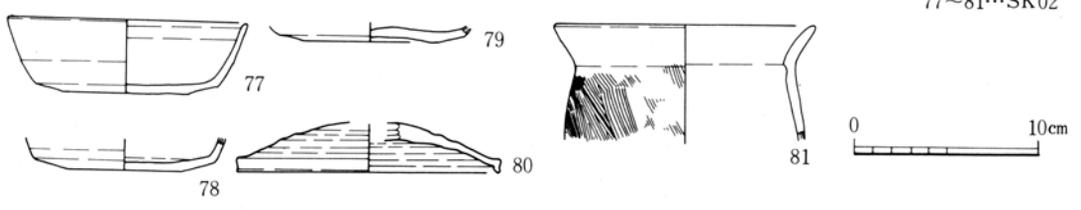
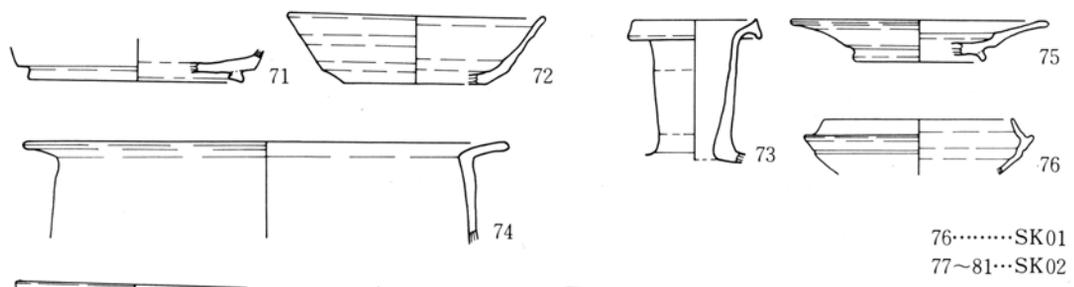
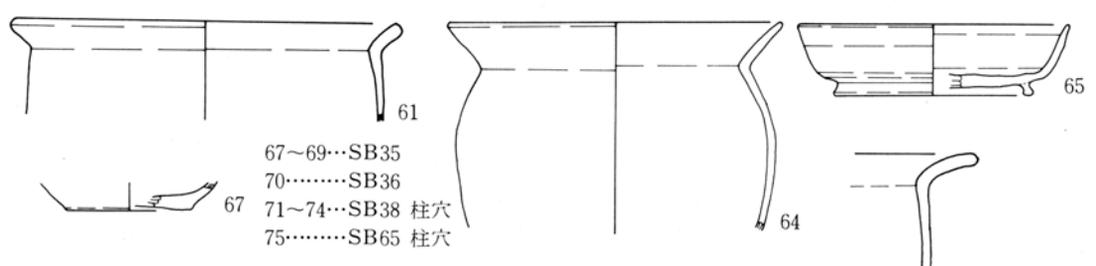
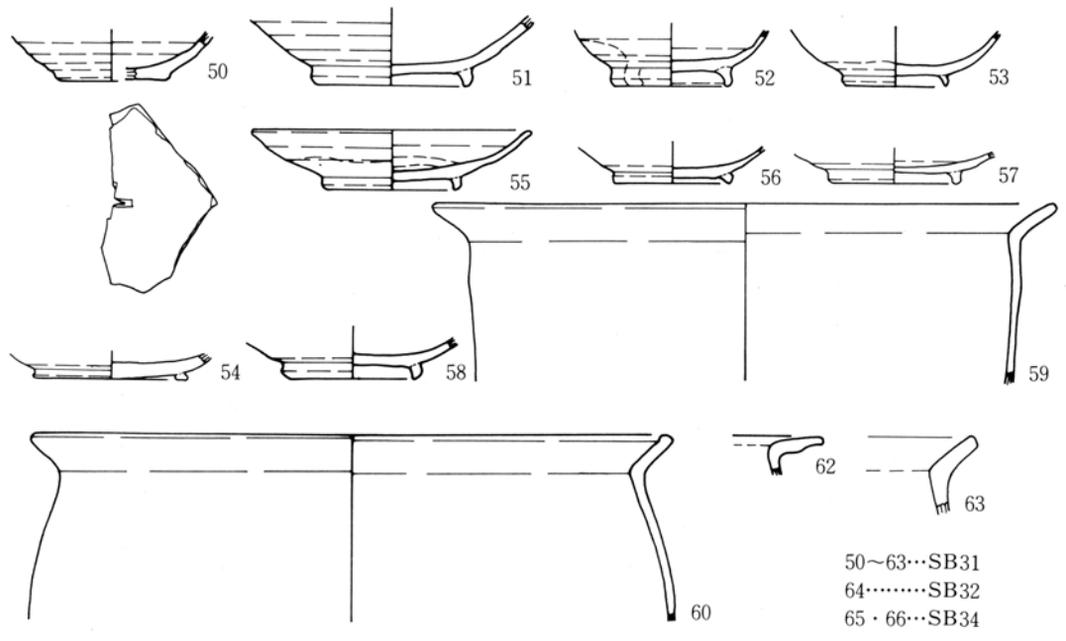
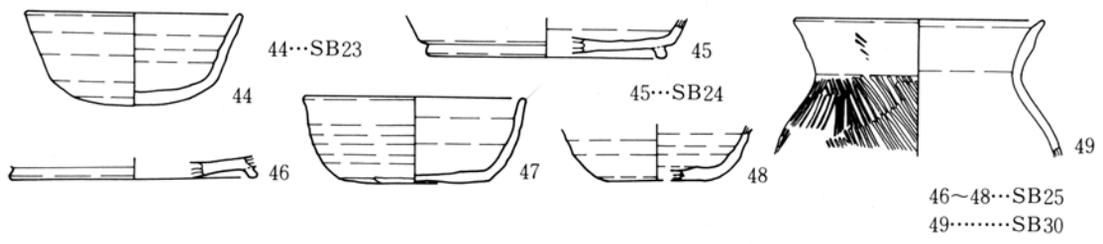
7~11...SB11  
 12・13...SB12  
 14~21...SB13  
 22~29...SB17  
 30~43...SB19

0 10cm

袖  
 □□□目  
 ケスリ  
 ナリ  
 早  
 20  
 20



27

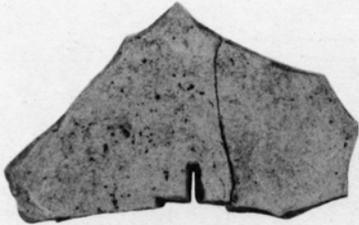




44



47



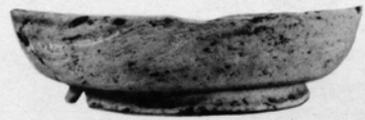
54



54



64



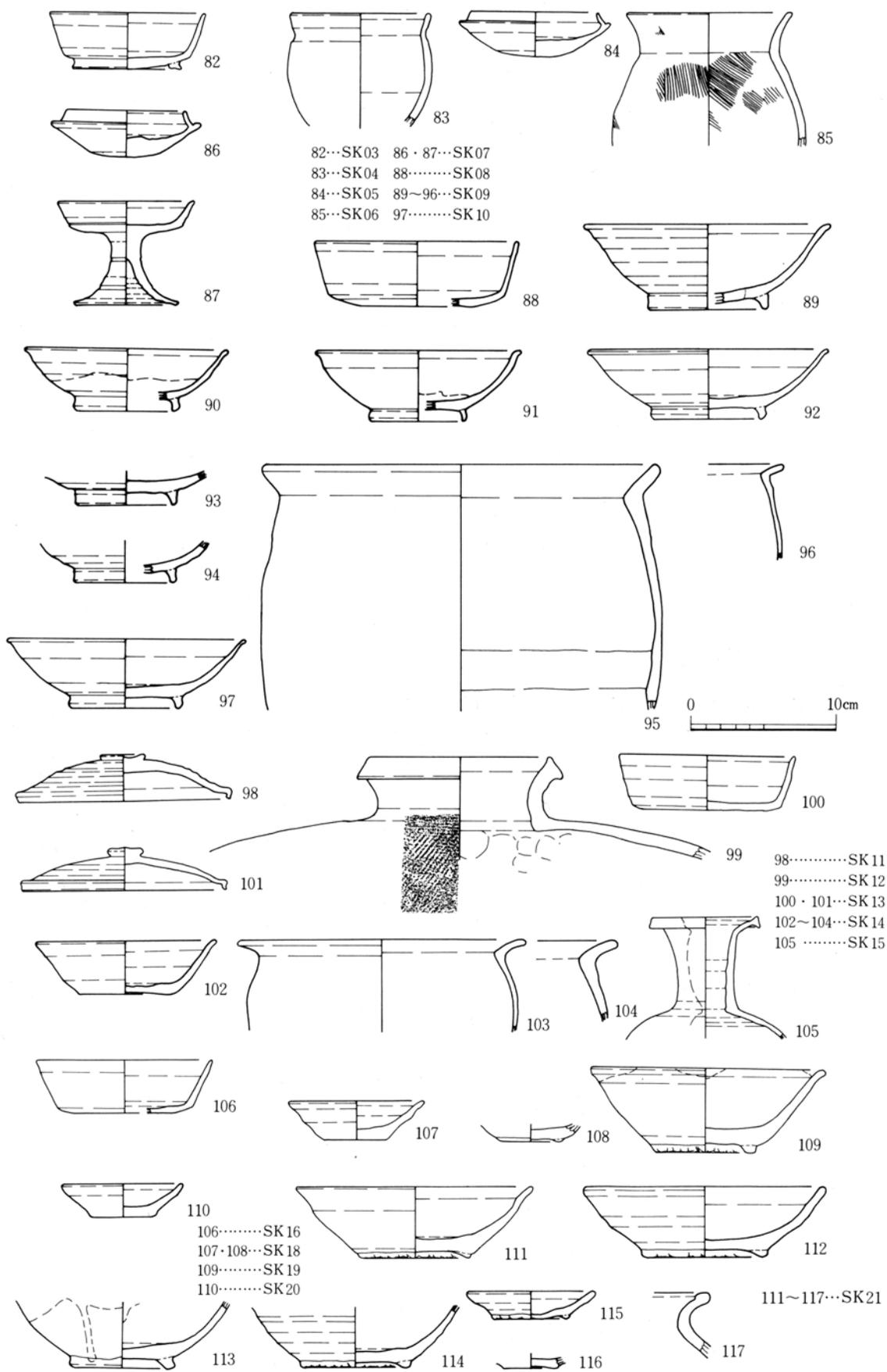
65



73



77





82



86



87



95



91



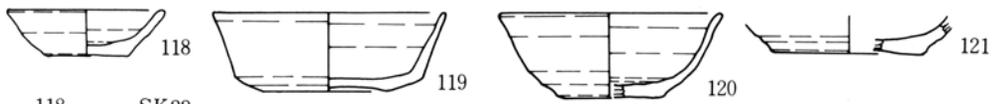
109



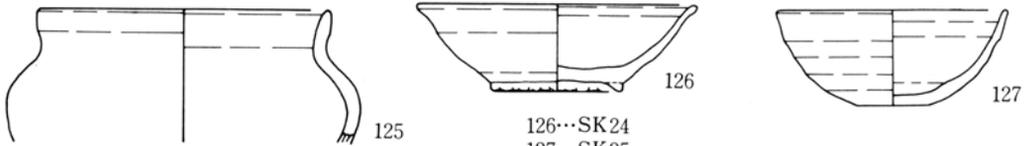
111



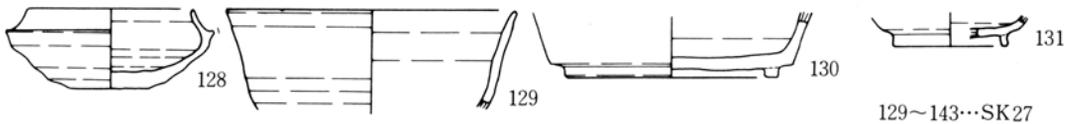
112



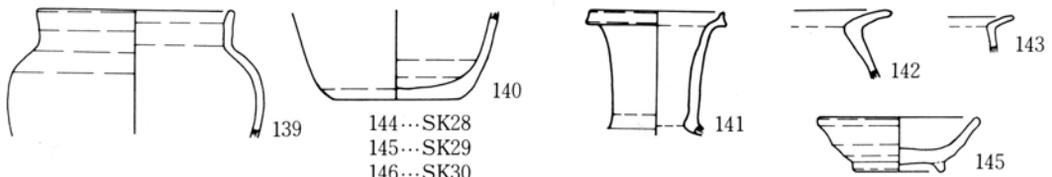
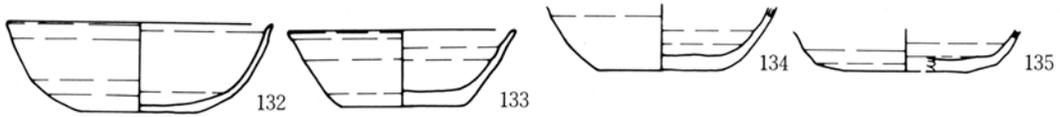
118 .....SK22  
119~125...SK23



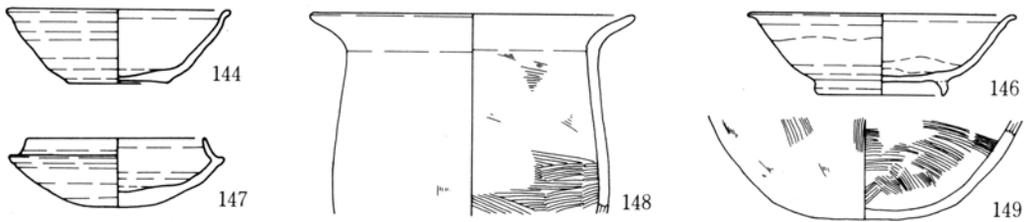
126...SK24  
127...SK25  
128...SK26



129~143...SK27



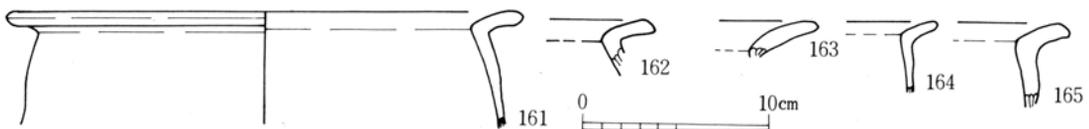
144...SK28  
145...SK29  
146...SK30



147~149...SK31



150~165...SK32



0 10cm



115



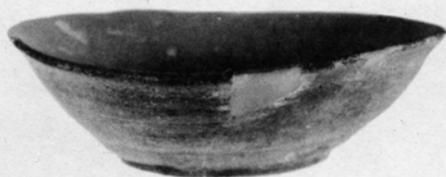
118



144



141



126



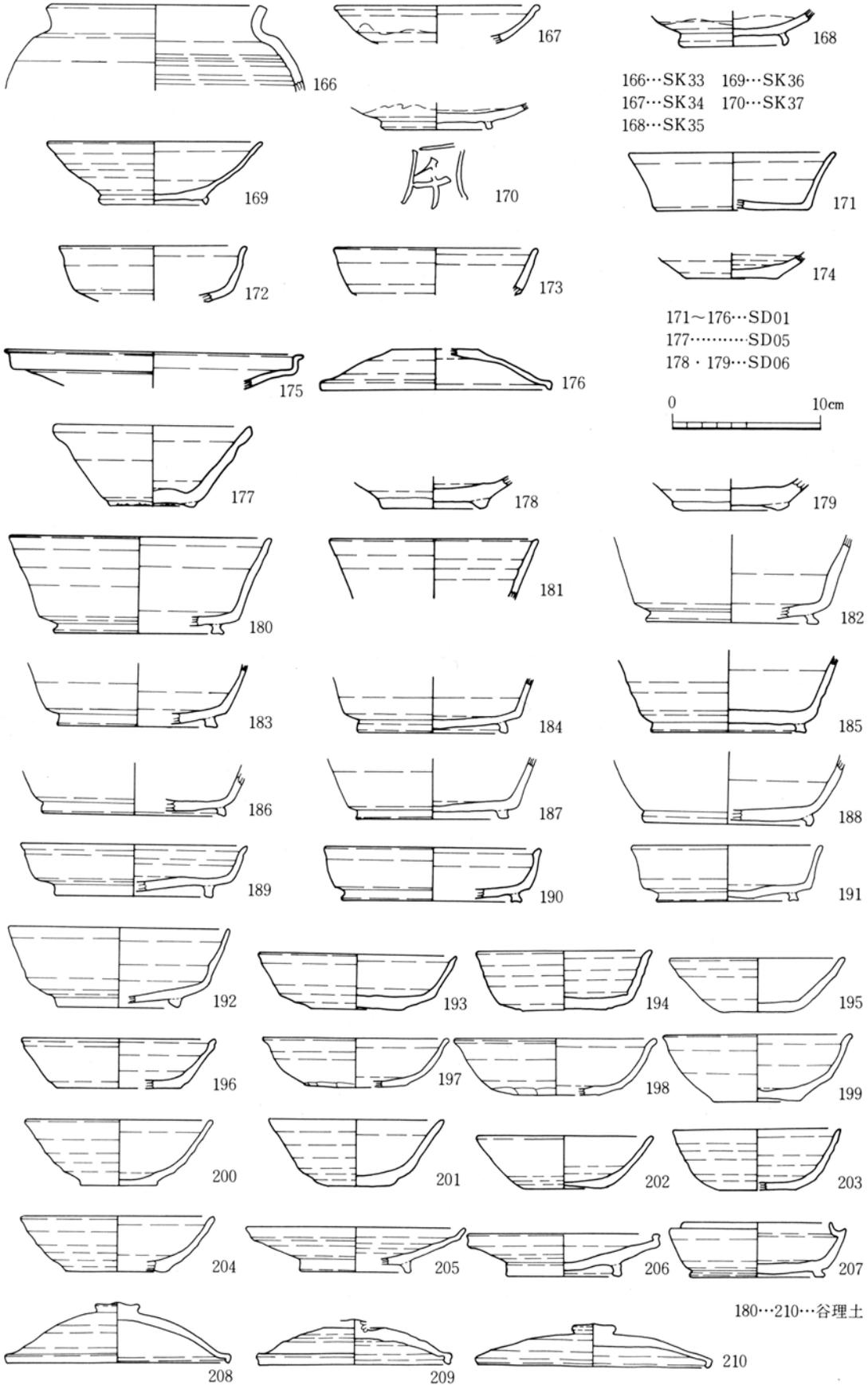
127



147



156





170



170



177



178



184



195



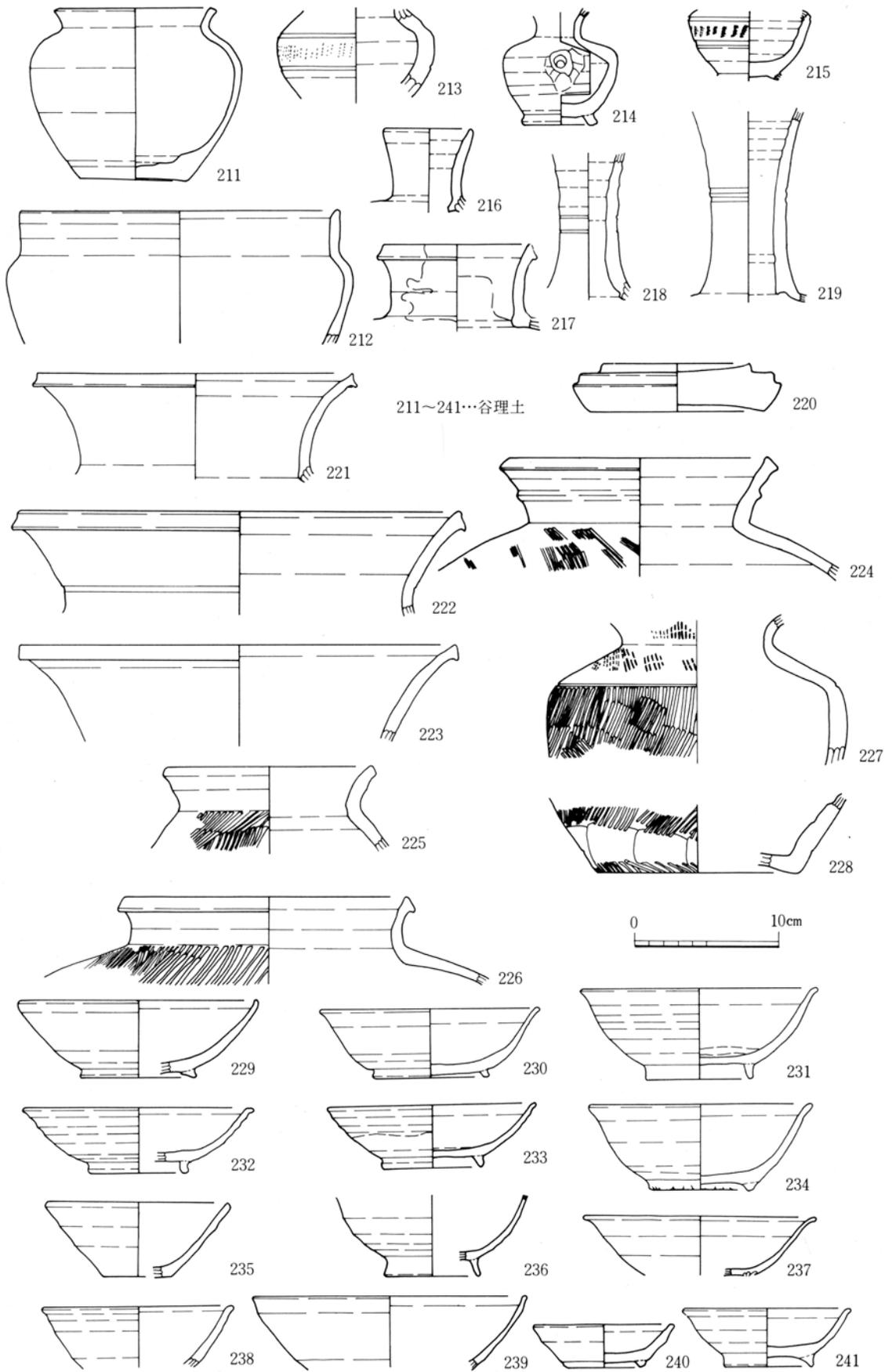
207



208



209





211



214



220



220



229



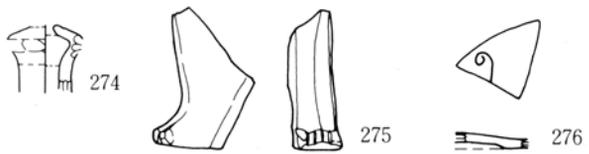
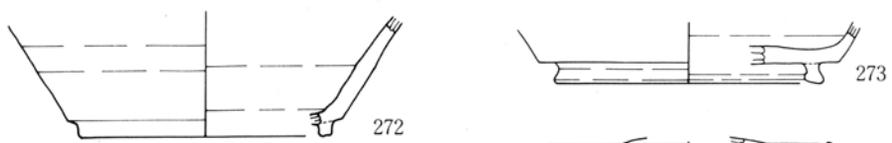
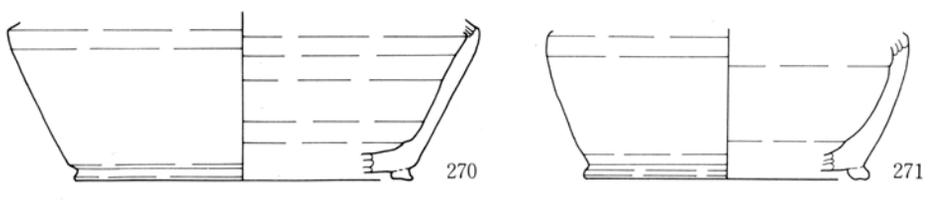
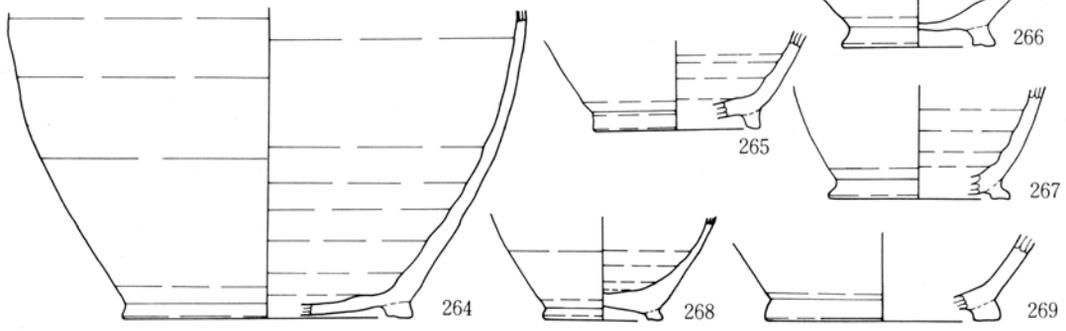
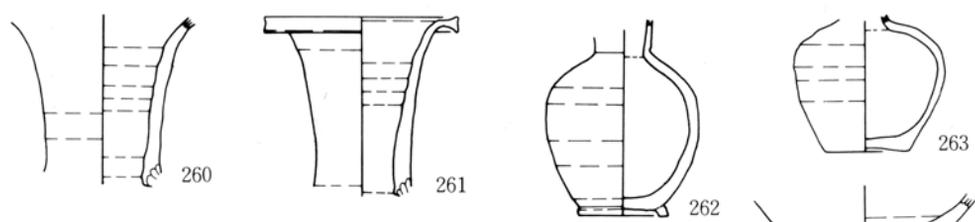
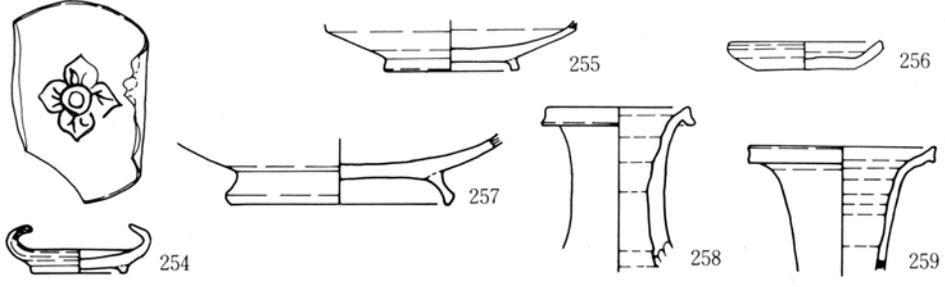
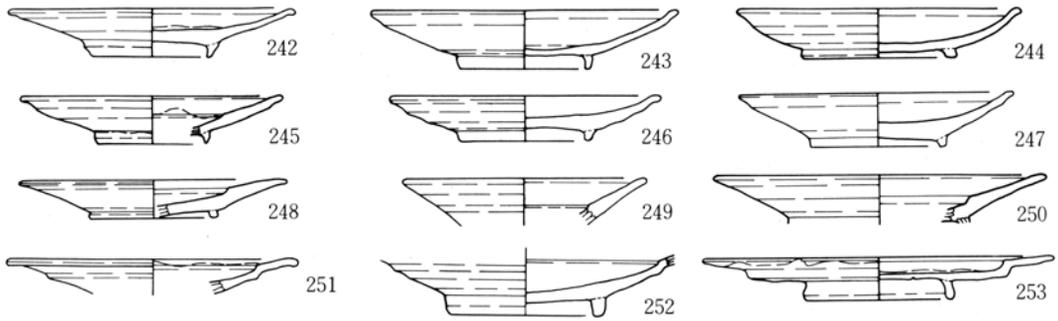
230



234

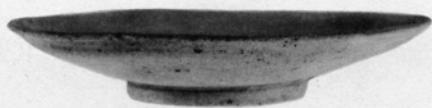


241



242~277...谷理土





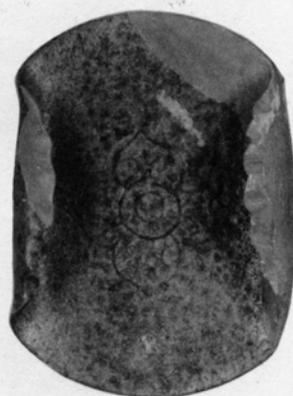
246



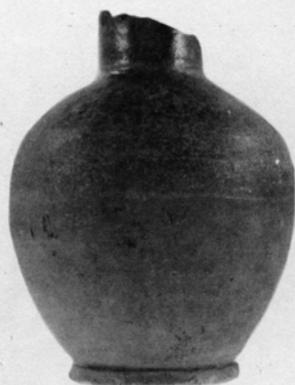
247



253



254



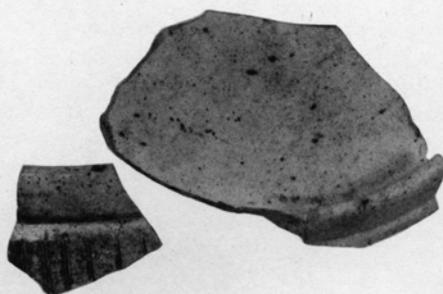
262



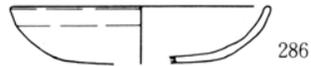
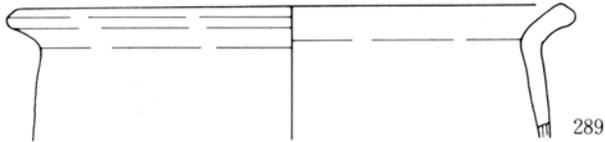
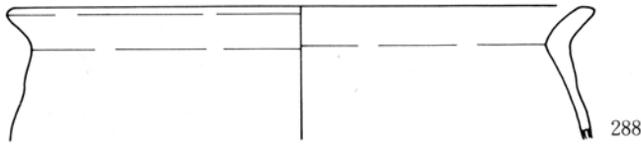
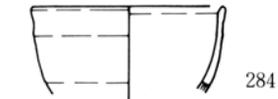
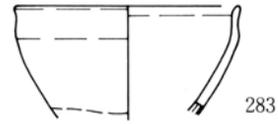
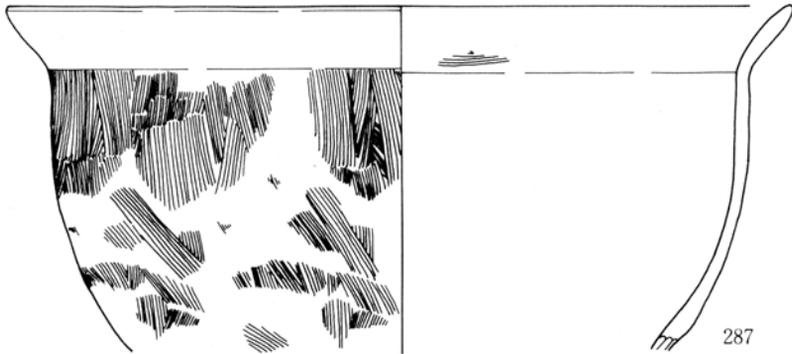
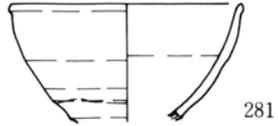
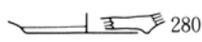
263



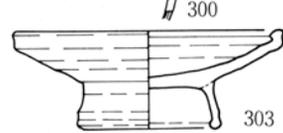
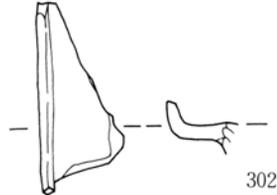
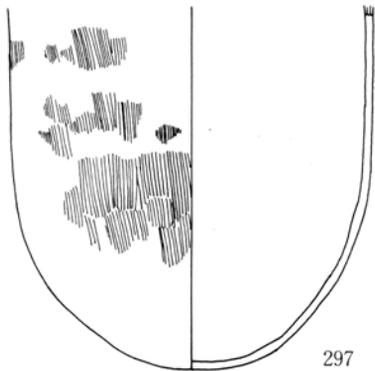
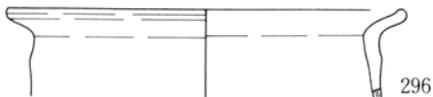
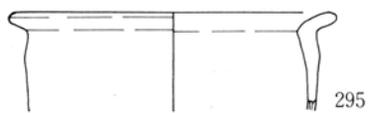
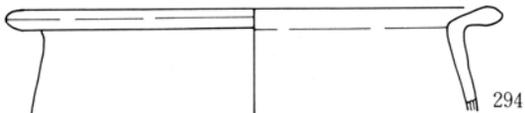
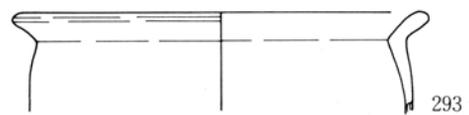
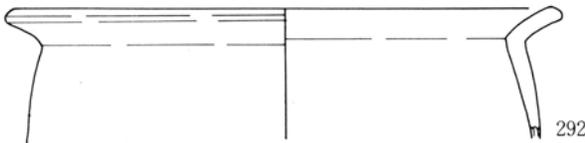
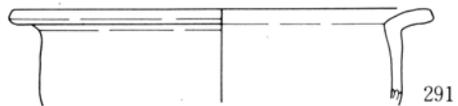
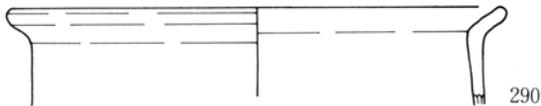
275



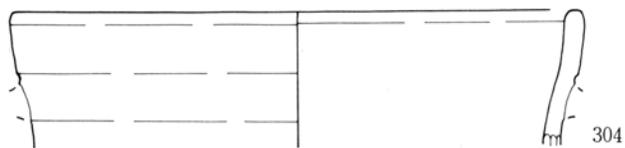
277

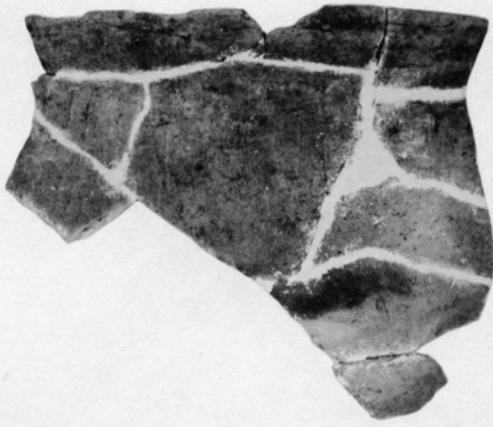


278~299...谷理土



302~304...表土





287



302



281



283



305



306

307



309



308



310



311



312



313



314



315



316



317



318



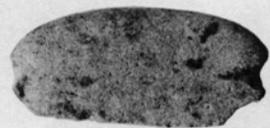
319



320



321

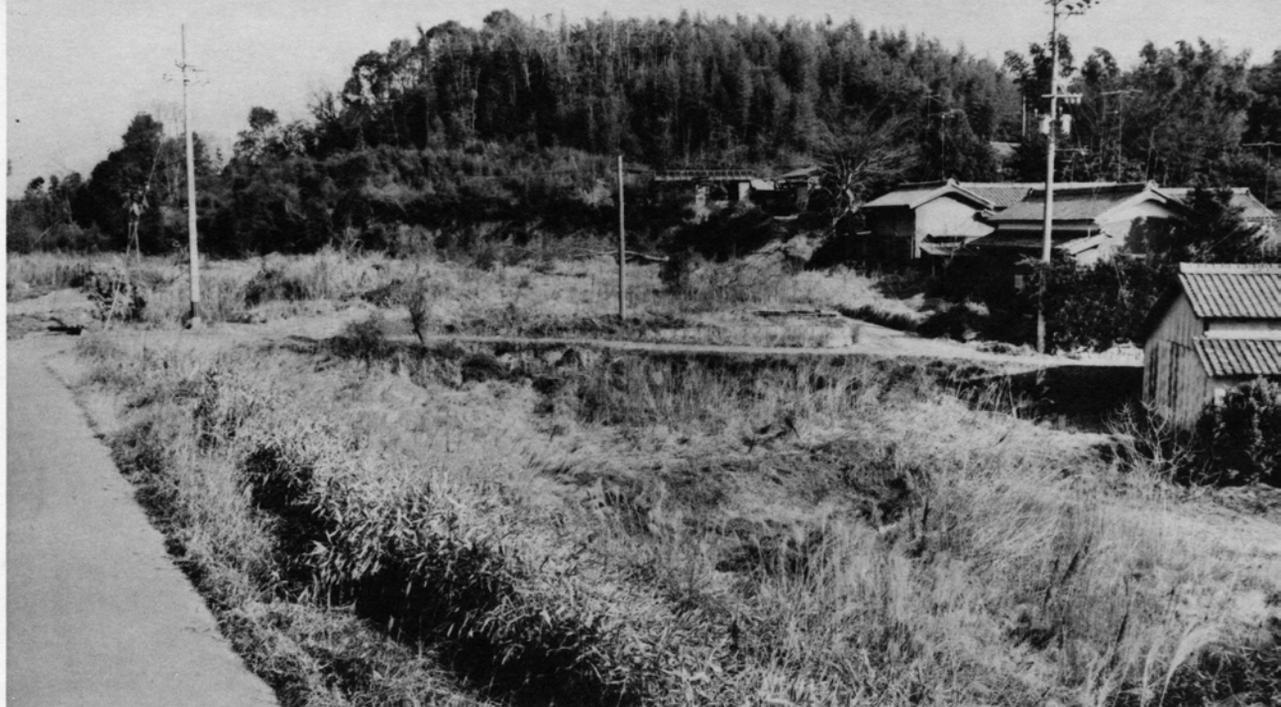


322



323

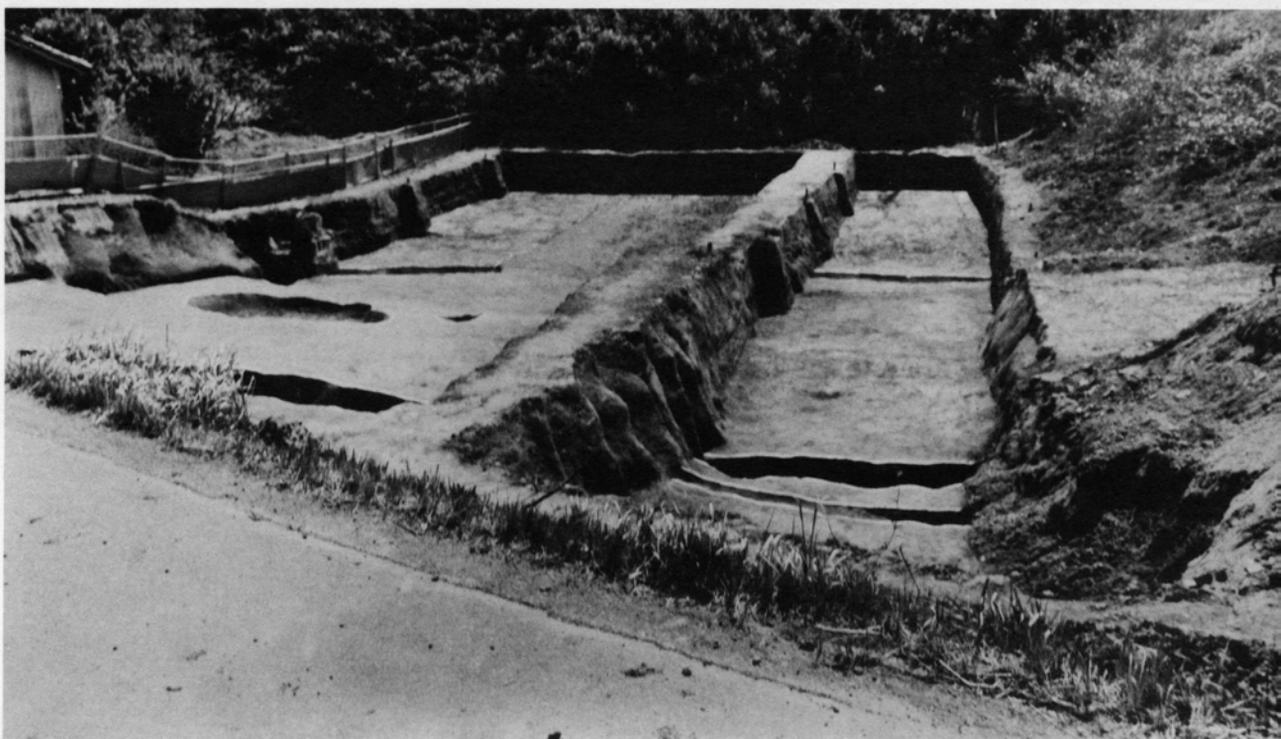
小島遺跡  
調査前風景



調査区全景  
(上段)



調査区全景  
(下段)



---

(財)愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第13集

**志貴野遺跡・小島遺跡**

1990年3月31日

編集・発行 財団法人愛知県埋蔵文化財センター

印 刷 (株)クイックス

---